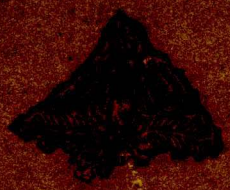
20

# 俳句の作り方味はひ方

[illegible]著



¥ 6.50 (28)

富安風生著

# 俳句の作り方味はひ方

高山書院刊

俳句の作り方味はひ方

昭和二十年十二月二日印刷
昭和二十年十二月十日發行

定價 六圓十錢
特別行爲稅相當額 四十錢
實價合計六圓五十錢

著作者 富安風生

發行者 東京都神田區小川町二ノ一〇 高山金一

印刷者 東京都神田區神保町三ノ二九 明和印刷株式會社 長苗三郎

發行所 東京都神田區小川町二ノ一〇 高山書院
振替東京八八〇〇〇番
電話神田(25)八一〇番

# 内容

（序に代へて）山村にありて想ふ……一
第一章　やさしい俳句……二
第二章　俳句の愉しさ……二四
第三章　季題及び切字……四〇
第四章　寫生……五四
第五章　省略法……六五

第六章　作法心得條々……七六
推敲――語彙の豐富――心と姿――人事の句――大景と小景――模倣について――三多の說――熱心といふこと
第七章　題詠・句會・吟行……九九
第八章　俳句の味はひ方……一〇五
第九章　療養所俳句……一一三
第十章　添削實例……一一四
第十一章　添削指導……一一五

# 山村にありて想ふ

## ―序に代へて―

秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる

誰でも知つてゐる古い歌であります。土用の後をうけて、暑さはまだなかなか嚴しいけれど、雲のたたずまひや、草木の葉摺の音などに、何となく秋のけはひを覺える頃の感じが、實によく出てゐると思ひます。夏から秋へ、目にはさだかに見えないくらゐに、微妙に動いてゆく日本の季節の移り變り、どことなく秋めく風の音に耳を立てて、その移り變りを鋭敏に感じとる日本人の神經の細かさ――まことに日本の風土、日本人の感受性の、獨特の美しい現れであると思ひます。

風の音に、「驚く」といふ言葉――たつた一語のこの文學的表現の中に、われわれ日本人が、「自然」に對して抱いてゐる、無量の思が籠つてゐるではありませんか。子供のやうな純眞さをもつて、「自然」を「驚く」この心持――これこそ日本の文化を貫く一すぢの太い流

であり、民族獨自の性格も、つまりは、ここから出てゐることが多いと思ふのであります。

この古歌に詠はれてゐる「秋立つ」といふのは、古い東洋暦にいふ立秋のことでありませうから、新暦でいへば大概八月八日ころに當るわけであります。青い空に白い雲が流れ、桐の一葉がはらりと窓に舞ひ、畑のもろこしが丈高く伸びて、ふと見ると、道ばたにもう野菊が一輪咲いてゐたりなどして、八月上旬でも秋は忍びやかに訪れてはゐるのでありますけれど、しかし、それらの風物の動きにちつと心をとめて、土用中にもまさる暑熱の中に秋を感じるといふためには、よほど繊細に磨かれた、詩人の神經が必要かも知れません。何といつてもわれわれが、ああ秋だ、と感じるのは、氣象暦で三ヶ月の秋をこの月から數へはじめる、「九月」の聲のかかる時分であります。

新涼の驚き貌に來りけり　　高濱虛子

ここにも「驚き」といふ言葉の活躍であります。殘暑のうちの、一と雨晴れたあとなど、「俄に秋だ」と思ふ甦つたやうな新鮮な感觸が、短い十七字のうちに、觸れば音を立てさう

に結晶してゐる感じであります。そして、その奥に深く隠されてゐる氣持は、やはりわが島國日本の美しい風土に對する讃美であり、「自然」に對する濃かな日本人的な愛情であります。

民族の性格が、民族の詩歌に端的に現れることは、申すまでもありませんが、試みに多くの日本の歌集から、「自然」を詠ふものを除いたら——春夏秋冬と部類分けされたその部分を除くだけでも——あとにどれだけのものが殘るかを考へてみますれば、日本人の自然愛、延いては、この美しい國土を愛する氣持の深さがつくづくわかります。その極まるところは、たうとう自然界の風物を、何か一つ作品の中に詠みこむことを成立の要件とする、「俳句」などといふ日本獨特の文學をまで、われわれの祖先は生み出してしまつたのであります。そしてこれらの歌だの、俳句だのを、決して專門家、職業詩人の專有物とせず、民族詩として、日本人の誰でもがみんな自分のものとして、自ら作つたり人のを讀んだりして、ともどもに樂しんでゐるといふことは、日本のみがもつ、世界に羨まれていい幸福と申さねばなりません。

御承知のやうにわが國では、昔から春と秋とが對照的に見られてをり、古事記にも、春山霞壯夫と、秋山下氷壯夫との、兄弟が現れてゐたりいたします。また古くから、文學の上に、「春秋の爭ひ」などといふことが見えてをります。春の自然美と、秋の自然美といづれが好もしいかといふ爭ひであります。爭ひといつてもこんなに風流な爭ひといふものが、よそ國のどこに又と見られるでありませうか。この爭ひは

春はただ花の一重に咲くばかり
物のあはれは秋ぞまされる

などといふ歌をはじめ、徒然草にも、「もののあはれは秋こそまされ」などとあつたりいたしまして、どうやら春のうるはしさよりも、秋のあはれの方に團扇があがつてゐるやうですが、そんな勝負などはもとより問題ではありません。春秋の爭ひなどといふ文學をもつことそのことに——また、もののあはれなどといふ、きめ細かくこなれた、美しい、恐らく外國語に飜譯も出來ないであらう情緒を傳統して來てゐることそのことに——われわれは限りない民族の誇を感じていいと思ふのであります。

わたしはいま、靜岡縣の山村に疎開して來てをります。何十年かの都會生活の塵を洗つて、かうして田舍で畑の草むしりを手傳つたり、裏山に薪を拾つたりしてゐますと、なくなつた母の懷ろへもう一度歸つたやうな、ほつとした、安らかに樂しい心持がするのであります。それはもちろんわたしだけのものではなく、また單に生れ故郷といふものに對する人間共通の感じだけでもなく、自然を愛し、かくべつ「土」に執着する日本人が、「土」といふ自分の心の本家郷に歸つた喜びから來るものでありまして、やはり日本人だけの、そして日本人のすべてが共有する、床しい情緒ではないかと思ふのであります。

「二百十日頃になると、一夜のうちに夏と秋が決定され、日本の風土で一ばん美しい季節となる」と、敏感な詩人は書く、その二百十日は二週間も前となり、二百二十日からも、もう數日過ぎました。今年の二百十日は

飛んでをる二百十日の蜻蛉かな

といふ誰かの俳句そのままの、まことに靜かな厄日でありました。朝起きて雨戸を繰りますと、すぐ前の青い山が、一晩のうちにぐつと近く前に乘り出したやうな新鮮な顏をして

をり、洗ひ出したやうに、くつきり際立つた山襞の一ところから、紫がかつた霧が立ち上つてゐる、その美しさを、いつも見馴れてをりながら、わたしは又改めて見直したことでありました。さすがに厄日のことでありまして、そのうちに、雲のたちこめた空が、はらはらと小雨を運んで來たりしましたが、その雲の破れ目に透ける空は、藍色が深く、窓の下の、だんだんに疊んでゐる小さい田に、ついついと立ちそめた稻の穗の、すゞ花をこぼすかすかな風もありません。だらだらと谿に傾く山畑で、お百姓が粟の穗を摘んだり、大根か何か蒔いたりして働いてをります。屋根に石置く伏家の石垣の裾には、鳳仙花や鷄頭や、白粉の花。芙蓉は、白が三輪、紅が五輪。そして、ちようど村の秋祭といふので、子供たちがお宮で、朝からどんどこ、どんどこ太鼓を叩き、家をとりまく森の中では、法師蟬が

聲々につくつく法師法師かな　　高濱虛子

さういつた靜穩な厄日風景でありました。二百二十日もほぼ同じ空模樣でありました。この鹽梅で、稻の病氣でも起らなければ、大切な今年の秋の收穫は、相當なものが約束さ

れるといふのも、うれしいことであります。しかし、天候のことは頼みにはなりません。いつ何時南方で生れる颱風が、俄に日本のこの稻田を襲はないとは、誰も保障が出來ないのであります。

わたしは、今も今とて皆さんの前に、日本をめぐる「自然」の、母の慈みのやうな溫かさ、柔かさを讃へたばかりであります。實際それに間違ないのでありますが、しかし又一方で、その颱風のことなどを考へますと、日本といふ群島の氣象風土は、地理學者も申しますやうに、必しも溫和靜穩とのみいふことは出來ないので、われわれを子供のやうにただ甘えさせばかりはしない嚴しいものをも持つてゐることに氣がつくのであります。わたしは、いつか、或る歸還作家のかいた文章の中に、とろりと青く凪いだ南方の海から、だんだん日本の領海に近づいて、やがて激しい冬浪が屹つ岩を嚙んで白く碎け散つてゐる岸に舟を着けて、身の引緊るやうな母國の風土の凛烈を感じた、といふ一節のあつたことを忘れません。シベリヤとか、熱帶とかと比較すればともかくでありますが、「日本の冬は寒帶におかれ、夏は熱帶におかれる」と書いた人があるときくらゐで、日本の寒暑の變り

は、相當はげしいのであります。その上に、季節風も襲へば、霖雨もあるし、地震の脅威にも絶えず曝されてゐるのであります。植物や動物の種類に惠まれてゐることは事實でありますが、國土が本來「そじしのから國」――天然資源に乏しい痩土――であることは、古事記神話も、ちやんとこれを認めてゐるのであります。今も、わたしは山に對する机にもたれて、さすがにどこかにあらしの氣配を孕む雲を眺めながら、一見美しく柔かい日本の氣象風土がもつ、かういふ冷嚴な半面を、いまさらのやうに思ひ返したことであります。

かういつたからとて、わたしは、この國土の天産の貧困を、いたづらに歎くものでもなければ、この暑さ寒さがなければいい、などと思ふわけでは毛頭ありません。いや、それどころか、この天惠の貧しさゆゑにこそ、われわれの誇とする耐乏の精神、忍從の德性とともに、健かな肉體が鍛へあげられ、また激しい四季の變轉や天變地異の環境にあればこそ、日本獨自の美しい藝術と文化を作りあげ得た感謝を、ますます深くしてゐるくらゐであります。

# 颱風に地震に鍛へし民ぞかし

片岡奈王

われわれは、この颱風や地震の暴威を、また天然資源の貧寒さを、寧ろ幸福と感じ、これに耐へ、これに鍛へられた、この高い精神をこそ、民族の誇とすべきだと思ふ——そんな感懐に耽つてゐるわたしの顔の前を、風もないのにほろほろ、ほろほろと、一本の槐の樹が落葉を急いでゐます。何といふ果敢なく美しい、同時に又、嚴として動かすことの出來ない、強い現實の相でありませうか——

いまさら千餘年の昔に遡る聖德太子の憲法を引くまでもなく、「和」をもつて、よろづの基とするのが、日本精神の本來であります。世界の平和を軫念し給ふ大御心によつて、戰爭は終結しました。夢のやうな現の八月十五日、あの日をもつて、日本の歷史は嘗てない大轉向をいたしました。われわれは生れ變つて、われわれの前に開けた、はるばると遠い荊棘の道を、恐れずためらはず、しつかりと踏み出さなければなりません。道は新たであります。しかし民族の固有するよいものは萬代不易であり、また永遠にますます磨かれてゆかねばならぬのであります。

耐へよと大みことのり汗(あせ)鹹(から)し
汗の手をかたくとりあひ共にゆく　　風生

（二〇、九、一五AKより）

本書は昨年AKから放送した原稿に整理を加へ、若干の補筆を試みたものであります。また、序に代ふるこの一文は、戰爭のすでに終結した今年の秋、同じくAKから放送したものの原稿であります。本書の序に代へて、この一文を敢てここに掲げるのは、著者に少しく心あつてのことであります。その心持を多少でも讀者に酌みとつてもらへれば仕合せであります。

昭和二十年九月二十日

北遠上阿多古村假寓に於て

富安風生

# 第一章　やさしい俳句

本日からこの「療養所の時間」をかりまして、初學者のために俳句の作り方味はひ方についてお話することになりました。俳句がもう十分腹にはひつてをられる方にとつては、わたしのこれからのお話は、定めしまどろこしいことだらうと思ひます。もちろんさういふかたの多少の御參考とはなるはずだと信じますが、わたしはそれよりも寧ろこれまで俳句に全く指を染めてゐない——これから新たに俳句の門に入りたい、と思はれるかたに向つて、俳句の手ほどきをしたいと思ふのであります。或はまた現在俳句に對して格別の關心を抱いてをられない方に向つて、俳句をお勸めしてみたい——殊に御病床の友として俳句は必ず役に立つと思ふから、試みに始めて御覽なさい、そしてそのためには大體こんなふうにしてはひつてゆかれたらよろしからうと思ふ——さういふことをお話してみたいのであります。

わたしは最初にまづ、俳句は極めてやさしいものである、作らうと思へば誰にでも作れるものである、といふことを申し上げたいのであります。もちろん一藝一能、いかなる藝道にいたしましても、その堂奥を窮むるの容易でないことに、勝り劣りはないでありませう。俳句といふ文學の道が、奥底のない深い道であることは、他の文學と變りばないといたしましても、少くも、はひるにははひり易い、他の藝道と比較して、一ばんふみこむ閾が低い、といふことはいへると思ひます。必しも高い文字の智識を必要とせず、深い人生經驗がなくともよろしい。はた又、表現技術のむつかしい修練をまつ要もない、素面、素手、何の用意ももたず、もつものは、素直な、正直な、心のまことただ一つ、それだけでとび出してゆけるといふものは、藝道いづれを見わたしても、まづ俳句に如くものはないといつてよろしいかと思ふのであります。であればこそ、子供にでも俳句は出來る、少年少女——どころか、頑是ない幼年の口から出たものまでが、ともかく俳句作品として、後世に殘る、中には堂々大人の壘を摩する子供俳句さへある、といふわけになるのであります。試みに二三の實例をあげて見ませう。

來い來いといへど螢はとんでゆく

これは、芭蕉とほぼ同時代の、鬼貫（おにつら）といふ人の、八歳の時の作だといはれてをります。

初雪や二の字二の字の下駄の跡

上五字の「初雪や」は、「雪の朝」が正しいさうでありますが――これもかなり人口に膾炙してをる句であります。同じく元祿時代の、田捨女（でんさん）といふ女流作家の、僅かに六歳の時の作であると、ものの本に載つてをります。

我と來て遊べや親のない雀

これは一茶が、自分の六歳の時に作つたものだと、一茶自らいつてゐる句であります。

これらの事實が、どの程度まで眞をおくに足るか、また、これらの俳句の文學的價値がどう評價さるべきかは、姑く別として、後世に貽るかういふ俳句を、今日ならばまだ國民學校にも上らないくらゐの年齡の子供が作つたと傳へられてゐることを注意したいのであります。さういふ例は、俳句以外にはめつたにないことだと思ひます。

芭蕉七部集といへば、俳諧の古典の最も重要なものの一つでありますが、その一つの

「曠野」といふ選集の中に

かるぐと笹のうへゆく月夜哉

といふ一句がありまして、作者は十二歳、梅舌となつてをります。十二歳の少年の一句が、堂々と、芭蕉はじめ諸大家の作と、ちやんと肩をならべて收錄されてゐるのであります。これはもう少年の俳句を、たとへば子供の自由畫を鑑賞するやうな、割引をして評價してゐるものではないと思はれるのであります。

耳遠い昔の話でなく、今日の俳句に例をとりませうか。――これはいつもわたしが引合に出す例でありますが、高濱虛子先生が、嚴選に嚴選を重ねた上で世に問うてをられるホトトギス雜詠選集夏の部に、九歳文代といふ少女の作として

はだかの子はらをたゝいて逃げにけり

といふのが載つてゐます。この少女のお父さんは、俳人田村木國氏であります。氏は年來療養所慰問のために各地を巡つてをられるので、木國の名は全國の白衣勇士諸君に格別親しまれてゐるはずであります。さてこの少女俳句でありますが、一應句の意味を解いてみ

ますと、子供が裸でゐる――或は行水のあとか何かかも知れません――お母さんとか姉さんとかが着物をもつて、うしろから着せかけようとすると、裸でゐるのがうれしい子供は、いやだいやだといつて逃げる、自分の裸のおなかを、ぺちやぺちやと、兩手で叩きながら、よちよちと逃げ廻る――といふのでありますが、子供の樣子が目に見えるやうに躍然と出てゐるではありませんか。これは主に中七字の「はらをたゝいて」が、ものをいつてゐるのであります。ここを捉へ得たのは、決して大人の智慧ではなくて、無垢の少女の曇りのない眼であります。少女のことでありますから「裸」といふ字、「腹」といふ字、「叩く」といふ字、みな假名でかかれてをります。その文字を、一字一字眺めながら、「は、だ、かの子、は、らをた、たいて、逃げにけり――」と讀み返してをりますと、大人のわたしどもも、無邪氣な子供の世界に引き込まれて行つて、ほほゑましく、明るい氣持を誘はれるのであります。一少女の作たるこの句の力は、大人の力作と比較して少しも遜色がないのであります。智慧づいた大人の及ぶことの出來ない、子供だけの世界を見せてくれてゐるのであります。

これはわたしの放送の後日譚でありますが、この放送をきかれた川柳の或る大先輩からわたしは手紙を貰ひました。それによると

裸ッ子腹をたたいて逃げるなり

といふ古川柳があるさうです。（一字くらゐわたしの記憶違ひがあるかも知れません。）川柳のことを全く知らぬわたしは、はじめてそのことあるを知つたのであります。着眼もいひ現しかたも全く同じであります。ただ言葉のはしにちよつとした相違があります。同巧異曲の兩者をならべて、俳句と川柳――母胎は一つであります――との交渉を考へるのも面白いことでありますが、それは餘りに專門的になりますので、ここでは割愛します。

さて話を元へ戻しまして、ホトトギス雜詠選集の「裸」の句には、今の句とならんで

おちんこも欣々然と裸かな

といふ一句が採錄されてをります。これは相島虚吼氏の作であります。虚吼氏は古い新聞人であり老政客でありまして、その洒落な風格がさながらに流露した面白い句を數多く殘してゐますが、この句なども正しくその一つであります。――見るからに健康さうな子供

の裸、一糸も纏はぬ天眞の眞裸、ちよんとあるおちんこまでも欣々と喜んでゐるが如くである、といふ句意であります。「欣々然」といふよい言葉が實に巧みに使ひ生かされてをります。「おちんこ」などといふ一見卑しがられさうな言葉を大膽卒直に出しながら、少しも低卑な感じを起させないどころか、上品で明るく愉快に、人をして覺えず破顔させずにはおかない實に愉しい一句となつてをります。同じく子供の裸を詠んで、虚吼氏のこの句と、少女文代さんの「はらをたたいて」の句と、彼は彼、これはこれで孰れも面白い。少女の句が、九歳の少女の作る句が――少女といふ割引なしに、この老人の句と伍して劣らず面白く鑑賞されるといふこのことに注意したいのであります。――俳句とは、さういふものなのであります。

俳句は子供にでも出來るといふことをまづ頭において戴きたいために、古今の子供俳句の例をあげてみました。そして話が少し側道にそれた感がありますが、ここで少し眼を他の方に轉じて見ませう。昨年の冬、ベルリンが大がかりな空襲をうけて、日本の大使館にも被害があり、館員は、よそに避難したが、その假住居の中で、みんなますます元氣に働

いてゐる、しかも朗かにこんなふうに俳句など作る餘裕をもつてゐる、といふやうな通信が新聞にのつてをり、俳句が三つ四つ紹介されてゐました。わたしはその記事を讀んで、日本人といふものをしみじみと思ひ、何だか涙ぐましく嬉しい心地がいたしたことでありました。その大使館の人達は、多分、平常俳句を習つてゐたわけでもなかつたらうと想像します。又、つひこの間の新聞にも「ラバウル空の決戰」といふ現地勇士の座談會記事の中で、今迄俳句を作つたことのない方が作り始められた話を、多分お讀みになつたかたもおありでありませう。もちろんこれは、軍人の場合のみのことではありません。どんな職業どんな階級の人の場合でも、同じであります。「僕にはどうも俳句なんて柄にない」といふ友人に向つて、「君は日本人だらう。日本人である以上、俳句が、やつて出來ないはずはない。」と誰かがいつたといひますが、まあそんなものでせう。その代り又、日本人でなければ、教へても俳句のほんとうの味はなかなかわからない、そこが俳句獨特のいいところなのであります。何故俳句が、日本人に限つた文學であるかといふ説明は、ここではわざと省きます。ただ俳句は、日本人の誰にとつても、本來身についたものなのだといふこ

とだけを、知つて戴きたいのであります。この點は、實は和歌についても同じにいへることであります。誰も申して居りまするやうに、日本獨特の和歌俳句には、他の藝術と違つて、――殊に西洋の藝術と違つて――專門家といふものがありません。少數の指導者は別として、作家全部が素人である。しかもその素人作家は、日本人全部にゆき亘つてゐる。實際どんな人でも、生死の關頭に立つ――とまでなくとも、何か大事にぶつつかると、ふと一句やつてみる、腰折れ一つ口ずさむ、これが日本人であります。「すべての日本人は詩人である」といふのは、內村鑑三氏の言葉だとか聞きますが、形容していへば、そんなものでもありませう。かういふ文學は、世界に類例がないのであります。日本人は、生れ落ちるから和歌俳句の種子を、心の土に抱いてゐるのであります。この種子は、日光と雨露の惠みをさへ得れば、すぐに芽を吹かうと待つてゐる種子なのであります。それが芽を吹かずに終る――俳句を作らないで終ふ――といふのは、ほんのちよつとした皮切をされないためといふだけのことであります。「俳句は言葉が簡單だから、思ふことがいへない、むつかしい。」――よくさういふことを申す方があります。その考へも確かにまことで

あります。しかしそれは堂奥にはひつた後のことでありまして、まづ閾を跨ぐときにはさうむつかしく考へず、寧ろ反對に、言葉が短かいからこそ、手輕く、何の造作もなく、片付けることが出來る——かうもいへるのであります。早い話が皆さんは、私のさきに擧げました子供俳句の例をお聞きになつて、なんだ、「そんなものでいいならわけはない、自分にだつてすぐ出來る。」といふ氣がなさるでせう。その通りです。誰にだつて出來るのです。やらうとさへ思へばわけないことで、憶劫がつて手をつけないからいけないのであります。

正岡子規の「俳諧大要」といふ小冊子がありますが、その中には修業第一期、第二期、第三期と分けて說かれてゐる。その第一期、卽ち初學の時代の心得として、こんなことが書いてあります。

「一、俳句をものせんと思はゞ思ふまゝをものすべし。巧を求むる莫れ。拙を蔽ふ莫れ。他人に耻かしがる莫れ。一、俳句をものせんと思ひ立ちし瞬間に半句にても一句にてもものし置くべし。初心の者は兎角に思ひつきたる趣向を十七字に綴り得ぬとて思ひ棄つるぞ多き、太だ損なり。十七字にならねば十五字、十六字、十八字、十九乃至二十二三字

一向に差支へなし。又みやびたるしやれたる言葉を知らずとて趣向を棄つるも誤れり。雅語、俗語、漢語、佛語何にても構はず無理に一首の韻文となし置くべし。一、初めより切字、四季の題目、假名遣ひ等を質問する人あり。萬事を知るは善けれど知りたりとて俳句を能くし得べきにあらず、文法知らぬ人が上手な歌を作りて人を驚かす事は世に例多し。俳句は殊に言語、文法、切字、假名遣ひなど一切無き者と心得て可なり。併し知りたき人は漸次に知り置くべし」まだそれからあと諄々と說かれてをります。

正岡子規は、申すまでもなく俳句を革命して今日のやうに盛んならしめた恩人でありますが、その子規の初心者心得第一は、今擧げましたやうに、文字など知らなくてもいい、十七字にならなければならなくてもいい、兎に角思ひついたままを、半句でも書きつけることだ、まづそこから始めなさい、とかういふのであります。さうふことであれば、もうやさしいのむつかしいの、作れるの作れないの、などといふ問題はないはずであります。安心してお始めになつていいのであります。「拙を蔽ふ莫れ」——まづいのをかくさうとしてはいけない。「他人に耻かしがる莫れ」——これなどは殊に剴切な訓へであると思ひ

ます。こんなものを見せて笑はれはしないかなどと躊躇する人が實際多いのであります。

高濱虚子先生の「俳句の作りやう」といふ小冊子にも、開卷第一にどう掲げられてゐるかと申しますと、「一、兎に角十七字を並べて見る事」とあるのであります。そしてその説明に――

「俳句を作つて見度いといふ考があり乍ら扨てどういふ風にして手を附け始めたらいゝか判らぬ爲めに遂にその機會無しに過ぎる人が餘程あるやうであります。私はさういふ事を話す人にはいつも、何でもいいから十七字を並べて御覽なさい、とお答へするのであります。中には又俳句を作るが爲めに參考書も二三冊讀んで見たし句集も一二冊讀んで見たが、どうもまだどうして作つたらいいのか判らぬといふ人があります。さういふ人には私は、どうでもいいから兎に角十七字を並べて御覽なさい。とお勸めするのであります。」――これが虚子先生の「俳句の作りやう」の冒頭の説明であります。つまり子規居士の説を、もう一段言葉をやさしく説いてをられるわけであります。

わたしは俳句の作り方をお話する前に、まづ俳句は、誰にでも出來るやさしいものだと

いふことを陳べるつもりでありました。ところがお話してゐる間に、いつか俳句の作り方に觸れて終つたやうであります。誰にでも出來るのだから、憶劫がらず耻かしがらず、試みに十七字に並べて御覽なさい——それが今日のお話で、とりも直さず俳句作法の第一課であつた、と、かうお考へになつていいわけであります。

# 第二章　俳句の愉しさ

わたしは前章において、俳句を學ぶ前にまづ俳句の道は極めてやさしく入り易い道であることを知つて戴きたい、と陳べました。それにつけ加へてもう一つここで、俳句を作ることは、實に愉しいものだといふことをお話しておきたいと思ひます。

諸君にとつて、今日何が一ばん大切かといへば、申すまでもなく療養に專念なさること、そして一日も早く健康を回復されて、再起御奉公なさること――これである、と思ひます。さて療養に專念すると申しましても、早く元の身體になりたいなりたいと、明け暮れその考にばかり執着してをることは、却つて療養のためによくない。反對に、病氣を忘れることが、一ばん病氣の回復を早くする途であらうと思ひます。ところが、ただ理屈や言葉で、病氣を忘れよ、といはれても、人間はもともと煩惱の奴、なかなかその通りゆくものではありません。病氣を忘れるには、何か一つまぎれるものを與へられる、何でもよろ

しいから、それに取り縋れば、その愉しさにつられて、自然に病氣を忘れるといふ、さういふよすがを與へられることが、どうしても必要であると思ひます。もちろん俳句に限るわけではありませんが、俳句も亦そのよすがの一つとして、たいへん役に立つはずだと思ふのであります。病氣といふものは、苦しく、辛く、佗しいものであるが、その現實を、俳句を作ることの愉しさが忘れさせてくれる、さういふ力が俳句に――俳句にもといつてもよろしい――備はつてをるのであります。俳句のその愉しさが、一體どこから來るかといふことは、これは一つの俳句論、もつと進んでいへば、藝術論でもあると思ひます。恰も俳句が何故入り易い道であるかといふことが、一つの俳句論になるのと同じであります。ここではなるたけ堅苦しい講義を避けたいので、長い說明は省きますが、それは要するにわたしども日本人の生活は、元來「自然」といふものと一枚になつた生活である、日本人は「自然」の子である、俳句は專ら自然を諷詠することから出發する詩である、だから俳句を作ることは、日本人にとつて自然の懷ろに還るといふことになる、自分を生み、育くんでくれた慈母の懷ろに歸る心安さを與へられることになる、だから俳句が誰にも愉しいものに

なる――かういふ理屈になるのであります。この俳句と自然との關係につきましては、追ひ追ひ後で觸れることにいたしませう。

少しくお話の方向を轉じませう。小田嶽夫といふ作家が、南方に從軍した文章を集めた書物の中に、「蘭群俳句會」といふのがあります。蘭群といふのは、あの香りの高い蘭の花の群ですが、所詮それとは似もつかぬといふ逆說ださうで、ラングーンの地名をもぢつたのです。ラングーンで、同じ使命を荷つた文筆の人たち――しかし俳句は全く素人だといふ人たち――が集つて、俳句會をはじめた話をかいた短篇であります。この作家が輕い氣持で、ふと、一つ俳句會をやらうではないか、といひだした理由は、「……單調な風景と、變化のない季節感覺のなかで、常々何よりも強く思ひ出されたのは、故國日本の、微妙な季節の變移と、もの柔かい風景とであつた。その故國の自然への憧れは、僕に俳句への異常な關心を喚びさましてゐた……」こんなふうにかかれてをります。そして第一回の俳句會の光景が、つぎのやうに寫されてをります。「皆は深酷な顏をして、持つてゐる紙片に、いかにも秘密さうに、そつと何か書きつけては、すぐにペンを止めた。溜息が洩れて出る、

『弱つたなあ』といふ歎聲が吐かれる。そのほかは、何か息詰るやうな緊張した靜けさ……、みんな苦虫を嚙みつぶしたやうな顏をしてゐるか、もしくは考へあぐねてボカンとした顏をしてゐる。それでもどこか樂しさうだ。」といふのであります。そして「投票の結果」の高點句が、肝心の季題をもつてゐなかつたりすることなども、かういふ俳句會らしくて、却て面白いのでありますが、何よりも、俳句會の動機が、いま引きましたやうに、いはば日本に對する鄕愁にあつたといふこと——さて句會となると、みんな苦虫をかみつぶしてゐる、何だつてすき好んで、そんな苦しい思ひをするのかと、いひたいところであるが、それでゐて、どこか樂しさうだ、いはば苦しみを樂しんでゐるのだ、といふこと——そこに深い意味があると思ふのであります。さういふ點が俳句の——俳句を作る心持の——ほんとのところに觸れてゐる氣がして、わたしはこの短篇をたいへんなつかしいものに思ふのであります。靜かに病院療養所で病を養ふ境遇に身をおかれて、何か心の本家鄕をさがし求める、といつたやうな心境にをられるであらう諸君の場合にも、恰も蘭群俳句會が起つたのと同じやうな意味で、諸君の中で俳句會が企てられる、そして一しよになつて

俳句を樂しまれるといふことは、極めて自然であるやうに、わたしには思へるのであります。人間は、肉體が病氣をしてゐるときは、精神も亦ともに病氣になり勝ちだといはれます。その心の病氣を治すために、俳句とか歌とかいふものは、醫藥に劣らぬ効能をもつてゐることは、現に白衣勇士諸君御自身の口からもよく聞いてゐるところであります。

田村木國氏の書かれた書物の中に、療養の友としての俳句について、病氣の讀者から著者にあてて、めいめいの體驗を書き送られた手紙が載つてをります。今その中の一つ二つ拾つて見ますと、「俳句は私にとつては、單なる慰安だの、趣味だのといふものでなく、日々の藥と同樣に必要なもので、作句をしてゐる時、これを鑑賞してゐる時、實に明るく、おだやかな、いい氣持でありまして、それが自然に、鬪病してゐるのであることを知つて、この樂しみを持ち得たことを、心から感謝して居ります。」とか、或は又、「はなやかな軍隊生活から療養所に移つたばかりの私には、何もかもたゞもう寂しくて〳〵たまりませんでした。……句作に興味をもつてからスツカリ私の心機は一轉しました。空に浮ぶ雲を見ても、窓の下をとんでゐる蝶一つ見ても、何もかも面白いんです。」などともあります。

これらは病床の人の體驗でありまして、俳句を習ひ覺えたことに對する感謝の念が率直に出てをり、俳句といふものが療養生活の最もよき伴侶の、少くも一つであることの、生きた證據であると思ふのであります。

この手紙の中にもありますが、空にうかぶ一片の雲も、窓をよぎる一ぴきの蝶も、俳句を知らなかつた前と、俳句を知つた後とでは、見る眼がまるで違つて來るのであります。以前には、何の氣もなく見過してゐた一片の雲、一ぴきの蝶が、かくべつの輝きをもつて眼に映るやうになつて來るのであります。雲といはず蝶といはず、たとへば今ごろの時候で申しますならば、病室の窓から庭に眼を注がれると、凍解の土はくろぐろと濕ほひをもち、枯芝の間からちよぼちよぼと、何か青い草が、もう萠えそめてゐる。空にはだかつてさしかはしてゐる枝枝はまだ枯れたままだけれど、氣をつけてみると鋭い芽がだいぶふくらんで來てゐる、草も、木も、土も、水も、みんな春の仕度が整つて、いきいきと息づいてゐる、といつたやうなことを、いろいろ注意されるはずであります。花壇の土に芽をもたげた、ただ一つのチューリップの芽や、垣根の裾に萠え出た一片の蘖(はつべ)にしまして

も、ぢつとそれに見入つてをりますと、今までまるでもたなかつた親しみを感じて參り、「大自然」がそこに示してゐる深い意味を汲みとるやうになり、自然といふものはこんなにも美しかつたか、と見直すやうに必ずなります。この美しさを發見したときの喜びは又かくべつであります。この美しさを知つた後の自然は、今までと全く違つた輝きを帶びて參ります。かくして、自然――春夏秋冬の季節に伴ふもろもろの現象――即ち俳句でいふところの季題、の世界が、俄然新しい光をもつて、眼の前に展開して來る、今迄見てをつたのとは別の世界がそこに開けて來る、救はれたやうな感じがする――といふことになると、いつかもう俳句の眼が開かれてゐたことなのであります。俳句に上達する第一の秘訣は何であるかといへば、自然に深く親しむことであるといはれるのも、この故であります。俳句は別の名前でいへば、自然諷詠の詩であります。高濱虛子先生は花鳥諷詠といふ標語を掲げてこれを示されてをります。俳句を作るにも味はふにも、まづこの點を腹に入れてかからなければなりません。

ここで少し氣をかへて、箇々の作例について說くことにいたしませう。その作例も、特

に療養所の諸君の作品だけに求めまして、諸君の療養生活が、俳句の愉しさでどんなに救はれてゐるかといふことを知つて戴くことにいたしませう。

試歩たのし秋七草を揃へつゝ

作者は三重療養所の勝山泉洲氏であります。その意味を解いてみませう。作者は專心療養の甲斐があつて、朝夕の試歩を許されるまでに回復した。露を蹈んでは療養所のまはりの野原を散歩するのが樂しい。その野山の秋がいま深く、千草が一めんに咲き亂れてゐる。萩を折る。桔梗を折りそへる。芒の穗を拔く。撫子も見付けて摘む。これで秋の七草がもう一、二、三、四種類揃つた。藤袴を見つけて摘みそへて五種類、もうあと、女郎花と葛の花だけだがと、さがすうちにやつと見付かる。これで秋の七草が揃つた、と喜びつつ、野道をふんでゐるといふのであります。一體八千草のうちのこの七草を選んで秋の七草と賞でるなどといふのも、まことに自然を愛する日本人らしい、心の濃かさだと思ひますが、俳句を知つた後の自然愛の心は、又かくべつであります。喜びながら七草を摘み揃へて樂しんでゐるこの試歩の人の心のうちは、いま病氣も何も全く忘れられて、あるもの

はただ自然の慈愛にひたつてゐる喜びばかりであります。七草が揃へられるといふので、その療養所のあたりの豊かな秋色も眼に見えるやうでありまして、一句の調べのよさと相俟つて、讀者の心も、秋草の美しさに誘はれてゆく思ひがするではありませんか。

盆梅にけふの水薬美しく

作者は梨風といふかたであります。盆梅といふのは正月の床飾りなどにする鉢植の梅であります。「けふの水薬」といふのは、けふから變つた水薬の意味と解してもよし、又、昨日までと同じ水薬であつても、けふの氣分で、ふとその色を、何か新しく美しいものに見直したと解してもいいと思ひます。作者は枕元に一鉢の盆梅を置いてベッドの上に寢てゐる。その盆梅の蕾がだんだんと膨らみ、やがて、一つづつ花の殖えてゆくのを見ては樂しんでゐる。今は枝一ぱいに簇がる花である。卓の上に盆梅とならんで、水薬の壜が立つてゐる。窓からさし込む春日に透けて、その水薬の壜が、ふと、たいへん美しく眺められたといふのであります。讀み下した一句の感じが、いかにも明るくて、すき透るやうで、病床らしい陰鬱の影が微塵もさしてをりません。療養の心持は、願くばいつもかくもあり

たいものだと思ひます。

冴え返り病むもの同仕の話かな

作者は秋生といふかたであります。「冴え返る」といふのは、春になつて少し暖くなりかけたと思ふ間もなく、また寒さがあと戻りすることをいふので、俳句の季題の一つとなつてをります。一旦暖くなつて、又ぶり返した寒さですから、普通の人のからだにも相當こたへます。まして療養中のかたには傷が痛むとか、風邪を引き易いとか、故障が起りがちであるに相違ありません。病室を、或はベッドを、隣り合せた病人同仕で、その冴え返る寒さのことを、お互に話しあつてゐるといふのであります。これは朗かに明るい句ともいへません。春寒をかこち合ふ病人同仕の、わびしさを想像させる、さういつた句であります。しかし、そんなら作者はめそめそと、病氣のからだにこたへる嚴しい餘寒に愚痴を洩らしてゐるか、すつかりいぢけ込んでゐるかといふと、さうではないのであります。餘寒が身にこたへてゐることは事實なのでありますが、その辛さを俳句に諷詠することによつて、もう辛さにうち克つてゐるのであります。餘寒の辛さの中に詩的な趣を見出し、これ

を俳句に詠んで見るゆとりをもつといふことは、餘寒を必しも不快なものとのみ、思つてゐないことであります。作者は知らない間に、ちやんと俳句で救はれてゐるといつていいのであります。

退院ののびたる春を惜しみけり

作者は香洋子といふかたであります。春惜しむといふのは、過ぎゆく春の名殘の惜しまれることをいふので、晩春の情緒であります。——傷や病氣も幸に治つて、この春には退院出來るはずであつた。ところが、何か又からだの調子が惡かつたかして、それが延びてしまつた。たうとう療院生活の中に、今年の春も又終らうとしてゐると、作者は窓から行く春の庭をつらつら眺め暮してゐるのであります。この句にも、退院ののびたことを焦れたり悔んだりしてゐる樣子は少しも見えません。そればかりか、今年はもう見ないはずであつた馴れた病院の暮春の庭を、もう一度ここで見ることになつたが、これもこれでまたよろしいといつた心持で、行く春の情趣を賞でてゐるのであることが、一句をよみ下して自らわかるのであります。これはまさしく、俳句で養はれたゆとりある心のもちかたで

あるに相違ありません。

七つづゝ慰問の栗を分けあひぬ

作者は高瀬三葉氏であります。療養所を慰問に來てくれたかたから、栗を見舞に貰つた。貰つた栗は一籠であるが、それを自分だけで私しないで、同室の病友の數に分ける。分けて見たら、一人前七つづつに當つた。みんな樂しく、その七つづつの栗をむいてたべた、といふのであります。率直な、素樸な言葉の中に、病友同仕の美しい友愛が溢れてゐて、一讀涙ぐましくなるやうな思ひであります。作品としては、七つといふ數の出てゐることが、印象を鮮明にし、情景を髣髴せしめてゐるのが手柄であります。一句のうちに、和やかな療養生活が出てをり、無邪氣な兵隊さんたちの、一面が描かれてをります。かういふ句を作つて愉しんで、病を忘れてをられる作者を眼に見るやうな心地がします。

晝靜か松の花散る外氣小屋

作者は京都療養所の桐山菊次郎氏であります。句意は解說を加ふるまでもなく極めて明瞭であります。松の間に立つてゐる外氣舍の眞晝靜かな情景と、その外氣舍のベッドに横

はつて松の花を賞でてゐる作者の心持とが現れてをります。松の花などといふものは眼に立たない澁い趣のもので、一見花やかに色美しい他の花と違ひ、俗眼には入らぬものであります。ところが俳句を解し「自然」に眼が開けて來ますと、今まであまり氣にとめなかつた松の花などといふものにも無限の趣味を見出じ來ます。一體藝術精神といふものがぢつと物をよく見、深くものを愛する結果、どんなもののうちにも必ず籠るどこかよいところを發見して來る、その心をいふものなのでありますが、專ら自然を相手とする俳句の場合において、俳句を知つた後に以前は知らなかつた「自然」のよさ、美しさなどを、新に發見するその體驗には、かくべつ切實なものがあるのであります。松の花が散るといふのは雄花が細かい花粉を散らすことで、まことに地味な光景でありますが、同時に極めて纖細な感じを伴ふものでもあります。俳句を知らないで松林の中の外氣舍にひとり寢てゐる場合と、俳句といふものを知つて、外氣舍の四窓から松の花粉が風もない空にかすかに煙のやうに浮ぶのを見て、いいな、と眺めながら寢てゐる場合とを比較して、後の場合の方がどんなに仕合せであり、病氣の療養のためにも望ましいことは、いふまでもないこと

と思ひます。この句は作品としては多少たどたどしい感じもいたしますが、作者が俳句によつて慰安を得てゐる心持の十分に覗はれる點で眼にとまりました。

梅活けて靜かにながき病守る

作者は福井療養所の筒井一幸氏であります。病が長くなると誰だつてくさくさしますし、焦れても來ます。病と闘つてうち克つには、その焦燥や煩悶を忘れて、氣持をいつも平靜におかねばなりません。所詮急のことにはゆかぬ、長い安靜療養を必要とする病氣に堪へて——病守るといふ言葉がよろしい——作者は焦らず減入り込まず、枕頭に四時をりをりの花を挿し——春立てば庭の梅を折つて甕にさして寢ながら眺めて——身體を養つてゐるのであります。ただ梅を活けて心を慰めるといふだけでなく、その事柄を俳句に詠む——自分の詩として創作することによつて、作者の心は忘我の藝術境に完全に遊ぶことが出來てゐるのであります。

外氣舍の屋根に置きそむ落葉かな

作者は東京療養所の齋木百草園氏であります。秋が深まつてやうやく木木の落葉が舞ひ

そめると、誰の心も淋しく沈みがちであります。また落葉といへば美しい花などと違つて俗情からは何か厭はしくも思はれがちであります。しかし俳句を知り、四季の風物の移り變りに深い興趣を覺えるやうになりますと、萬象悉く意に適し、落葉は落葉で別の趣きを備へて眼に映じて來るのであります。もし病氣の囚となつてしまつてゐたならば、さらでも淋しい人氣うとい外氣小屋に落葉の音がしはじめ、これから長い冬が來るのだな、と考へると、一しほ憂鬱になり、病氣のためにも決してよくないだらうと思ふのであります。ところが俳句で心が自然にきたはれ、落葉の風情をかういふやうに諷詠するまでの心のゆとりをもちますと、哀傷の落葉の音もなかなかに樂しく聞かれ、寂寥の冬が必しも寂寥でなくなつて來るのであります。屋根に置きそむ落葉かな」と落葉を翫賞してゐる作者には、病床に寒い冬を迎へるといつたやうな憂鬱の翳が少しも射してゐないのであります。俳句が作者を救つてゐる、といつても決して過言でなからうと思ふのであります。序に申せば、作品としてはこの句は着眼も表現の手法もやや常套的で、もう一と息といふ感がないではありませんが、素直で大人しいといふよさが認められます。

わたしは座右の材料から、手當り次第にこれらの句を拾つて來たのでありますが、これによつても俳句が療養生活をいかに明るくしてゐるか、俳句が諸君の病床のいかによき友だちであるかといふことの一端を、知つて戴くことが出來るかと思ふのであります。同時に以上の解釋によつて間接に、俳句はそんなふうに味はうものかといふ、味はひかたをも少しづつ說いたことにもなつたかと思ふのであります。

# 第三章　季題及び切字

前二章において俳句は日本人の誰にでも出來る極めてやさしい文學であること、又やつてみるとたいへん愉しいものであり、殊に病床を慰める好伴侶であることを說きました。これから本題にはひつて俳句の作り方の實際を說かうと思ひます。作り方と申しても別に喧しい規則めいたものがあるわけではありません。前にも申したとほり、俳句は素直な心一つをもつて、裸でとび出していつてよろしいので、その點は、至つて自由な、拘束のないものであります。ただ規則といふほどでもありませんが、俳句といふ以上は、約束としてどうしても守らねばならぬことが二つだけあります。その一つは形式の上のことで、五、七、五、十七音の形をとるといふことであります。もう一つは內容、卽ち詠みこむ中味の上のことで、何でもよろしいから、春夏秋冬の季節に關係する言葉、事柄を、一句のうちにもたねばならぬといふことであります。この二つは、俳句の成立の條件でありまして、

その中のいづれの一つが缺けても、もはや俳句ではないのであります。「古池や、蛙とびこむ、水の音」――五、七、五、十七音の數の方は、指折つて數へればすぐわかりますが、季節の事柄――俳句ではこれを季題といひますが――その方は何かといへば、この句では「蛙」がそれでありまして、季節としては春のものであります。蛙は春に限らず夏でも秋でも居るのでありますが、冬籠りから出て、春さき田圃で鳴き始める時分に、一ばん蛙の感じが深いので、春の季に屬するものと定められたのであります。「荒海や、佐渡に横たふ、天の川」――この句では、天の川といふ秋の季題がよみこまれてをります。大體かう・いつた類であります。「俳句をはじめて作つて見たが、こんなのはどうか。」といつて出されるのを見ると、十七音といふ形の方は間違ひなく整へられてゐるのでありますが、もう一つ大事な季題の方は、忘れられてゐるのがよくあります。これは「季」がない、と申しますと、「へえ、そんなものが要るのか、それは知らなかつた。」などとよくいはれます。實は昨日も、さる友人から手紙で、君の放送を聽いた、君のいふとほり恥かしがらないで早速一句作つてみたよ、といつて俳句を一つ見せてくれました。それは

ふと目覺め空の爆音に合掌す

といふのであります。ふと目がさめると、飛行機の爆音が聞こえてゐる、こんな夜分にまで、ああして空を護つてゐて下さるのかと、ありがたく思つて手を合せた、といふ句意であります。まさしく子規の訓の冒頭の「思ふままをものした」といへまするし、また形も五七五、十七音に出來てゐます。――尤も嚴密にいへば、中七字のところが八字であるため、十八音になりますが、この場合はこれでいいのであります。その問題は暫く問はないでおくがよろしい。――ただ肝心の季題が落つこちてゐるのが、困るのであります。どこか感じがぼやけてゐて、一句としての迫力が乏しいのは、主としてそのためであります。そこで假にこれを

寒夜覺め空の爆音に合掌す

としたらどうでせうか。寒い冬の夜といふことが加はつただけで、一句がきりりと引緊つて、讀者の聯想はひろくなり、この場合の作者の氣持が、一層はつきり出ることになるではありませんか。季題の意義がここにあるのであります。作品としての出來榮は別とし

て、とにかくこれで俳句の約束にはちやんと適つたものになつたのであります。

この季題を要件とするといふことは、和歌その他の韻文にはない、全く俳句に限つたことであります。何故日本だけにさういふ特殊の文學が生れて來たか、それには深い理由があることなのですが、それは諸君が斯の道にはひられた後にだんだんと研究されることとして、今は説明を省きます。五七五、十七音の形とともに、季題は一の約束で、この約束を守つたものをのみ俳句の名で呼ぶのだと、かう考へてかかつて戴きたいのであります。

たゞかやうにいふと諸君は、俳句には何も面倒な束縛はない、何の準備なしに始められるといつておきながら、十七字の方はまづよろしいとしても、季題などといふ始めて聞く約束があることは厄介な束縛に相違ないし、それを知らねばならぬといふのは大きな準備ではないか、憶刼がるなといはれても憶刼がらざるを得ないではないか——かやうにいはれる方があるかも知れません。一應尤ものやうに聞こえます。ところが實は季題なるものは、決してそんな面倒なものではありません。一體日本人の生活は、四季の時候の移り變りと密接な關係をもつてゐるのであります。わたしたちの衣食住の執れをとつてみまし

ても、春夏秋冬その時どきの時候に、しつくり結びつかないものはありません。それゆゑにわたしども日本人が、めいめいの生活感情といふものを、日本人らしい簡潔な、十七音の形で詠んでみるとき、べつだん季題のことを考へないでも、自然にちやんと季題がはひつてゐるといつたやうな場合も、隨分あるのであります。それくらゐなものなのであります。もともと季題は、わたしたちの周圍の自然界に充滿してゐるのであり、そしてわたしたちの生活は、「自然」と融けあつてゐるのでありますから、季題を詠みこむといふことが、決してそれほど束縛でもなければ、また季題を知ることに大きな準備が要る、などといふほどのものでもないはずであります。季題のことを始めて聞く方は、むやみに面倒らしくお考へになるかも知れませんが、決してそんなものではありません。試みに諸君の周圍にそのつもりで眼を配つて御覽になれば、いくらでも季題は轉がつてゐて、拾ふがままであります。ちようど今時分のことでいふならば、まづ時候の言葉としては早春、春淺し、餘寒、春寒、冴返る、或はただ二月といふだけでも一の季題であります。それから天文現象、地理的事物についていふならば、凍解霜解、殘雪、春の雪、春の雨から、春の田、春の野、春の山、

春の水――いくらでもあります。動植物の方面に眼を轉じますれば、鶯とか、蜆とか、猫がさかるとか、草の芽が萠えるとか、梅が綻び蕗の薹が現れ、猫柳が皮を脱ぐ等々――。ところが季題はさういふ天然界の現象とともに、それに伴ふ人間世界の現象をも含んでゐるので、たとへば野山を燒くとか、摘草に出るとか、海苔をとるとか、雛を飾るとか、田畑を耕すとか、麥を蹈むとか、それらがみな一つ一つ季題なのであります。さういふ外の景色を見ることの出來ない方が、單に病室の中、身のまはりを見廻して御覽になるだけでも、たとへば足袋とか、襟卷とか、毛布とか、蒲團とか、湯婆とか――尤もこれらは冬の季題の部に整理されてをりますが、いま眼の前にあるさういふものを題にして、これを俳句に詠み込まれても一向不自然なことはありません。かやうに見て來ると、わたしどもの身邊左右悉くこれ季題――少し誇張していへばそんなものなのであります。それを拾つて、それに事よせて、自分の感情のありのままを詠めばそれでいいのであります。眼を皿にして季題はどこと探し廻る――決してそんなものではないのであります。それらの季題をいかに簡單に詠み込むかといふことを、いま試みにわたしが實例をもつて示してみませうか――

たとへば療養所の窓から見る山山の景色が何となく春めいて來た。「春めく」――一つの季題であります。

春めきて山々まろく重りぬ

或は又、今日は寒さがあと戻りした。「冴え返る」――一つの季題であります。

古き傷少しうづきて冴え返る

或は又、昨日の雪は大方解けたが、芝の上にまだとびとびに殘つてゐる。「殘雪」――一つの季題であります。

枯芝のところ〳〵に殘る雪

或は又、梅がぽつぽつ咲きはじめた。「梅」はもちろん一つの季題であります。

梅いまだぽつり〳〵と白きのみ

或は又、病室の窓窓に蒲團が干してある。「蒲團干す」――一つの季題であります。

蒲團干す向ひの窓と話しけり

或は又、看護婦さんが湯たんぽの湯をごぼごぼと窓の下にあけてゐる。「湯婆」――さつ

きも申した一つの季題であります。

たんぽの湯捨てゝそこらに下萌ゆる

これでも一つの俳句であります。

大體かういつた鹽梅であります。もちろんこれらのものは假にわたしが鬪目の季題を捉へて十七字の形にとり入れてみたばかりでありますから、これが立派な俳句と申すわけでは決してありません。かういふふうに季題を拾ふがままに十七字にならべてみることからお始めになつたらよろしい、と申してゐるだけであります。

いま諸君の身邊にも、季題はこんなに豐富なのであります。が、しかし机とか、椅子とか、ベッドとか、時計とか、手帳とか、鉛筆とか、壁とか、窓とかいふ類のものは、季題ではありません。かういふものは季節の感じが伴はないからであります。ただ電燈といふのでは季題ではありませんが「春の灯」といへば季題になります。かやうに考へて參りますと、大體常識で、季題であるものと、さうでないものとは、判斷が出來るくらゐのものであります。しかし、何をいつても季題は俳句の肝心な要素なのでありますから、しつかり知つ

ておきたいと思はれるならば、それもご尤もで、それは「歳時記」といふ書物が、いろいろの種類のものが出てゐますから、その一本を座右にお備へになればいいのであります。「歳時記」には、季題が一つ一つ詳しく説明されてをり、例句等も掲げられてをります。これを用意してかかることが出來れば、それに越したことはありませんが、無ければ無くても構はず、まづお始めになるのがいいのであります。

序でありますがこの「歳時記」といふ書物は、結局日本の美しい風土と、それに密接に繋つた日本人の生活の、詩的な趣のあるものを一つ一つ拾つて、そのよさを明らかにしたやうなものですから、俳句を作る氣のないかたが病床のつれづれに、ただ御讀讀になつても十分面白いはずのものだと思ひます。わたしは以前或る新聞から出征學徒に勸めたい書物を擧げよといはれて、「歳時記」と答へてやつたことがあります。必しも出征學徒とは限らず、勝れた歳時記の一本こそ、日本人の家庭のすべてに備へられてよろしいものだと思ひます。——これはやや餘談に亘りました。

再び本題にもどりまして、俳句には切字といふものがあるさうだが、それはどうかと、何

かむつかしいことでもあるかのやうに尋ねられるかたがあります。切字といふのは、意味の切れ目に使ふ助辭で、「や」と「かな」はその代表的なものであります。「や」「かな」等が、俳句において獨特の發達をして來たことには、深い意味もあり、また昔の人は切字についていろいろ喧ましいこともいつてゐるさうでありますが、初歩のうちはさういふことにあまり拘泥しない方がいいと思ひます。反對にまた一方では、この頃の俳句では「や」とか「かな」とかいつてはいけないさうだ、などといふのを聞くことがありますが、それはとんでもないことであります。「や」も「かな」も俳句といふ文學が、自分だけのものとして大事に守り育てて來た大切な寶であります。といつたからとて又いつも「や、かな」でなければならぬことにきめてしまふ、「や、かな」さへ入れればそれで俳句の形が足りるとしてしまふと、死んだ型に囚はれたことになるので、それでは表現の潑剌さといふものはなくなつてしまひます。いづれにも拘泥することがいけないのであります。

切字は「や」「かな」には限りません。「けり」とか、「なり」とか、「たり」とか、「ぬ」とか、「て」とか、凡そ意味の終止を現はす文字はすべて切字であります。芭蕉も切字に

用ふればいろは四十八字みな切字である、といふやうなことをいつてゐます。切字についてはここでは重なる一二の事柄だけを說いておくに止めます。その第一は切字の意義――俳句獨特の切字とは一體いかなる作用をするために、いかにして發生したかといふことであります。その點についてはわたしが下手に講釋する代りに、「俳句讀本」中虛子先生が周匝にしかも極めて判り易く說いてをらるるところを引用させて戴くこととします。

「俳句は短い文學でありまして……その短い文學のうちで、感情を述べ、季題を諷詠しようとするのでありますからして、複雜な景色や感情を叙さうとしても、それは出來ない相談であります。だからその景色や感情を出來るだけ單純にして、出來るだけエッキスして之れを叙する必要が起つて來ます。又、それに伴うて出來るだけ文字の無駄を省いて、出來るだけ文字を少くして之れを叙するといふ必要も起つて來ます。

俳句に大切な切り字と稱へるものが出來て來たのも、亦その必要から起つて來たものでありまして、……終止言といふ意味ばかりでは無く、文字を省略する爲に、重大な職務を背負はされて居るのであります。殊に『や』の字の如き切り字は餘程複雜な意味を持つて居るのでありまして、假へば、

古池や蛙とびこむ水の音

の如きも、その古池の景色も大方こんな景色であらうと云ふ、各々の頭に想像が付くだけの餘地を興へるといふ働きを持つてゐますし、それから又、其古池の感じをもめいめいの頭で呼び起すだけの餘地を存してゐます。つまり古池！　といふやうな、此の古池なる哉、とでも云ふか、其古池といふものを呼び出して來て人の心に印象付けると云つたやうな、さういふ大變な力を持つて、此の『や』は獨りで飛躍してゐるのであります。尤もそれは、古池といふばかりではなく、『蛙とび込む水の音』と云ふ十二字も之等の想像に關係して居ることは勿論ではあるが、併し其句全體から來る感じも、此の『や』の一字に集中して、全體の句から受ける力が再び『や』の字に戻つて、其『や』の字がもう一度飛躍をするといつたやうな働きをするのであります。

此『や』の字の如きは、俳句に於てだんだん養はれて來た特別の意味を有する言葉でありまして、口でいへば古池がありますぞよ、古池ですよ、其古池に蛙がとび込みました、水の音がしました、と斯ういふ意味、即ちこの『古池がありますよ、古池ですよ、其古池に』といふ意味、もつと複雜な意味が此『や』の一字に性質づけられて來たものと云ふ可きでありまして、是は俳句が文字を省略する必要から自然々々に起つて來た處のものであると考へるのであります。」

「や」の切字の發生の所因と、その荷つてゐる使命を說いて餘蘊がないと思ひます。

切字についてもう一つここで說いておきたいのは、所謂二段切のことであります。俳句の十七字は、一點を中核として首尾貫徹し、或る意味を傳へるものでなければなりませ

ん。その點に關する限り、十七字に纏つてゐる文章の一節といへるのであります。文章において叙述語が主語と結んで一つの完結した意味を成すと同樣の役目を、俳句において切字が果すものとすれば、一句のうちに切字は一つであるのが當り前であります。それが二段にも三段にも切れるのは變則であります。初學の者は何でも「や」「かな」を用ひさへすればいいと心得て、一句のうちにや、かなを併用したりすることがあります。これは二段切の典型なものであります。たとへば

ゆきどけや麥一寸の野づらかな

といふ句があつたとします。意味はよくわかり、感じもあるのでありますが、一讀して何となく句の坐りが惡く感ずることは爭はれません。「雪解」と「麥一寸の野面」といふ二つの焦點が併立して相剋する、そのために一句の主題に分裂があり、まとまつた或る一つの印象を受けとりにくいのと、舌に上せた律呂の美も破られてゐる感じがします。强力な二つの切字が互に負けずに拮抗して、勝負がつかぬままでゐるからであります。今假にこれを

雪消えて麥一寸の野づらかな

（これは天明時代の闌更といふ人の句であります）と直して朗誦してみますと、俄然一句が面目を改め、すつきりとした姿で立つた、押しても動かぬしつかりした句となつたことを感ずるでありませう。昔から作句法上一句のうちに「や」「かな」を併せ用ふべからずとされてゐます。これは今申したやうな理由に基いてゐる敎なのであります。もちろん文學上のことでありますから、この鐵則とても幾何學の定理のやうに絕對的のものではありません。事實古今の名吟を檢討してみますれば、二段切三段切のものもなくはありません。ただそれはあくまでも例外的のものであつて――ちようど十七音が原則であるのに、十八音はおろか、二十字以上にも及ぶ破格變調があるのと同じやうに――そのために原則を否定することは出來ない、そしてその原則の生れるには右のやうな根源深い事由があるのだといふことを、心にとめて藏きたいのであります。

# 第四章　寫　生

いよいよ實作の方法にはひりまして、先づ第一に肝心なことは「自然」を細かく觀察するといふことであります。「自然」といつても漠然とした話でありますが、自然現象のうちで、具體的に、實際を眼で見ることの出來るものを捉へて、仔細にそれを觀察する、觀察した上は、忠實に、ありのままに、繪筆をとつて紙の上に繪に寫しとる心持で寫生をする、といふことから始めるのが一ばん賢明であります。申すまでもなく、俳句は「詩」の一つでありますから、自分の感情を詠ふものではありますが、感情を直接に陳べないで、必ず季題に事よせて陳べる——即ち「物」に託して訴へる——所謂即物の詩でありまして、物と心とが渾然と融けあひ、作者の感情と季題の心とが微妙に交はる境に、俳句獨特の味が生ずる、さういふものなのですから、物——即ち季題——の心に深く喰ひ入るといふことが、どうしても大切になるのであります。たとへば一輪の花にしましても、ああきれ

いだと、表面だけを見過すことをしないで、目をとめて細かく觀察する――これを虚子先生は「ぢつと眺め入ること」と說かれますが、さうしてゐますと、花に對する、今までになかつた愛情が湧いて來る。そのうちに無心の花の心と、人間の生きた心と通つて來る。そこまで來てはじめて、花を詠ふことが、取りも直さず、自分の心持を詠つてゐることになる、そこから俳句のほんとの味――醍醐味といふものが生じて來るのであります。一心不亂に寫生することに意味があるのは、さうしてゐる間にいつか雜念が去つて、花の心がこちらにのり移つて來るからであります。寫生は決して物の外形を器械的に寫しとることに止まるものではないのであります。正岡子規が唱へはじめて以來、寫生こそ俳句の大道であるとせられてをります。

寫生的な行きかたの反對は、目を瞑つて頭の中で俳句をこしらへるといふ行きかたであります。眼に見ないで頭で作りますと、どうしても觀念的、概念的、抽象的なものになり易く、つひ理屈をのべたりしがちであります。或はまた「季題」――「物」――がお留守になつて、感情をむき出しに、ぢかに訴へることになりがちであります。その結果は或は

標語のやうな俳句が出來たり、和歌を不自然に十七字にしたやうな弱々しい俳句が出來たりするのであります。物を直接に寫生してさへをれば、その憂ひはないのであります。

實地まのあたりに、物を見てゐない場合——たとへば机に向つて、草の芽なら草の芽といふ題で、俳句を作るときにも、やはり現在目で見て寫生をする心持で作るのがよろしいのであります。前にいつか、どこかで、實際自分の見た草の芽が、どんな有樣であつたかといふことを、まざまざと思ひ浮べ、その時の記憶をよび起して作るのであります。これは、いはば間接に寫生してゐることになるのであります。從つて俳句は平生の心がけが大事といふことになるのでありまして、俳句が上手にならうと思へば、常日頃から「自然」に親しみ、路傍の一草一木にも、絶えず細かい注意の眼を向けてゐることが必要であります。自然を深く觀察しておけば、たとひその時その場合は、一句にまとまらなくても、それが材料の仕入れ、仕込みになつて、他日或る題で俳句を考へるとき、その材料がすぐにものをいひます。その仕入れがないといふと、勢ひ想像で作るほかなくなります。ところが俳句は形が小さくて、複雜なことはのべにくいものでありますから、誰のいふことも大

體同じやうなことになり易いのに、これを頭で想像して作るのでは、大低もう高が知れてをるのであります。折角頭を捻つて考へ出しても、所謂千篇一律、たいてい人のいつたことの繰り返しになる、今さら陳腐だ、もう古い、といふことになるのが常であります。俳句では、古い新しいといふことが、いつも何よりもまづ問題になりますが、新しい句は、變つたいひかたや言葉、乃至は珍しい材料そのものなどからのみ得られるものではなくて、却つて、平凡な、しかし忠實な、丹念な、むきな寫生から得られることが多いのであります。季題である「物」を一心にみつめろ、いつまでもねばる、眞劍になる、その間に深く奥底にかくれてゐたものを探りあてる、それが誰も今まで知らなかつたものであり、そこで新しい句を得たといふことになるのであります。虚子先生が「新は深なり」と說かれるのはそこのことであります。かやうに申しますと、少し俳句をやつてをられるかたは仰るかも知れません、「あなたはさういふけれど、實際現れた立派な俳句が、必しもさうばかりいつてゐないではないか、寫生句とはいへないものが、却つてわれわれの心をうつたりするのはどうか。」——しかし、それはその作者がもう、立派な作家であるからのことであり

す。寫生の腕が充分に磨かれ、俳句を作る技倆が身についた後だから、寫生を超えたさういふ俳句が出來たのであります。寫生のきびしい修業をつまないで、いきなり大家のまねをしようとするのは、デツサンの苦心なしに大作にかかるといふものであります。ほんとの寫生は、實はデツサンではないので、一見寫生句らしくない大家のその作が、實際は深い寫生句であつたりするのでありますが、その話まではここではわざといたしません。少くも初學の心得としては、寫生第一といふのが、間違のない安全な道であるといふことだけを御記憶願ひたいのであります。これから少し作例について說くことといたしませう。

みいくさは酷寒の野を蔽ひゆく

砲兵中尉長谷川素逝氏の作であります。大陸の嚴寒の曠野におつかぶさるやうに、皇軍が堂々と進軍するといふのであります。次に

みいくさは涼しいのちを捨つるのみ

空の勇士西山胡鬼氏の作であります。あの「海ゆかば」の古歌の心を、——或は葉隱精神を——俳句でいつたものでありまして、結晶體のやうな勁さと美しさをもつてをると思

ひます。わたしどもの胸に強くこたへる戰爭俳句でありますが、二つとも所謂、寫生句とは申すことが出來ません。一方にまた、同じ戰爭の俳句で、たとへばかういふたぐひがあります。

砲身にあすのいのちの注連を卷く

南支派遣福西正幸氏の作であります。あすはなき命と思ふ進軍の前夜、大砲の胴體へ、お正月の注連飾を卷きつけるといふのでありまして、神の國日本のいくさびとらしい床しさつつましさがよく出てゐると思ひます。

日燒手や鰈のごとく表裏あり

滿洲守備軍、渡邊こうみ氏の作であります。手の甲は、日にやけて眞黑く、反對に、掌は眞白で、まるで魚の鰈のやうに裏表があるとは、ほほゑましくも、涙ぐましい句であると思ひます。この二句などは、季題に即して「物」について詠つた、所謂寫生句でありまして、寫生から來る强みが、遺憾なく出てをると思ひます。前の二つ、後の二つ、いづれも立派でありますが、初心者の進む道としては、まづ後の方の行きかたに從ふべきであり

ます。一足とびに、前の方の行きかたに倣はうとすると、和歌に似て非なる弱い詠歎や、言葉だけの、上ずつた叫び聲などに終りがちであります。前の二句の季題は「酷暑」と「涼し」でありますが、これらの季題は、いづれも具體的に「物」を見て寫生のしにくいものでありまして、初學者には苦手のはずであります。尤も後の句も、「日燒」は「物」ではありませんが、その代り作者は、鰈といふ魚を捉へて來て、やはり具體的に「物」に卽く方法を採つてをります。俳句を作るには、一人で考へる場合もあれば、多勢集つて句會する場合もあり、題詠といつて、何か一つ二つ題を決めて作ることもあれば、何でも見たままの季題を拾つて詠むこともありますが、そのすべての場合を通じて、寫生といふことが作句の手法の基となるのであります。まことに「寫生は俳句の大道であります」(虛子門、原月舟氏の言葉)。

寫生は俳句を學ぶ上に最も大切なことでありますので、ここで、今少し寫生について說いておくことが、諸君に對する深切であらうと思ひます。本來、寫生といふ語は、畫論から出てをります。正岡子規がこの用語を文學上に取りあげ、俳句、短歌、文章道の上の革新

旗幟として高くこれを掲げたのであります。歌壇においても屢々議論が繰返されましたが、俳句においては子規の寫生説は虚子先生によつて祖述され、先生に至つてその價値と意義とが確然決定せられたものであります。寫生と花鳥諷詠とは先生が掲げられる二つの標語でありまして、ホトトギス俳句の主調であり、現俳壇を支配する主流をなしてゐるのであります。いま先生の寫生論を概説してみますと、大體つぎのやうなことになるやうであります——

子規の寫生論は「自然」に絶大の價値を認めることにあつた。己れを虚しうして「自然」に對ふと、ただ沈默してゐるかの如き「自然」に深い意味を感ずるやうになる。「自然」を偽ることは罪惡である。深く事實の上に權威を認め、一毫も偽らず飾らずありのままに寫しとることが、作句の心構へでなければならぬといふのであつた。しかし進んで考へると、事實を忠實に寫生するといつても、その事實の取捨選擇の上には作者の個性の働きがなければならぬ。寫眞機のやうに機械的に再現するのではなく作者の頭腦の濾過を經て、或る事實が浮び或る事實が沈澱するのである。その意味からいへば子規の「自然をいつは

らずに寫す」といふ説も純理論ではないといふことにもなる。そこでつづまるところ

私は（恐らく子規居士も）一般俳句を學ぶ人をして月並調に陷し、若くは奇怪なる俳句を作らしめない爲に、又其人をして俳句の道に入る順路を蹈ましめん爲に、又俳句に入れる人をして愈ゝ力强く俳句の表現を得せしめん爲に、假に、善巧方便として、所謂客觀寫生句を作れと稱導するのである。嚴密に言つて客觀寫生句なるものは存在しないにしても、斯く呼ばるるところのものを作らうと志すことが、俳人をして比較的誤まらざる方向に進ます道と信ずるが故に敢て稱導するのである。

といふのが、大正十三、四年頃かかれた「寫生といふこと」の結論になつてをります。

寫生を善巧方便とするのは、この場合小乘的な説きかたをされてゐるもののやうであります。先生の主旨は、「寫生といつても唯だ物を寫すのではなく、作者の頭で別のものを作る」ことであり、「寫生句といふものも、窮極するところは主客兩觀の混一したもの、其境界に到達せねばなりません。お互に之を目的として進みませう。」といふところにあることを知らねばなりません。寫生俳句の平淺呼ばはりをするものの如きは、爲にする攻擊か、でなければ自分自身の理解の「平淺」を曝露すること以外の何ものでもないと思ひま

す。先生はホトトギス最近號の誌上においても、「花鳥諷詠ならびに寫生といふことを反覆する」と題して、持論を强調してをられますので、ここにその重なる部分を引用させて戴くこととします——

「花鳥諷詠とは……敬虔な心持を以て自然界（人間界をも籠めていふ）の四季の現れに對し、己を空うしてひたすらに其現象の微妙なる相に接せんと志すことである。此時に當つてなまじい主觀の限界があると、自然界は其微妙の消息を惜んで、やゝともすると通り一遍の相ほか示さないのである。唯へりくだつた謙虛な心持（自然を大いなりとし我を小なりとする）を持つものにのみ、はじめて微妙幽遠なる其相を顯現するのである。其相に接しようと欲求する心が先づあつて、寫生といふことが起つて來るのである。

寫生といふことは其自然の中に飛込んで其相を把握し、之を（俳句に）現すことである。其時の心持をいへば、明鏡止水の心になつて自然の相に接しようとするのである。順序をいへば自然の相に接し度いと欲求する心の備へがあるところに、微妙な自然界が何等かの躍動の姿を見せてくると、同時に心も躍動して（どちらが先かわからぬ位に働いて）兩者が一つに働いて、そこに自然と心とが一體になつて來るのである。寫生といふ犀利な爪牙はすかさず其時の自然の相を把握するのである。

其自然と心との交流は、寫生のわざを磨くことによつてだん〳〵鋭くなり深くなつて行くのである。寫生のわざを磨くことによつて、自然は心を許してこちらに近よつて來るし、こちらの心眼は

自然に對して明かになつてゆくのである。

併し俳句は季題其ものを詠ふ場合のみを考へることは出來ないのであつて、季題以外の自然人事を詠ふ場合もあり、又感情を詠ふ場合もあるといふことを考へねばならぬ。それ等の場合は其等を詠ふに適當な季題を選擇吟味してそれを配する必要がある。矢張り花鳥諷詠の詩である面目はそれによつて保たれる。

此場合に於ても、自然界人間界の微妙な消息を傳へる爲に寫生といふわざの修練に俟たなければならぬことは前に述べた通りである。季題を配するといふことは、其季題によつて自然人事を又感情を力强く又美しく選ぶことになるのである。それも寫生のわざを練ることによつて自由な境地に進むことが出來るのである。」

# 第五章　省　略　法

前章で述べました寫生といふことは、俳句の作法とは申しますものの、一句の出來上る以前のいはば心の構へかたとでも申すべきものに、大部分觸れてゐる問題のでありますが、本章においては進んで、或る着想を得て、これを一句の形に纏める手段――難かしく申せば表現の技法について述べてみたいと思ひます。俳句的ないひ表しかたにおきまして一ばん大切なのは、省略法であります。俳句としての出來不出來は、この省略が十分に行き屆いてゐるかゐないかによつて、決まることが多いのであります。何を申しても俳句は、極端に形の小さい、結晶體のやうな文學であります。俳句の生れた歴史から申しましても、長い形の詩が、だんだんに縮まつて來て、もうこれ以上には縮められない、縮めたら意味を完全に通じにくくなる、といふ局限まで來て、固まつたのが俳句でありまして、この小粒な形の點においても、世界に類例のない詩だといはれてをります。よく俳句の力は、ヒ

首の力だといはれますが、他の長い詩を槍薙刀や大刀としますれば、俳句は成程、匕首でありませう。大刀には大刀の長所があり、匕首には匕首の用ひかたがあることは、申すまでもありません。俳句はとにかく、さうした小さい器なのでありますから、嵩ばつたものとか、大きな組立をもつたものとかは、この器に收めるに適當しません。無理に押し込めば、器が毀れるか、中味が損ずるか、どちらかであります。うまく收めるにはどうしても、是非必要な最後のものだけを殘して、その外のものを、思ひ切りよく片端から捨ててしまふほかありません。つまり、大省略法を用ひるといふことが必要になつて來るわけであります。

省略は材料の方からも、考へられまするし、材料を斡旋する言葉——言ひ現はしの上からも考へられます。具體的に、作例をもつて說くこととしませう。まづ材料の整理の方から申しますと、たとへばここに

輪飾のかかる機械に初明り

といふ句があつたとします。これは工場のお元日を詠んだものでありまして、增產一路

に邁進するいま、暮も正月もなく、大機械は運轉してゐる。お元日にも機械は休まないのだが、しかし元日は元日らしく、輪飾が機械のどこか端のところに掛かつてゐる、それはいかにも床しい風景である、その輪飾に――機械に――新しい年の希望のしるしであるやうな初明りが、ほのぼのとさしそめてゐる、といふ一句の意味であります。一應感じはないではないと思ひます。しかし讀み返してゐると、少しくどく、すつきりしないやうに思へて來るのは、なぜでありませうか。それは「輪飾り」といふ上に、同じくお正月の季題である「初明り」が重なつてゐるからであることを發見します。「初明り」といふ材料は、この際省略すべきであつたのであります、「初明り」をとれば、お正月の意味の重複が除かれると共に、朝の光といふことも、句の表から消えてしまひますが、それは、この句においては割愛する方が、却て效果があがるのであります。この場合、「初明り」を除き去ることを「夾雜を除く」といひます。その結果、たとへば

輪飾のかかる器械を守るなり

――これは實はわたしの拙い句でありますが――から直して見ますと、要らぬものがな

くなつて、たいへんすつきりとする一方、「守るなり」と淡々といひ流すことによつて、お元日でも工場で働いてゐるものの、職域奉仕の心持が滲み出て、元の句にくらべると數等見直して來るかと思ひます。

つぎに、言葉もしくはいひ廻しの方面からの、省略法を見ませう。村上鬼城といふ人の有名な句に

月さして一間の家でありにけり

といふのがあります。「貧」といふ前書のある句でありまして、今日いふ耐乏生活が詠まれたものであります。わが住む家は、たつた一間きりの小さい家である、しかしこの陋屋にも、天上の月の光は隈なくさし込んで來てくれる、かうして明月を仰ぎ、自然を友としてをれば、物質的に貧乏な暮しでも、わが心は豐かに富んでゐる——といふ意味でありますが、この下五字の「ありにけり」は、あつてもなくても意味に變りはない。ちようど繪畫にたとへていへば、何も書かないで殘しておく、畫面の空白のやうなものであります。「月さして一間の家」といつて、あとまだ五字殘つてゐるのでありますから、ここにどん

な細工をでも、施さうと思へば施し得るのであります。そこをわざと、何もいはないで「ありにげり」とのみ空白に殘すのは、言ひかたの上の大きな省略法であります。日本畫において、廣く空白に殘された部分が、慾ひ畫かれた部分よりも、强くものをいつてゐることは、御承知のとほりでありまして、これが日本藝術に通ずる特徴とされてをります。俳句のやうに日本的性格の著しい詩におきましては、その點が最も顯著であることは當り前のことであります。

奈良七重七堂伽藍八重櫻

芭蕉の有名な句でありますが、テニハもなければ説明の動詞もありません。大なり小なりかういつた省略は、俳句においては常のことであります。（尤もこれは俳句だけには限らず、諺とか標語など殊にさうなのですが。）省略法を用ふるといふことは、聯想の力を有效に利用するといふことであります。僅か十七音ばかりのものに、いかにたくさんの材料を持込んだところで、高は知れてゐるので、それよりも、數多の材料のうち、たつた一つの物、たつた一つの事柄だけを選びとることにする。その代りに、その選び方において、

これをいへば讀者の聯想が、必然それに伴つて大きくひろがるといふ、さういふ肝心なものを、ひとことにする。何がそのたつた一つのかなめに當るかをとつくりと考へる。――ほんの小さいものに大きな役目を果させる唯一つの途なのであります。よく餘韻、餘情がある句とか、背景のある句とか說かれるのは、この聯想の效果の、最も大きく發揮された場合のこと、といつていいかと思ひます。古今の名句は、悉くさういふ句であるといつてもいいのであります。

虛子全集の俳話篇に「背景ある句」といふ一文があります。その中に、芭蕉の弟子の去來といふ人の句の

尾頭のこゝろもと無き海鼠かな

「海鼠はどちらが頭やら虎尾やらわからぬものだ。」といふ意味でありますが、この句を引いて、先生は次のやうにのべられてをります。――「此句を一讀した時は、誰も海鼠のをかしき形を想像して、旨くいつてあると思ふ。是れ此句の表面に現れた意味且價値である。卽ちこの句の表面的價値は、客觀的描寫の成功にあるといつてよい。而もよく味うと、只

海鼠の形を現した許りで無く、奥深く去來其人の優しく打興じた心持が出て居る。『尾頭』と優しくいひ『心もとなき』と寂しくいつたところに去來の主觀が隱くさうとしても隱くせず現れて居る。此優しき言葉、此洗練された言葉を透して、去來其人が海鼠に對した時の心持が、色あざやかに想像される。更に進んでは去來其人の風采までが、此一句によつてなつかしく想像される。是れ此句の裏面に隱くされた意味且價値である。即ち此句の裏面的價値は、主觀的描寫の成功にあるといつてよい。此句に於ける背景とは、即ち此の裏面に隱くされた意味且價値をいふのである。」

初心の方へのお話としては少しどうかとも思ひましたが、表の意味と裏の意味とを實によくかみしめた行き屆いたこの解釋、鑑賞は、一體俳句はこんなふうに味はうものであるといふ、俳句の味はひかたの一班を敎へることになるかと思ひましたので、ここに引用したわけでありました。

長谷川如是閑氏は俳句のもつ文學的興味が主として聯想の作用に基いてゐるものとなし、その因つて來るところは、俳句がその母胎である連歌——それは全く聯想の興味の上

にのみ立つ文學であります――の血脈を引いてゐるからでもあるし、同時にかかる聯想の文學が特に我が國に發達した理由は、日本人の國民性と係はるところが多いといふ興味深い說を發表されてをります。俳句のやうな聯想の文學の發達は、わが國民の感覺――感じかた考へかた――の樣式の統一、卽ち感覺の全國民的近接といふ事情を伴ふ、といふ意見は極めて含蓄多い卓見と思はれます。それはとにかく、俳句が聯想に立つ文學であるといふ事實は爭へないのでありますが、この聯想の力を借りるといふことは、他の言葉で申しますれば、暗示的ないひかたをするといふことであります。暗示といふのは、表面に理由や意味をはつきり示さないで、たとへば容貌擧動などで、それとなくこれを他人に傳へることであります。俳句の表現では、よく「さり氣なく叙せよ」といひますが、それは露骨にいはないで、裏から意味を覺らせるやうな、含みをもつたいひ方をせよといふことで、まさしくこの暗示法に當るのであります。省略、聯想、暗示、餘韻餘情、みな一連の繫がりをもつものでありまして、俳句的表現手法の骨組をなすものであります。ここに一つの例について申して見ませう。

萬葉に東歌あり紀元節

氷原秋櫻子氏の作であります。東歌は東國の人の歌として、萬葉集の一卷に集めて擧がつてをりますが、當時の文化の中心から遠ざかつてゐた、東國の人の歌といふので、萬葉集の中におきましても、かくべつ純樸の情緒が豊かである感じがするのであります。作者は、悠久二千六百年の昔を偲ぶ紀元節において、最も古いわが民族の詩、萬葉集を聯想し、更にその中にあの素樸な東歌のあることに、特に思ひを馳せてゐるのであります。その聯想はごく自然であつて、誰の感じにもよくうつるのであります。この句は直接には紀元節のことを陳べてゐないに拘はらず、「萬葉」、「東歌」が暗示的にもたらす効果によつて——それから來る聯想の力によつて——讀者は、十二分に紀元節の感じを、受けとることが出來るのであります。そして讀み下した後に嫋々と餘韻をひくのは、暗示と聯想が巧みにつかはれてゐるからであります。

わたしは前にながながと季題のことをのべましたが、俳句において季題が強くものをいひますのも、季題といふものが、いづれもそのうしろに大きな背景を負つてをり、暗示的

な意味が強く、幾多の聯想と繋つてゐるからなのであります。たとへば鶯といへば、梅が咲き、麥がのび　風が柔く日ざしが美しく、野山が霞立つた「自然」を、すぐ聯想いたします。ただ「鶯や」といつただけで、今のべたやうな長い説明をすべて省略して、一語でこれに代へることが出來るのでありますが、反對にたとへば雀や烏は、さういふ定まつた季節の聯想をもつてをりません。ですから鶯は季題であつて、ただの烏や雀は季題でないのであります。しかし寒鴉とか初鴉とか寒雀とか初雀とかなると、また冬の季題、新年の季題となつて來るのであります。季題は決して普通の文章の場合のやうに、單に物事を指し示すだけの意味に止まるものではないのであります。なほ「鶯や」といふ場合の「や」といふ切字の大きな意義――これが大省略の任務を負うてゐるといふことにつきましては、前に虚子先生の説を引用したとほりであります。「鶯」がどうしたといふ説明語を省略して、切字の「や」を下におくだけで片付けてしまつてゐるわけなのであります。形の小さい俳句が、文字を極度に節約するところから、自然にかういふものが生れて來たわけであります。

かやうに省略法は肝要でありますが、省略の方法を誤り、無理なもぎ捨て方をすると、一句の意味が通らない、子供の片言のやうな俳句になります。又、暗示は言葉をつつむ結果、ややもすれば獨りよがりになり、作者一人いい氣持でも、他人にはその氣持が一向感ぜられなかつたりいたします。でありますから、一つの着想を、ともかく一句の形にまとめることが出來たらまづ必ず、これで省略は十分行屆いてゐるか、何か夾雜物が殘つてはゐないか、これで暗示的な効果は十分だらうか、この暗示は果して讀者に通ずるだらうか、又このことだけをいつてあとは讀者の想像に委せようとしてゐるわけなのだが、この句に現したところだけで、果して無理がないだらうか、――さういふことを仔細に檢討を加へてみるべきであります。

以上お話いたしました寫生といふことと、省略的筆法といふこととは、俳句の作りかたの基本のやうなものであると思ひます。これに付け加へまして、作句上の個個の注意を次の章において少しばかり述べて見たいと思ひます。

# 第六章　作法心得條々

本章においては實作上のもろもろの注意を、思ひつくままに述べることにいたします。極めて大切な心得の箇條もあれば、比較的細かい注意事項もあり、大小輕重いろいろの覺え書であります。

## （一）推　敲

推敲といふ言葉の語源は、むかし支那の詩人が「鳥ハ池邊ノ樹ニ宿ス、僧ハ月下ノ門ヲ敲ク」といふ句を得たとき「推」の字を用ゐようか「敲」の字を用ゐようかに苦心した揚句、終に「敲」の字の方にきめたといふ故事に基くさうであります。詩や文章を作る上において、考をつくし文字をよく練ることをいふのであります。文章や詩といふうちにも、俳句のやうに極端に形の小さい文學においては、一字一語のもつ重量が特に著しいのであ

りまして推敲がかくべつ重い役目を負ふことになるのであります。一字一語のちがひはおろか、或る一字を假名でかくか漢字をあてるかにさへ氣を配る、それくらゐの纖細な神經を作家はもつべきなのであります。或る對象物をとらへ、そのどこか一角に眼を据ゑ、これに自分の感じを事よせて十七字の形に整へる、かく發想しかく承けてかく結ぶ、そして一句が出來上つて手帳にかきとめた、としますと、すぐこれでよしと安心して終つてはいけません。一應出來たと思つたものは、自分で何度も繰返してよんで見て、果して自分のいひたいと思ふことが、それで十分に出てゐるかどうかを、幾度も考へ直して見なければなりません。最もよい表現は一つしかないはずでありますが、書きとめたものが果してその最もよい唯一の表現にちやんと當つてゐるかどうかが、あくまでも追及されなければなりません。俳句のやうな最短詩形の文學においては、ほんのちよつとした言葉一つで、全體が生きたり死んだり、又少しいひかたをかへるだけで、心持がずつと深く出たりするといふ點が、形の長い詩などに較べて、特に著しいのであります。これで出來たと、喜んで手帳にかいておいた句が、翌くる朝になつて、新しい頭で讀み直して見ると、まるで面白

くない、自分の描かうと思つたことが、そのいひかたでは、半分も出てゐなかつたことを發見する――象徴的な性格の著しい結果、自然さういふことがありがちなのであります――さういつたことを、わたし共はしよつちう經驗してゐるのであります。芭蕉の言葉にも、舌頭に千轉せよ、といふのがありますが、芭蕉自身、この推敲に骨身を削るやうな苦勞をした、逸話的ないろいろの話も傳へられてをります。御承知のとほり芭蕉は旅中大阪の客舍に病歿したのでありますが、その病中に枕邊に侍つた弟子の去來に向つて、自分が前に作つて殘しておいた

清瀧や浪にちりなき夏の月

といふ句を、いま

清瀧や波にちり込青松葉

と作りかへたから、前の草稿の句を破り棄てるやうにと語つた話が汎く傳へられてをります。「名人の句に心を用ゐたまふ事しらるべし。」とその傳書――去來抄――もかいてあります。

ほととぎす聲横たふや水の上

一聲の江に横ふやほととぎす

自作二句について芭蕉は門人の評をきいた上で前者に定めたといふやうな話も殘つてをります。――「一たびは聲や横たふ、とも、一聲の江に横たふや、とも句作有。人にも判させて後、江の字拔て水の上、とくつろげて、句の用ひよろしき方定る。」（『三冊子』）

その外たとへば

閑かさや岩にしみ入る蟬の聲

といふ有名な句は、

さびしさや岩にしみ込む蟬の聲

を推敲したものだといはれ、更にまた彼の「古池」の吟も、はじめは

古池や蛙飛んだる水の音

であつたといはれます。

枯枝に烏のとまりたるや秋の暮

の句は、後になつて

枯枝に烏のとまりけり秋の暮

と直つてをります。かういふ例をあげたら數限りなくあるのでありまして、名匠の彫琢縷刻のあとを知るに足るのであります。子規の弟子の河東碧梧桐氏が

山茶花や髪結ふ日南○○○○○

といふ上五中七を得てその後の五字に苦しみ、下五だけをいろいろに試みて無慮數十句を作つた話もあります。

念を入れて推敲に推敲を加へることは大切でありますが、一方ではこんなこともいはれます。折角うまく出來たものを、ああでもないかうでもないとひねくり廻し、餘計な細工を加へたりして却つて改惡してしまつたりすることはないか——それはないとはいへません。閃の詩とも形容されるくらゐ、刹那の勝負でゆく性質を多分に備へた俳句のやうな最短詩においては、天から授かるやうに、もうそれだけで渾然と出來上つた美玉をたまに獲ることもありますが、いつもさう誂へ向きにばかりゆくものではありません。殊にさうい

ふ例はどんなか天才とか、藝が圓熟しきつた場合とかにのみ起るのでありまして、凡庸のわれわれ、まして初學のうちに期待出來るものではありません。芭蕉さへあんなに苦勞してゐるのであります。初學のものなどは殊更、一語一字の推敲に血の滲むやうな辛苦を重ぬべきであります。

## (二) 語彙の豐富

推敲に關連して語彙の豐富——言葉の豐富な智識といふことについて、一言しませう。むつかしい言葉、文字の智識などは、なくてよろしいと前に申しましたが、それは修學の第一期時代のことでありまして、第二期に入りますと、言葉をたくさん頭に蓄へてをることの必要をも、知らねばなりません。同じ意味を現はす數多の言葉を知つてゐて、その中からこれこそと思ふ一ばん適切な——といふよりも、これを措いては他になかつたといふ、さういふたつた一つの言葉を選み出して來なければならぬのであります。言葉を斡旋する——面白くいひ廻す——ことについても、全く同樣にいへるのであります。かやうに

申しまするのは、たとへば漢詩漢文に用ひられる難かしい形容だとか、古典に出て來るみやびやかな、現代人の耳に疎い言葉などを覺えなさい、といふわけでは決してありません。それらを自由に使ひこなすこと、もとより結構ではありますが、さういふ現代には死んだ言葉よりも、現在目の前に轉つてゐる、日常の用語の中にこそ、却つてぢかにわたしたちの心に觸れるものがあることを、知つて戴きたいのであります。芭蕉の殘した言葉を見ましても、或は「俳諧は今日の平話を用ゆ」とか、或は「俳諧は平話の新しみを本意とす」とか、或は「俳諧は俗談平話をしり、之を正す也」とかいつたのがあります。深く味はねばならぬところと思ひます。このことは庶民文學としての俳諧の起源に關聯して考へても當然であります。われわれの日常の言葉をいかに自分の詩の中に生かすかに專ら苦心する、といふ意味の詩人の言葉を聞いて、大いに感じたことでありました。わたしのここにいふ言葉の豐富さも、必しも萬葉集や唐詩の中からでなく、存外さういふ身近かなところから得られるものなのであります。一つの例をあげてみませう。

大寒の粥あつ〳〵と母子かな

といふ清原枴童氏の句があります。寒さの頂上の大寒に、母子二人で、あついお粥を「おゝあつあつ」と、ふうふう吹いて戴いてゐるといふのであります。母一人子一人たよりあつて、つつましく、しかも幸福に暮してゐる、或る家の容子が、ふつくらと浮び出て、心にしみる句と思ひますが、この一句にあふれるしみじみした情味は、何處から來るかと申しますと、「あつあつと」といふ、俗にくだけた言葉の力によることが多いのであります。これはほんの一例であます。道は邇きにありとか申しますが、わたしどもはすぐ自分の足もとに、さういふ大切なものが求められることを知らねばならぬと思ひます。

## （三）心と姿

推敲や言葉の豐富な用意に心を勞する結果、表現の技術――わざ――を、あまりに重くお考へになり過ぎてはいけません。俳句ももとより藝道の一つ――殊に形式と離すことの出來ない「詩」といふ文學――なのでありますから、表現の技術の大切なことは、申すまでもありません。出來たものは、十分に磨きのかかつた一個の藝品、藝術作品として、姿

形の整つたものでなければなりませんが、外に現はれた姿よりも、もつと大切なのは、内にこもつた心であります。句の心と姿とは、昔から並べて説かれてをります。心と姿とに、元來優劣前後があるわけでもなく、また心と姿とが、きつかりときり離され得るものではなくて、二つが渾然ととけあつて一つの作品を成すものでもあるのですが　一應この二つを分けて比較して考へますれば、少くも初學の間は、姿よりも心の方を大切に思はねばなりません。正しいところを見てゐる、よいものを感じてゐる、といふことが先きであつて、それをどんな言葉で、どんなにいひ廻すかといふことは、二の次でなければならぬのであります。考へはよいところへ當つてゐるのだが、いひかたがまづい、といふのは、たいへん恃もしいのでありますが、反對に、器用に言ひまはしてはあるけれど、言葉だけで、實感が乏しいといつたやうなのは、行末あぶない氣がするのであります。たとへばここに、こんな句があります。

空壕に櫻を挿して事務執れり

某飛行機會社に勤めて居られる、長尾三岐夫といふかたの作であります。着眼も別段新し

いとはいへず、いひかたも、まことにたどたどしいのでありますが、初學の句としまして、眼の着けどころが正しく、思想が穩健であり、健康的であることに、好感がもてるのであります。この内容で、表現の上にもつと磨きをかけて、一段と高級な藝術品に仕上げるといふことは、これから追ひ追ひの修行にまつこととしてよろしいと思ひます。かういふ素直な見かた、まつすぐな感じかたを養ひ培ふことが大切といふことになるのであります。芭蕉の遺語にもある「或人の句は作に過て心の直を失ふ也。心の作はよし、詞の作好べからずと也」などの教を、初學のうちはかくべつ心に記せねばならぬと思ひます。

## (四) 人事の句

俳句を作るに當つて、どんなものごと、どんな事物を題材として取り扱つたらよろしいかといふことにつきましては、材料そのものにかういふのがよろしい、ああいふのはいけないといふ區別は本來ないはずで、要するに、自分の心に強く觸れた事柄、眞實いいなとか、美しいなとか思つたことを、詠めばよろしいわけであります。たださういふうちに

も、初學の心得かたとして、いろいろ注意は要ります。それを少し述べて見ませう。もちろん季題が卽ち材料ではあるのですが、季題にどういふ事物を、配合するかとか、季題が直接に物を指してゐない場合——たとへば「春寒し」とか、「春めく」とかいふやうな場合に、その感じを現はすのに、どんな事物を借りて來るのがよいかとかいふ問題はあるわけであります。

まづ材料の方面から俳句をあらつぽく二つに分けまして、自然を詠んだ句と、人事を扱つた句として見ます。人事の句と申しましても、もちろん、自然の影響の下にある、人間生活の箇々の事物を詠むのでありまして、たとへば春の季節で申しますれば、雛とか、爐塞ぎとか、春の風邪とか、春炬燵、春火桶とか、開帳とか、彼岸詣とか、大試驗とか卒業とか入學とか、摘草とか物の種子を蒔くとか、或はもつときわどいところでは胴着脫ぐとか、大掃除とかいつた類のものでありますが、かういふ日常生活に卽いた事物は、どうも卑しく、低く、俗に流れ易いものであります。俳句はたびたび述べたやうに、本來自然を諷詠する詩でありまして、「自然」を材料にとるのが一ばんらくであります。殊に初學の

間は、人事よりもまづ、「自然」を詠むことが、一ばん安全な途であります。たとへば

軍醫長ほほゑみ叩く裸かな

西山胡鬼氏の作。また

許されて晝寢を深く貪りぬ

滿洲派遣の松元桃村氏の作。――かういつたやうな句は、「裸」、「晝寢」などの人事を捉へて、少しも俗つぽいところがなく、或は愉快に朗らかな感じ、或は何でもないことの中に、かすかなあはれの籠つた味などを、實によく出してゐますが、相當年期を入れた後でないと、かう手際よくはなかなか行きません。それよりも、たとへば

トーチカや擬裝の甘藷の花ざかり

海上勤務の、青山千童氏の作。また

火砲吼ゆほとりに野菊戰ける

北支派遣、石村王禪氏の作。――かういつた類の、自然の風物を目標にとる方が、こなし易くて、初學者には適するのであります。

これらは皆現地で戰爭を詠んだ句でありますが、內地で戰爭の感激をうたふ俳句を作ることは、なかなか容易でありません。戰爭の感激をうたふ俳句——これほど大きな人事句はないからであります。

## (五) 大景と小景

「自然」に材料を求めるといつても、自然現象はそれこそ森羅萬象であります。眼も遙かなる大きな景色から、道ばたの、名もない草の花に至るまで、大小雜多であります。山上から展望したやうな大景を僅か十七字の小さい藥籠中に收めること、蒼海の眺めのやうな茫漠としたものに、何か一つの焦點を見出して一句に纏めること、山川林野、遠近、錯綜した風景を壓縮し單純化するといふやうなことは、百練千磨の手腕を必要としますので、初學者の修行としては、前に寫生の章で述べたやうに、手にとつて見ることの出來るやうな、一草一木、或はきちんと纏つた小さい景色に、ぢつと眼を据ゑてかかるのが近道であります。たとへば

銀漢は濃ゆく連山險しけれ

北支派遣、磯若鮎氏の作。かういふ大きな景色を、かういふふうに一句にまとめあげることは、容易でありませんから

ゴムの葉を敷きて即ち鏡餅

ビルマ派遣、岡田辰比古氏の作。――南方のことで裏白も樒葉もないので、假にゴムの葉を敷いて、鏡餅を飾つてこれでよし、といふのであります。――かういふ小さい事柄を覘ふ方が、初歩の修行としては安全であります。あまり大きなものとのみ取り組むと、骨ばかり折れて、結局こなしきれなくて、疲れて厭氣がさして、つひには俳句を投げてしまふ、さういふ危險が多分にあるのであります。何事をするにも分相應といふことを知らねばなりません。

## (六) 模倣について

まねび、まねぶといつて「學ぶ」といふことは、元來まねぶ――まねをする――といふ

ことと通ずるのであります。書道などを習ふのにも、最初或る階梯においては、お手本を透き寫しにする、お手本の上をそのとほりになぞるといふことをするとか聞きます。どの藝道においても類似のことはあると思ひます。俳句においても最初のほどは、先生とか、尊敬する先輩の作るものを眞似る、或は意識しないで自然それに似て來る、といふことはあつていいわけであります。ただ眞似るといふうちにも、句風、詠みぶりを眞似るといふこともあれば、或る句の表現を眞似るといふこともあります。態度とか句風とかの模倣は、結構でありますが、或る表現の模倣といつたものは戒めねばなりません。ところが俳句には、この後の種類の模倣——といふよりも人の句の燒き直し、もつと進んでいへば表現の剽窃、といつてよいやうなものが、實に多いのであります。何をいつても俳句は、十七字しかないのでありますから、人の表現を、五六字づつ失敬して組合せても、やすやすと一句出來てしまふのであります。わたしはいろいろの募集句の選におきまして、銃後風景を詠んだもので、「戰へる國靜かなり云々」といふ句に、何十度ぶつつかつたか知れません。「戰へる國靜なり(る)○○○○○」その五文字へ何でもはまります。「戰へる國靜かな

る雛飾る、麥を蹈む、天の川、梅の花、夜業かな、夜學かな」――實にうんざりしてしまふのであります。これは必しも眞似には限らないかも知れません。單なる類句類想である場合も多いかも知れませんが、いづれにしてもさういふ繰返しが、もう意味ないことに、變りはありません。いかに善意でありましても、類句を發見すれば、屢く引さがらなければなりません。

先年下總の方へ、吟行しましたとき、こんなことがありました。めいめい汽車の窓から眺めた景色をよんで、手帳にかきとめるのでありますが、後にいよいよ句會となつて發表されて見ると、全然同じ句が、二人の別の作者によつて作られてゐたことが、發見されました。それは

初芽の出さうな山が續きけり

といふのであります。これは、全く別人の作が偶々暗合したもので、誰にも罪はないのでありますが、俳句にはかういふことも間々あるのであります。「あたゝかき雨が降るなり――」この下の五文字にいろいろなものが當てられて、それが古句に載つたり現代人の句

集に錄せられたりしてゐるのを、わたしどもは實際眼にしてゐるのであります。これは僅か十七音といふ短い詩形がもつ、宿命的な弱味でありまして、如何ともすることが出來ません。ただ平素、なるたけ多くの例句に目をさらし、又出來たものは、つとめて人に見て貰つて、類句、類想はないか、たとひ暗合としても、他人に同じ句などないかといふことを、確める外はないのであります。ですから俳句を學ぶには、多く例句をよむことが必要でありますが、それは他人の句をまねび、まねぶとともに、一方では先人のすでにいつてしまつてゐることを、知らないで自分が復た繰返すといふことのないために例句に眼を曝すのである——さういふ意味もあるのだと思はねばならぬのであります。

## （七）三多の說

三多の說などといふ名稱はわたしが戯れに稱へて見たに過ぎません。それは俳句を學びそめた人から、上達の方法は、と問はれたのに對して假にそんなことをいつて見たのであります。三多といふのは多く讀み、多く作り、多く捨てるといふ意味であります。今少し

くその三者に私解を加へて見ませう。

第一に多く讀むことですが、讀むものはどういふ種類のものを選ぶべきかといふ問題です。答は句集――それもつとめて現代人の句集――自分の信奉（敢てかういふ言葉を用ゐます）する流派の句集――であります。裏からいへば俳句論とか、俳諧史とか、古俳諧とかいつた類のものは後廻しにするといふことであります。もちろん俳句の勉强にはかういふ基礎的研究も大事であります。もつと進んでいへば俳諧關係のみならず、和歌や詩はもとより、汎く一般文藝書を讀んで、「詩藻」を培ふことも要るのでありますが、さう遠大な計畫ばかり立てても日暮れて道遠いことになつては何の甲斐もありません。わたしはもつと實際的な卑近な忠言をしようとしてゐるのであります。

句集とともに雜誌も必要であります。それらのものを讀んでも面白いと思ふ句ばかりではないでせうが、それは一向構ひません。これは面白い、と思ふ句だけに印でもつけて、それを片端から暗記してゆくことです。

句集に次いでは評釋書を讀むことが、ためになるやうです。

第二に多く作ることです。寡作か多作かは人にもよることと思ひますが、俳句に關する限りわたしの乏しい經驗によれば、多く作ることを勸める方が――少くも初心者に向つては――適實のやうであります。わたし自身のことをいへば、わたしは少し作り過ぎるくらゐかと思ひます――或は發表し過ぎる、といふのが當るかも知れませんが。「あなたは一體一と月に何句くらゐお作りですか。」と人に問はれることがありますが、この答にはちよつと窮します。といふのは、一句が出來るまでには何句もの下書？が要るので、わたしのやうに、下書を片端から句帳にかきつけてゆく者にとつては、句帳はぢきに塞がつてしまふのですが、その下書を一つ一つ作句の數に數へることは出來ないからであります。推敲を重ねた揚句の最後の一句だけを帳面にかきつける主義ならそれでもよろしい。それは寡作主義といつて、天來の啓示でも待つかのやうにぢつと構え込んでばかりゐるのとは違ひます。天來主義は初學の勉强態度としてはどうも面白くないやうであります。濫作は戒めなければならぬとはいふものの、いづれかといへば多きを憂へず少きを憾とするのが、俳句の場合であるやうにわたしなどは考へてをります。

第三に多く捨てることであります。これは自然第二の多く作るといふことの意味にも關係することでありますが、作つたものを片端から惜し氣もなく捨てることが必要であります。(結果は少し作るのと同じことになるといへばいへますが、始めから下書も作らないのとは過程が違ひます。)ただその捨てかたがむつかしいのであります。前にも述べたとほり俳句はその暗示的表現の性質からして、どうしても自分によしあしの判斷がつきにくいものであります。結局他人の判定を乞ふ外ないのであります。芭蕉なども「この句いかがあるべきや」といふやうな手紙で、自分の句の批判を門人たちに求めた例などが隨分多くあるやうであります。芭蕉さへさうだつたといひたいのであります。さてその他の人でありますが、この人と頼む師をもち、常にその師の朱を仰ぐことが出來ればこれにこしたことはありません。しかし、誰もいつもさういふ便宜をもつには限りませんから、その場合にはせめて同行同信の者の忌憚のない批判を乞ふことです。句會の互選などもその意味で、決して忽せに出來ないのであります。同輩の判は區區まちまちでありませう。それが當つてゐることもあり當つてゐないこともありませうがやむを得ません。それでいいのであり

ます。それを參考にして謙虛に反省した上で、手帳に一ぱい書き埋めたもののうちの會心のものを生かす、それでいいのであります。

これがわたしの假にいふ作句上達三多の說でありまして、極めて小乘的ではあるが、經驗上からこれが捷徑であるには違ひないやうに、わたしは信じてゐるのであります。

## (八) 熱心といふこと

或る人はかういふことをいひます。「俳句をやりたいのだが自分はもう年をとつてゐるので。」——わたしはそれに答へます。なるほど若い者には何をやつても叶はないことは間違ありません。しかし、だからといつて俳句を諦めることはありません。むしろ俳句は老成の文學といつてもいい性質を備へてをります。若い者には若い者の俳句があつていいやうに、五十臺の者には五十臺の者の俳句、六十臺の人には六十臺の俳句があつていいわけであります。六十歲七十歲の年齡の大切さは、二十歲三十歲の年齡の大切さと、かはるところはありません。上達がたとひ遲遲としてをらうと、結局最後にものをいふものは熱心

一つです――と。

また或る人はかういふことをいひます。「俳句をはじめたいのだが、わたしは文字を知らないので。」――わたしはそれに答へます。俳句には文字も學問も、あるに越したことはありませんが、なくても一向かまひません。そんなものが、時として邪魔になることさへあるのは、女子供が大人のかなはぬ名作をものする實際を見てもわかります。そんなことにひけ目を感ずることは少しもありませんが、また知らうと思へば俳句の文字や言葉など造作なく覺えられます。そんなことは末節の末節です。結局最後にものをいふのは熱心一つです――と。

また或る人はかういふことをいひます。「俳句をやりたいのだが、どうも自分はその方の天分に乏しいので。」――わたしはそれに答へます。なるほど藝道には天分の大切なことは爭はれません。たとへば繪畫などにしましても、その天稟をもたないものがいかに努力しても、努力だけでは高が知れてゐます。早く畫道を見限つて他の方面に身を立てた方が賢明である、といふやうな場合もあります。その天稟が割合に支配的でないことは、あら

ゆる藝道のうちで俳句が一ばんだと思ひます。才を恃んで手を束ねて勉强を怠つてゐる驕兒が、孜々として鈍才に鞭うつて怠らない凡兒にぐんぐんと押されてゆく實際を、わたしたちは身邊に見てゐるのであります。結局最後にものをいふのは熱心一つです——と。

およそ俳句くらゐ熱心がものをいふ藝は他にあまりあるまいといふ氣がします。雜誌によつて勉强してゐる場合など、少し熱心の昂まつた時と、少し不熱心だつた時とでは、その成績がはつきりと師の眼識に映じて、それが一いち雜誌の上に現れることは恐ろしいばかりであります。わたしども自分の體驗からして、この道においては、進むか退くかの二途ほかない、一處に停頓するといふことはない。そして進退二途のいづれかを決定するものには、ただ熱心あるのみだといふことを痛感してゐるのであります。三多の說などは結局「熱心」といふ二字に總決算されるはずのものなのであります。

# 第七章　題詠・句會・吟行

俳句の作りかたとして、これまでにわたしは寫生とか省略的筆法とかいふ類のことを述べて來ました。これは對象物に對ふ態度、心の構へかた、材料の捉へかた、材料を摑んでからこれを一個の作品に纏めあげるまでの技法――むつかしくいへば内的表現が外的表現に至るまでの過程――等に關することでありますが、俳句の作法の形式的方面としては、別に、たとへば作句の時とか場處とかいつた類の、外部的の事柄の話が殘つてゐるわけであります。卽ち俳句作法の章を設けて、題詠、句會、吟行等のことが說明されてゐるのを普通とするのであります。

## 一、題　詠

題詠といふのは、前に述べた歲時記のうちから何でも任意の題を捉へて來て、これを俳

句に詠むことであります。少しの隙に坐つてゐて一人で出來る最も手輕な方法であります。或は夜、床に就いて眠に入るまでの僅かの時間に枕許に手帳をおいて考へてもいいかも知れません。(そんなのはあまりいい方法とは申されませんが)。題に緣れば作り易いことは事實であり、初歩の間など誰でも專ら行ふ勉强の方法でありますが、題詠の易きに狎れることは戒めなければなりません。殊に題詠の場合に注意すべきことは、例句をあさつて燒直しを試みたり、「頭」で「空想」する句を作つたりしないことです。題を先決しないで目の前に實際眼に觸れて感興を喚んだ季題を拾つて詠む——囑目吟詠——といふ方法がありますが、題詠の場合でも囑目で詠む心持を離れないやうにする、いひかへればかつて自分が實際見たその季題の景色を回想して、それを寫生するやうな氣持で作るといふ心懸が大切なのであります。それが題詠句を、とかく陷り易い千篇一律の弊から救ふ途であります。題詠の心得について、虚子先生は極く平易に、實際的に次のやうに說いてをられます。秋雨の題だとすれば

「……かつて自分の遭遇した秋雨の景色、並びにその秋雨の下にあつた出來事を回想して見て、

即ち頭のうちで秋雨の景色の中をさまよつて見て作るのであります。

頭のうちで秋雨の景色の中をさまよつて見て、ある景色を十七字に纏めて見ようと試みます。どうしても十七字になりません、その場合は止めます。

他の景色に移ります。その景色を十七字に纏めて見ようと試みます。どうしても十七字になりません。その場合は止めます。

他の景色に移ります。その景色を十七字に纏めて見ようと試みます。それも十七字になりません。その場合も止めます。

そんな風に頭のうちで秋雨の中をたどり歩いて、種々の景色に遭遇して見て、それを十七字にして見て、漸く十七字になりさうな場合は、一途に其處に心をとめて、その景良をなほよく考へて、そこに何物かのあつたことを更に思ひついたり、又文字を多少置きかへて見たりしてやつとのことで十七字になります。それを手帳に書きとめます。」

巨匠の實際の經驗から出てゐる、手をとつて教へるやうな深切な教へだと思ひます。

## 二、句會

これは題詠を一人でやらず、大勢のものが一堂に集つてやる方法で、運座などといつて昔から廣く行はれてゐる方法であります。運座の方式は昔は相當喧しかつたやうでありま

す。選は宗匠一人で行ひ、それが席上で發表されたさうであります。しかし今日の句會はもつと自由な、お互の切磋琢磨の道場であります。兼題をもちより、席題を課し、一定の出句制限と締切時限を設け、清記、互選、披講、場合によつては中心たる選者の講評、といふ順序に運んで參ります。

一向專念、與へられた時間內に句を纏めるといふことも、必要な一つの修練であります。他人と一しよであるためにお互に競ひ勵み合ふ結果となる。殊に中心となる人と同席してゐることが、强い刺戟となることも事實であります。それよりも席上すぐ發表になる選の結果が端的に覿面に身にこたへて、喜んだり悔んだり反省させられたりする、その間に自然に啓發する效果は莫大なものであります。この場合中心たる先生の選を篤と玩味しなければならぬのはもちろんでありますが、互選の結果をも決して馬鹿にしてはなりません。互選の結果が先生の選といかに喰ひ違ふかといふことを、一句一句について檢討しなければなりません。また自分の選が先生の選とどれだけ一致し、どれだけ外れたか、自分の選と一般互選とはどんなに合致また咀嚼したか、それらのことを執念く比較することによつて、

學び覺るところがなければならぬのであります。選は作と同じ意義のある修練であります。またその人の選を見ると、作を見るよりもその人の俳句に對する理解の深淺がよくわかるくらゐのものであります。句會は選の修練の道場でもあります。暗示、象徴、聯想の文學である俳句において、「選」といふことが大切な役目をもつことは當然といはねばなりません。

## 三、吟　行

これは俳句を作りながら山野を歩くことであります。寫生の重要さがわかつて來るとともに吟行がますます盛んとなり、吟行は今日の俳句界を特色づける行動の一つとなつてをります。手帳片手に一人畦道を歩く吟行もあるし、多勢で乘物に乘つて遠く出掛ける吟行もあります。それが延長されると俳句旅行になるわけで、藝術家が旅行しては詩藻を肥やすのと同じ役目を、寫生吟行ももつてゐるわけであります。吟行の後には句會を開いて出來た句を發表し、互選し、披講します。

一室に閉籠つて句を案ずるのなどと違つて、青空の下に吟行して自然の姿に接觸し、新鮮

な刺戟によつて生れた句が、どこか生氣潑剌としたものばかりであることは――たとひ表現の技法上十分の洗練といふことにまだ不足があつたりするとしても――少し句作の經驗を積んで來ると、誰でも自得するところであります。事情の許す限り吟行を試ることは、俳句を正しく學び側道に外れまじとする最も賢明な行きかたであります。

まづ題詠から出發して句會となり、吟行となるといふのが普通の順序でありますが、三者それぞれ獨立したものではなく、互に相關連してをり、また三者が俳句の目的であるわけでももとよりありません。要するにみな季題と感情との融合――俳句はその境に生れる詩であります。季題と感情とがいづれからいづれへ働きかけるといふのでもなく、お互に歩みよつて、渾然一體となる、一つの焰に燃えあがる、それが自然詩「俳句」であります――を誘ひ導く手段に過ぎないのであります。「常に感情が動いて季題を求め、季題が働きかけて感情を刺戟してをるといふやうな人は必要がないのであります。が、さういふ風にゆかない人は他の刺戟を借りる題詠、句會、吟行等を最も便宜な方法とするのであります。」（虚子）

# 第八章　俳句の味はひかた

けふはわたしのお話の最後といたしまして、俳句の味はひ方について申してみたいと思ひます。味はひ方と申しましても、これが俳句を味はう方法であるといふやうなものが、もちろんあるわけのものではありません。結局、自然自然に會得して戴くの外に、途はないのであります。一體俳句の道におきましては、俳句の味のわかることと、俳句を作るといふこととは、いつも伴なつてゐるものであります。俳句を、自分でも作つて見なければ、俳句の味はなかなかわからず、又、俳句がわかり俳句を讀んで愉しんでゐる人は、同時に、屹度俳句の作家でもあるのが、實際のやうであります。自然、作りかたは即ち味はひかたであることになるのであります。であればこそ、わたしのこれまでのお話なども、作りかたである一方、味はひかたにもおのづと觸れた點がたくさんあつたわけであります。

俳句は味の文學といつてもいいかと思ひます。「味はふ」といふことが、外のどの藝道よ

りも俳句の場合に、一ばんよく嵌るやうな心持さへいたします。ところが物の味といふものは、言葉で説明しにくくて、實際自分の舌の先で感じとる外ないものであります。味が細かい、こくのあるものであればあるほど、一層さうであります。俳句の上乘——一番高いところに位する作品は、見た眼の派手な、一目惚れのする類のものではなくて、反對に、一見淡々とした、しかし、嚙みしめてゐる間にだんだん味が出て來る、といつたふうのものなのであります。嚙みしめて出て來るいふにいへない味、言葉で説けないで、心でなるほどとうなづく味——さういふのが俳句らしい味であるといつていいのであります。これはどうしても實作をもつて鍛錬してゐる間に、自然と悟つて貰ふほかないのであります。

春立ちてまだ九日の野山哉

芭蕉名句の一つ。わたしも大好きな句でありますが、さてこの句のどこがそんなにすきなのかといはれても、わたしには十分説明は出來ないのであります。それにもかかはらず、その季節になると、夕方のうすら赤い靜かな空の色など眺めたりしながら、きつとこの句を思ひ出して口ずさむ、それほどに一句が心にしみて離れないのであります。これはただ

一つの例でありますが、名句の魅力はだいたいみなさういつたものだと思ふのであります。以心傳心といふことがありますが、俳句の味をわかつて貰ふには、全くそれによる外ないのであります。

出來上つた俳句は、一箇の美術品のやうなものであります。そつと置いて眺めて、心で味はふ、それで十分であり、それ以上に出づべきものではありません。實際、俳句の解譯が、折角の原作を傷けるばかりであることは隨分多く、殊に自分の句に、自分で解譯を加へるなんてことは、苦勞して美しく磨き上げた白珠を、好き好んで手垢で汚すやうなものだとよくいはれます。分らない人には、分つてくれるときが來るまで、默つて待つてゐるのがいいのであります。

しかしかういつて終へば、話はお終ひでありまして、それでは初學者に對して、あまり深切が足りないといふものだらうと思ひます。俳句の解釋つて實に厄介なものではありますけれども、正しい解釋が、俳句の味の、せめて幾分かを傳へるたしになることは確かであります。わたしなど、自分の實際の經驗からいたしまして、前に述べたやうな三多の說

をなしてゐるのでありますが、その時にも觸れておきましたとほり、つとめて古今の俳句、の評釋の書物をよむことは、句作上達の捷徑であらうと初學者におすすめしてゐるくらゐであります。そこで本章におきましても俳句の味はひ方について、やはり一言二言は費しておきたいと思ふわけであります。

俳句はむつかしくてわからないといふことをよく聞きますが、そのわからないといふのに、大體二つの場合があると思ひます。一つは、何をいつてゐるのか一句の意味がわからない、通じないといふのと、今一つは意味はわかるけれども、それがなぜ面白いのかわからない、趣がわからないといふのとであります。俳句の味はひかたは、重にその後の場合に關することでありますが、しかし味がわかるには、その前にまづ意味がわからねばならぬことは申すまでもありません。難解俳句には前者の場合に當るものも相當にあるやうであります。古い俳句——例へば其角の流れの江戸座の俳句——にも、亦「新しい俳句」にもさういふのがずゐぶんあるやうです。さういふのは暫くとりのけておくことにしませう。

一體俳句は前にも申しましたやうに、全部のことをあらはに表に出さぬいひかたをいた

しますので、たとへば、作者の暗示に誰もついてゆけないで、結局、作者の獨りのみこみに終つた、といふやうな場合がありがちであります。この場合は作者がわるいのですから、問題ではありません。ところが俳句として正しい表現でありながら、讀む方で俳句といふものが腹にはひつてゐないために、その意味をとり兼ねるといふ場合があります。たとへば

ストーヴと蚊と入れかはり柳萌ゆ

といふ句があります。中支派遣情水東山子氏の作であります。俳句のわかつた方は すぐ意味がおわかりになると思ひますが、さうでない方は、一寸惑はれるかも知れません。そこで少しく一句の意味を解いて見ますと——つひこの間までストーヴを焚いて、寒い寒いといつてゐたのに、もう早やぶうんと蚊が出て來た。まるでストーヴと蚊と入れかはりだ。そして窓の外を見ると、江畔の柳がみどりに芽を吹いてゐる、とかういふのであります。大陸の時候や風物に對する廣い聯想が働かず、また散文の文法にのみ囚はれた頭でよまれると、この句のストーブと蚊と柳の芽と、どう關係するのか、「入れ交り」と「柳萌ゆ」

とどうつづくのか、一體どこのどういふ風景をよんだのかといふ氣がすることだらうと思ふのであります。素直にこの句の意味が頭にはひるためには、季題のうしろの背景を頭に描き、廣く聯想を働かせ、俳句文法獨特の省略法を知ることが必要であります。さてさういふ意味がわかつてみると、この句で、冬から夏へ一足とびの、日本のやうな春といふ時節のない、大陸の時候がはつきりわかつて、面白く一句が味はへるだらうと思ひます。この句などはさして意味のわかりにくい方ではありません。

面倒なのは意味はわかつても、そのよさのわからない場合であります。たとへば

甕風呂に浸りて年を惜しみけり

といふ句があります。中支派遣、飯原雲海氏の作であります。「年惜しむ」といふのは行く年、過ぎ去る年を惜しむ情をいふ季題であることは、歳時記を繰つてみればすぐわかります。それでこの句の文字的の意味はすぐわかるのでありますが、その面白さがわからない、甕風呂に浸つて年を惜しめば、それがどうしたといふのかといはれると、ちよつと返答に困るのであります。そのよさ、面白さを言葉で説明しようとすれば全く出來ないこと

もありませんが、かういふ類の句はやはりそれよりも姑く時期をおいて、自然に一人でわかつて貰ふのをまつ方がいいのであります。蟹は己れの甲に似せて穴を作ると申しますが、心の淺い讀者は、淺くしか味はうことが出來ないのは詮方もありません。結局讀む者の心の深さ、高さ、廣さが、作者と同じところにまで至らなければ、その句のほんとの味は、わからぬといふことなのであります。同時にまた、勝れた鑑賞眼をもつた人にあふと、作者が、實はそこまでは思ひ及ばなかつたところの、奥にかくれた深い味を汲んで貰へる、解釋一つで一句がぐつと生きて來る、さういふことをもわたしどもは常に經驗してゐるのであります。

一方ではまた俳句といふものには、言外の意味があるものだといふことを妙に考へ過して、とかく理窟のないところに餘計な理窟をこじつけようとする傾が、初學者には間々あるのであります。たとへば芭蕉の有名な

道傍の木槿は馬に喰はれけり

は、讀んだとほりの意味に解して始めて面白いのに、素人はそれでは何かもの足らぬやう

な氣がする。そこで強て理窟を求めて、道ばたへのさばり出ると、木槿も馬に喰はれてしまふ、人間でも出しやばると禍を受けるといふ、つまり謙讓の美德を寓したものだと說かうとするのであります。そして、あたら詩としての價値を臺なしにしてしまつてゐることに、氣がつかないのであります。かういふ考へ方が、だんだん外れていつて、寫生俳句を何かもの足りなく思つたりするやうにもなるのであります。これは俳句が大いにわかつたつもりで、實は俳句がちつともわかつてゐない場合の一つなのであります。

たまたま机上にある、子規門、寒川鼠骨氏の「俳句案內」といふ小冊子が俳句の解釋について說いてゐる一節を繰つて見ませう。それにはこんなふうに書いてあります——

「俳句に於て表現された字義は分明しても、尙ほ其の意味が解せられぬ事がある。……その原因が種々あるやうに思はれる。卽ち

第一には言葉の省略又は顚倒などがある爲めに解せられぬ場合。

第二には其人に連想の發達しない場合。

第三には理窟をつけて解せんとする爲めに解せられぬ場合。右の三つに原因するやうで

ある。……字義がわかり、連想も起され、又た理窟をはなれて句を解釋すれば、最早俳句の解せられぬといふ事はない、併し尙ほ其れでも句の面白味がわからぬといふならば、宜しく俳句に現されてゐる所を、繪畫又は小說などに比較して見る。さすれば其趣味が解し易くなる。假へば

峰の茶屋に壯士餉す若葉哉　　蕪村

といふ句の如きも、

（峰の茶屋といふから、先づ山を畫く、其山の土の方に茶店を畫く、茶店の中には壯士といふから何れも武骨な士を畫く、其士は今晝飯を喰ひつゝある所を畫く、さうして若葉かなといふから、茶店の周圍及び全山には今ま絲の滴らうとするやうな夏の若葉を描く）

右の如くすれば誠に之れ一つの大畫圖となつて面白味を感ずるであらう。……俳句は比較的に客觀の句が多いから、若し其の趣味の解せられぬ爲には、之を畫に引伸して見ると、其面白味が解せられる。……多少主觀を交へて人事を詠じた句になると、畫に描く事の出來ないものがある。其時には之を小說や芝居や昔物語などに比べて見ると、其面白味がわ

かり易い。例へば

飛入の力者あやしき相撲かな　　蕪村

といふ句の如きも、曾て子規子は之を解して左の如く言つてゐる。

（ある所にて秋のはじめつかた、毎夜村の若衆など打よりて、辻角力を催すに力自慢の誰れ彼れ自ら集りて、かりそめ乍ら、大闘や闘脇を氣取つて威張りつゝ面白き夜を篝火の傍に更かしける。さる程に、或夜の事今迄には見慣れぬ一人の男のつと此角力場に來りて、我も力競べんといふ。男盛りの若者ども、血氣にはやりて、これ位の男、何程の事かあらんと、いきなり取つてかゝれば無雜作にぞなげられける。次なる若者敵うたんと組つけば、之も物の見事にぞ投げられける。其外幾人となく取つてかかるもの此有樣なれば、遂には大闘某、自ら大勢の恥辱を雪がんと、のさり〳〵と歩み出づ。皆々此勝負こそはと、片唾を呑んで眺め居れば、二人は立上りェイと組オヽと引き、左をさし、右をはづし、眸を凝らして睨み合ひたる其途端に、如何したりけん、彼男のつとよるよと見えしまゝに、さすがの大闘も難なく土俵の眞中へ叩きつけられぬ。見物はあつけに取られたり。やがてさまざまの評判こそ口から口へさゝやかれ、去るにても彼の飛入の男は誰やらん、此村には見なれぬ顏の男なり、此村の人に聞けど北村の人も知らず、南村の人に聞けども南村の人も知らず、さりとて本場を蹈める闘角力といふ風采にもあらねば、通り掛りの武者修行といふ打扮にもあらざりけり。疑惑は疑惑に重りぬ。私語はいよ〳〵かしましくなりぬ。中に一人の年よりたる行司

のしわぶきして、小聲に言ふやう、皆の衆靜かにせよ、彼れこそ彼處の山の頂にすめるといふ天狗樣ならん、今宵の振舞を見るに、たゞ人とは覺えず、思ふに我等の力わざに耽りて、いと誇り顏なる片腹痛しとて、斯くは懲らしめ給ひたるものにぞあるらんと、言へば、皆々顏見合せて襟元寒しと身振ひなどす云々。)

斯く解して見ると、實に一くだりの物語とも見え、又た一場の芝居とも見えて面白い……斯くして繪畫に比し小說に比し、戲曲に比して其の句中に存する趣味を解するに勉めるならば、俳句の趣味が解し易くなるのみならず、又た諸君の美感をして大に發達せしむるであらう。……

——大體かういつたことが說かれてをります。俳句の解きかた味はひかたとして、少し變つたことが敎へられてゐると思ひましたので、長々とここに引用して御參考に供した次第であります。

さてこれから實例數句について、わたし自身の拙い鑑賞と批評を試みまして、俳句の味はひかたの一班を自然に會得して戴きたいと思ひます。

ははそばの禱りの破魔矢しかと受く

白衣勇士北谷青珠氏の作であります。「ははそばの」といふのは、母といふ字に冠らせる枕詞でありますが、この場合はそれを「母」といふ意味に使ひ生かしてをるのであります。破魔矢は岩清水八幡宮などで、お正月に授かるお守りの矢であります。療養所に病を養つてゐる自分のために、母上が八幡宮に初詣して祈願をこめて、武運長久の破魔矢を受けて來て下さつた。その破魔矢を母上の手から、しかと戴いたといふので、母の情をひしと身に引しめる心持と、も一度再起御奉公をといふ堅い覺悟の心持が、よみとれるのであります。「ははそば」といふやさしい言葉を使つたことに、母の慈愛を勿體なくよろこぶ子としての心持が、滲み出てゐることをも味はなければなりません。

看護婦の見てゐる菖蒲生けにけり

廣島療養所の前岡政治氏の作であります。極く平明な句で、べつだん解釋の要るほどでもありません。この句のどこが面白いかと申しますと、一體生花は、女のわざのはずで、療養所ならば、普通看護婦さんのすることでありませう。ところがこの作者は療養所のつれ

づれに生花を習つてゐるので、いま丁度季節の花菖蒲を生けてゐる。看護婦の方がそばで見る役に廻つてゐるといふ、そこにこの作者の場合のほんとうが出てゐて面白いのであります。見てゐる看護婦から助言されたり、ほめられたりして、喜んでゐる作者の、朗らかな様子などがいろいろ想像されます。句の表はまことに簡素でありますが、背景は相當ひろくなつてゐるのであります。この句のいいところは、心持も、叙しかたも、素直でくせがないことであります。

それからいま、諸君から募集してをりまする俳句の題には「梅」がありますから、手當り次第に一つ二つ「梅」の句を引いて味つてみませう。

二本の梅に遲速を愛すかな

蕪村のかなり有名な句であります。家の庭に二株の梅がある。その梅が同時に咲かないで早い遲いがある。そこに作者は興味をもつたのであります。「遲速を愛す」といふ漢文調の、無理のない使ひこなしが、いかにもこの作者らしく、文人蕪村を髣髴せしめてゐるやうな心地がいたします。また二本の梅を人間のやうに——性格の違ふ、二人の兄弟をで

も眺めてゐるかのやうに――愛してゐる心持が、一句を裏付けてゐることをも注意したいと思ひます。

崖急に梅ことゞく斜なり

子規の句であります。子規は百年の昔の蕪村を掘り出した人ともいつてよいのでありますが、この句などには、どこか蕪村調が出てゐるやうに思はれます。意味はべつだん説明を要しません。俳句の趣を味はうには、その句に現れてゐるところを、繪畫に引き延して見ると面白みがわかると鼠骨氏が説いてゐますが、この句などは引き伸すまでもなく、まさしく一幅の南畫であると思ひます。

梅に來て佇つや日毎に病快く

作者は善通寺陸軍病院、高畑秋女とありますから、多分病院の看護婦さんが、看護してゐられる白衣勇士のことを詠まれたものかと想像します。病氣が一日一日とよくなつて、庭にも出られるやうになつた。長い冬を越してちようど今、庭の梅も咲きそめた。その梅の花を眺めながら、病氣の輕快を喜んでゐる人の氣持が輕く出てをります。

卓の梅咲けり傷兵書を讀めり

東京陸軍病院中村良平氏の作であります。ベッドに横はつて、本を讀んでゐる傷兵の枕邊に挿してあるのが、ほかの花でなく梅の花であるところに、やはり實感があると思ひます。何の花でも同じではないか、といふわけには參りません。俳句がだんだん腹にはひり、感じが洗練されて來ますと、さういふ點もわかつて來るのであります。「咲けり」「讀めり」と調子を重ねたところに、いひ方としての技巧はあるのでありますが、材料はありふれた事柄、諸君の身近のものにとつてあります。今度の募集に應ぜられるにも、かういふふうに、身のまはりのありのままを、寫生的にお詠みになつて、お見せ下さるとよからうと思ひます。

最後に、あたかも今日の佳き日の地久節を詠んだ一句を、鑑賞することといたします。

雛飾りしてあるまゝに地久節

鈴木花蓑氏の作であります。一句の意味は一讀明瞭であります。三月三日のお節句の御

雛樣が飾つてあるままに、今日の地久節を祝ぐといふので、實際あり得べき事柄であります。しかしそれは、この句の表面の、文字的の意味でありまして、それがどうして面白いのか、といふ人があるかも知れません。皇后陛下の御誕辰のめでたき御祝ひ日、地久節と、女の子のお節句である雛祭との間に、豐かなる聯想の働かない人は、この句の表面だけを見て、これを單なる事實の報告のやうにしか思はないのであります。うはべは去り氣なく事實をのべてゐるだけで、その裏には地久節を祝ぎ奉るふつくらと柔かい感じをたたへてゐる、そこを味ははねばならぬのであります。俳句の味はひかたは大體かういつたものであります。

# 第九章　療養所俳句選評

わたしの俳句の話をお聞き下さつた上、放送協會の募集に應じて諸君から寄せられた俳句は、たくさんの數に上りました。その資格に適合しないと思はれる百餘句は省きまして、應募資格に適つた句數だけで、約六千數百句、七千句近くにも上りました。わたしは愉しく諸君の作られたものを拜見したのでありましたが、拜見してすぐ氣がつきましたことは、諸君の句がもう立派な俳句になつてゐるものばかりだ、といふことでありました。この鹽梅では、季題の約束からはじめたわたしのお話などは、あまりに初心向きに過ぎて、定めし喰ひたりない思ひをなさつたらうと存じたことでありました。わたしはわたしのお話によつて始めて俳句を作つて御覽になるといふやうなかたの、純眞素樸な句を相當期待してゐたのでありましたが、さういふものには殆ど出逢ひませんでした。從つて選はらく

でありましたが、しかしわたしの希望を申しますれば、これを機會に俳句をはじめて下さるかたも續々出て戴きたいのであります。必しも俳句には限りません。和歌なり川柳なり諸君の御好きのものをお選びになつて結構であります。とにかく何か一つさういふもの――日本獨特の短詩形文學――をおもちになることは、療養にずゐぶん役立つはずと思ひます。これからわたしの採りました秀逸十句と、若干の選外佳作とを發表いたしますが、これらの俳句を靜かに味はつて御覽になつても、俳句の樂しさが療養中の心の養ひになるらしいといふことは、俳句に緣のなかつたかたにさへ多少ともわかつて戴けるはずと思ひます。

應募された諸君の作は、大體においてよく出來てゐると思ひました。こんなにまでたくさんのかたが、かういふやうな俳句を作つて、御療養中の心の慰めを得てをられるといふことを、わたしはたいへん喜ばしく思ひました。或は嘗ての日の第一線を偲び、或は再起奉公の志を陳べ、或は面會の母に逢ふ喜びをうたひ、或は窓の外の一草一木に病を忘れて樂しまれるなど、みんな明るく朗らかで、清潔な感じで、一いちの句の出來不出來は別と

して、總體にたいへん心持よく選をしてゆくことが出來ました。この上ともこの俳句といふ愛すべき文學を、御療養の伴侶に役立てて戴きたいと思ひます。

日本間に俳句會あり梅日和

作者は宮城療養所の阿部幸惠氏であります。一句の意味は一讀して明瞭であります。そんなこと何でもないただごとではないかと、いふのは、俳句を味ふ心がいまだ至らないからであります。ぢつくりと嚙みしめて味はつてゐる間に、だんだんと感じが出て來るはずであります。諸君の病院や、療養所の病室は、殆んど全部が寢臺をおく板の間でありますが、所内のどこかに一部屋だけ疊の間があつて、坐ろやうになつてゐて、そこで諸君が、いろいろの集りをなさつたりすることが出來るやうになつてゐるやうであります。その日本間で、今日は俳句の會がある、折から庭の梅が盛りの、よい天氣であるといふのであります。同じ俳句會でも、板の間の講堂の机、腰掛でやるよりも、日本間だと氣分が一段と落ち着くやうな心持がいたします。また「日本的」といふ感じの深い俳句と、「日本間」とい

ふことの調和もあります。さう考へて來ると「日本間に俳句會あり」といふことが、決して單なる事實の報告でないことがおわかりだらうと思ひます。そして一句を裏付けてゐるものは、俳句といふものをしみじみ樂しんでゐる氣持であることを、よく味はつて戴きたいのであります。次は

外氣舍の四つの窓の春の雲

作者は兵庫療養所の福井春水氏であります。原句は上五字が「外氣舍の」でなく「外氣小屋」でありました。意味はどちらでも變りはありませんが、上五字に「外氣小屋」と名詞をおき、下五字をも「春の雲」と名詞でとめると、どうも一句の座りがよくありません。「外氣舍の」と、「の」といふテニヲハ一つ入れて、はじめて調子が整ふのであります。結局一句のうちに「の」の字を四つ重ねたことになりますが、そこにこの句の表現上の、技巧の覘ひがあるわけであります。この句には、外氣小屋といふものが、巧みに描かれてをると思ひます。小さい小屋の四方の窓が、みな明け放しになつてゐて、そのどの窓からも空が見え、そのどの窓にも春の雲が浮んでゐるといふのでありまして、外氣小屋が小高

いところにあるだらうことも想像に浮びます。表面は事實をありのままにのべたばかりでありますが、そのかげには、外氣舍のベッドの上から窓窓の春の雲を眺めて、自然のふところに樂しく遊んでゐる、大らかな氣持がつつまれてゐるのであります。次は

初蝶のほとりを舞へる歩哨かな

作者は茨城縣村松療養所の加藤章氏であります。原句は「初蝶のひとつ舞ひゐる」といふのでありました。それでもわるいわけもないのでありますが、初蝶であれば多分「ひとつ」であらうことは、想像出來まするし、「舞ひゐる」といふのも少し語呂がわるいやうな氣がいたしますので、柔かに「ほとりを舞べる」として見たわけであります。一句の意味を說いて見ますと、いくさに遠く、現在陣中に異狀はないけれども警戒を怠るわけにはゆかない。作者はいま銃を肩にしながら、動哨の任に當つてゐる。野山はもうすつかり春で、風が柔かく、草の芽が靑い。ふと見ると、トーチカのあたりか何かに、ひらひらと一ぴきの白い蝶がとんでゐる。今年はじめて見る初蝶である。いくさのにはにも、俳句を忘れない作者の心は、その一ぴきの初蝶に、古い友達にでもあつたやうに、うれしく躍り上る

のであります。たつた一つの、可憐な初蝶を描いてゐるに過ぎませんけれども、そのうしろには、大きいはげしい戰爭がかくしてあるのであります。隱してあるといふよりも、讀者の想像がおのづから、さういふうしろのものをとらへて來るのであります。そのへんが俳句の微妙な味といふものなのであります。次は

彼我の陣四方より霞來て包む

作者は京都療養所の日下部曉彥氏であります。これも同じく第二線を詠んだ句であります。大砲の音が轟き、飛行機が空に亂れとぶのは、戰場の風景でありますが、砲聲が慤み爆音が去つて、靜かな村村をなごやかに霞が包む、それも戰場の一風景であるに相違ありません。そして日本の將兵は、强いいくさ人であるとともに、路傍の花に眼を止めたり、美しい野山の自然に思をやる、床しい心の持主なのであります。この句も、さういふ日本武人の、ゆとりある大らかな心持で、陣中の春を詠つたものの一つであります。わが陣營と敵の陣營と睨みあつてゐる、その敵味方双方の陣を、四方から霞が立ちこめて來て、一色に糢糊と包んでしまふ、といふのでありますが、敵と對ひあひながら、綽々とした餘裕

をもつた心がよくうかがはれます。四方から霞が來て包むといふのは、いかにも大きくて、大陸の曠野に大軍の對ひあつてゐる樣子が、おのづから想像に浮んで參ります。俳句にはなかなか扱ひにくい大きい情景を、ほぼ遺憾なくよみこなし得たのは手柄であります。次は

面會の母濡れたまふ春時雨

作者は神奈川療養所の林豊穰氏であります。原句は中七字が「母の濡れたる」であるのを「母濡れたまふ」と直してみましたのは、お母さんをいたはる、やさしい心持を出してほしかつたためであります。そのため「母の濡れたる」といふ「の」のテニヲハが省かれてしまひ、調子が少し窮屈になつてしまつたのは、いたし方もありません。この句も俳句の味はひかたが十分に腹にはひつてゐないと、こんなもののどこが面白いのかといはれるだらうと思ひます。それにはまづ「春時雨」といふ季題の感じを十分にかみしめることが必要であります。同じ時雨でも、冬の時雨、秋の時雨、春の時雨、みなそれぞれ趣がちがひます。それを一口に言葉で申すわけには參りませんが、靜かに、わびしい美しさのなか

にも、一句の艶かさがほのめくやうな春の時雨の感じを、まづ身につけた上でこの句に向ひますと、病院へ面會に來て下さつた母上が、途中の春時雨で、袖や裳裾を濡らしておいでになつたといふことが、しみじみと心に觸れる、そこの心持がよくおわかりのはずだと思ひます。これが面會の「父」であつたり、また「春時雨」でなくただの「時雨」であつたのでは、これだけ濃やかな味が出ないのであります。濡れるやうに心にしみる母の慈愛を、うれしく思ふ心持、また雨にぬれながら面會に來て下さつた母上をいたはる心持――さういふものが、「春時雨」といふ季題のもつ感じと、互に助けあつて、俳句らしい味を出してゐる、そこを嚙みしめて戴かねばなりません。まことに療養所で病を養はれるかたの、しほしほとした實感が、ゆたかに溢れてゐる心地がいたすのであります。次は

苗床の小さきいのち葬めける

作者は宮城療養所の池田秋歩氏であります。苗床といふのは、野菜とか草花類などの苗を仕立てる假床のことであります。「苗床の小さきいのち」といふのは。さういふ植物の苗のことを、人間になぞらへていつたのであります。それが「葬めける」といふので、苗床

の土から群がり出た二葉の、押しあひもみあひしてゐる感じが出るのであります。これは苗床の見たままを寫生したものであります。この寫生は、一讀表面的な事實を說明してゐるに過ぎないやうでありますが、やはり作者の心持の裏付があることを見のがしてはなりません。二葉の苗を特に「小さきいのち」といひ現したところに、すでに可憐な苗ものに寄せる作者の深い氣持が出てをりまするし、また「犇ける」といふ言葉も單なる說明語ではなく、苗の押し合つてゐる樣子をいきいきと描寫してゐる言葉でありまして、ここにも作者の感じが十分にこもつてゐるのであります。そして句の底を流れてゐるところの、自然を愛する作者のこの心持は、卽ち作りかたのお話で申しました、俳句の心でなければならぬのであります。苗床の苗にぢつと目をとめて、この俳句を作つてをられるときの作者の心は、病氣のことを忘れた、靜かに落ち着いた樂しいものであつたに相違ないのであります。次は

靜臥よし枕頭の梅ひとつひらく

作者は岐阜療養所の加藤白都氏であります。一句の意味はべつだんに解說を加へるまで

もないと思ひます。病を養つて病床に横つてゐるその枕許の鉢植の梅が、一つだけ蕾を破つたといふのであります。「ひとつひらく」といひ得たところに一句の生命があります。ベッドの上に寢たまま、もう長い間安靜療養法をつづけてゐる作者の枕邊には、一鉢の盆梅が置いてある。動くことの出來ない作者は、その蕾が少しづつ大きくなつてゆくのを樂しみに眺めてゐる。冬の寒さにも打ち克つて、やつと春になつた。同じやうに長い冬を耐へとほして來た鉢の梅も、漸く一つだけぱつと咲いた。ひしひしとむらがる蕾の中に、その一輪だけが眼をさましたやうに鮮かに白い。作者はその一輪を、心あるもののやうに親しく眺めてゐるのであります。「ひとつひらく」は字餘りでありますが、その字餘りが、調子を破らないばかりが、却つて字餘り獨特の力をもつて、ものをいつてゐるのであります。ただこの句の弱點は、「靜臥よし」の上五字、殊にその「よし」が適切でないといふことであります。何とか直したいと思ひましたが、うまくゆかなくて、暫くそのままにしておきました。次は

戰の母の手が守る我が家かな

作者は三重療養所の中森芳雄氏であります。申すまでもなく、戦が季題であります。いま我が家は男手がなくなつて、女の母の手一つで守られてゐる。その母の手はいたいたしく皸がきれてゐる、といふのであります。句の表にあらはに出してはありませんけれども、男たちは、或は應召してゐるとか、或は外で大切な御奉公をしてゐるとかして、家のことは大人といつては、母の手一つに委されてゐることが、おのづからわかります。その母は、女ながらも自分一人の肩に留守の家を背負つて、けなげに働いてゐる。水仕業のために、手足に皸をきらしながら立派に家を守つてゐる、といふ一句の意味であります。その母の子である作者は、いま療養所に病を養つてゐられるといふことを考へ合せるとき、一層この句の含みが奥深く思はれて來るのであります。次は

ふれて見る梅のにほひて心足る

作者は茨城縣の村松療養所の酒井しげる氏であります。作者の肩書には「盲」とあります。戰盲のかたと見えます。さう知つてこの一句を讀むとき、しんみりとした心持が浮んで來るのであります。眼が不自由であるために、梅の花を見ることが出來ない、せめて指

先にそつと觸れてみて、柔かくふくらんだ蕾、まだ堅い蕾、綻びた花、などと、一つ一つ感じてはよろこぶ。眼には見えなくても、馥郁とした匂ひだけはかぐことが出來る。指にふれ、匂ひをかいで心を慰める——そこで「ふれて見る梅の匂ひて心足る——滿足する」といふのであります。眼しひた人の心持が、あはれに思ひやられて、いたく心を打たれるのであります。況んやそれが御國のために捧げられた兩眼であつたといふことを考へますると、わたしどもは何ともいふにいはれぬ心持になるのであります。しかも作者は微塵も愚痴つぽい言葉を洩らされず、世にもつつましく、やさしい感情をのべてをられるのであります。かやうに解說してをりながらも、わたしは作者の前に頭のさがる心持がいたすのであります。

以上をもちまして、私の選びました秀逸の句の講評を終りました。これから更に選外佳作二十五句を御披露することといたします。秀逸の句と佳作の句と、假にかやうに區別はいたしましたが、その間にはつきりした區別があるわけではありません。どこかで區切をつけねばなりませんので、强ひて二つに別けてみたやうなものであります。その點は、佳

作と、更にその佳作の次につぐものとの關係についても同樣であります。二十五句については一いち叮寧に鑑賞する遑がありませんので、簡短に評語を添へるだけにとどめておきます。

賜びし梅塵もとゞめず咲きにけり　東京清瀨療養所　山崎光次

「塵もとゞめず」といふ中七字に白梅の清楚な感じが出てゐます。愼みぶかく端然とした一句の姿形が、恩賜の梅を詠むに適つてゐることをも注意しなければなりません。

病兵の梅咲く風を寒がりぬ　長野療養所　武田信湧

病兵に寄せる深い思ひやりが出てゐます。「梅咲く風」には推敲の餘地があるやうであります。

梅寒く鈴鹿は雪を新たにす　三重療養所　三浦英太郎

引き緊つた、氣の利いた調子から來る新鮮潑剌な感じを認めます。

梅白し白衣をぬぎしをみならに　宮城療養所　永山つね

白衣を脱いで、常の娘に返つてくつろいだ看護婦さんを詠んだのは、ちよつと目新しいと思ひます。表現の手法もしやれてゐるやうであります。

雪眼鏡はずして梅を仰ぎけり　新潟療養所　中野太計雄

變つたところを捉へてゐます。事柄の急所を見据ゑる眼がよく利いてゐることがわかります。何といつても眞實の力は爭はれません。

梅生くる看護婦の手の雪やけて　島根療養所　山下一無

梅を活けてゐる看護婦の手の雪やけに眼を着けるとは、物を見る眼がぼんやり遊んでゐない證據であります。深く突込んだ句といへます。

美しく一天晴る丶丘の梅　名古屋陸軍病院　佐藤義介

明朗豁達な句であります。美しさも十分であります。調子がぴんと張つて、五、七、五、三節の間に寸分の隙もありません。

傷兵に古典の講義窓の梅　神奈川療養所　齋藤覺

講義が外ならぬ古典の講義であるといふところに、梅といふ季題の感じの把握があります。

看護婦に勵まされつゝ梅に病む　愛知療養所　臼井鉦市

兵隊さんでも長い病氣をする中には、氣の弱ることもありませう。それをやさしく看護婦さんが慰めるといふことには、しほしほとしたあはれを感じます。「梅」でそれを俳句化してゐるのであります。

玄海の潮の騰る梅の宿　佐賀療養所　境己一郎

玄海といふ固有名詞がよく使ひこなされて、或る梅の宿を鮮明に描き出してゐます。

囀やわが選びたる遙拜所　茨城療養所　山崎政人

丘の上か何かの或る一處を、ここがよろしいと自分ひとりできめて、自分はいつもそこで遙拜するといふのですが、いかにもほんとらしくて面白いと思ひます。

雨が降り雪が降りして木の芽まだ　千葉療養所　穴口榮三

木の芽時分の季節の移り變りの感じが實によく出てゐます。ただしかしこの上五中七にはやや常套臭があるのが氣になります。

看護婦もきて立つ池の水溫む　千葉療養所　井村青柿

看護婦も（病兵にまじつて）來て立つ池の、といふいひかたが、いかにもらくらくと、もの柔かくこなれたところから、「水溫む」感じが出てゐます。

面會の母と療舍の、春惜しむ　千葉療養所　鈴木義之

春行く療院の庭で、面會に來てくれたお母さんとうれしく話してゐる療兵の心持が、しつとりと出てゐます。もちろん「母」であるからいいのであります。

よろこびは雲よ小鳥よ木の芽道　横須賀海軍病院　椚　貞雄

溢れるやうな詩情ですが、それを俳句的に沈潛させる用意が缺けてゐる憾があります。

春雨や松の中なる避病院　横須賀海軍病院　細見三郎

たしかに春雨の感じは受けとることが出來ますが、表現の手法に今一段の新工夫がほしいといふ感がします。

もの丶芽に今朝を靜かにある命　　青森療養所　飯田松太郎

靜かに病を養つてゐる療兵の日常とその氣持は出てゐますが、「今朝を靜かに」は言葉が少し上調子のやうであります。殊に「を」のかういふやうな使ひかたは、輕佻な感じを與へます。

傷兵の名に甘えじと耕しぬ　　青森療養所　今盛之

傷兵傷兵と世間からやさしくされるのは有りがたく感謝するが、しかしそのいたはりに甘えてはならぬと思ふとは、何といふ立派な覺悟でありませう。讀んで頭が下る思ひがします。

邂逅をよろこびあひて暖かし　　宮城療養所　丸山信

逢へてうれしかつたといふ氣持が、こぼれるやうに一句の外に溢れてゐます。

百姓の結飯大きく山笑ふ　宮城療養所　渡邊二郎

素樸剛健でどこか輕いをかしみもあり、いかにも健康的なところがいいと思ひます。「山笑ふ」といふ季語の感じを生かしてゐます。

春泥や轍をつたひ討匪行　岡山療養所　矢部高義

「轍をつたひ」といふ中七字、に寫生から來る爭はれない迫力を感じます。

盛んなる雪解しづくや退所式　兵庫療養所　國枝護

雪解の雫の盛んに落つることも、今日の退所に當つて何か心あるが如くであると見てゐる氣持が、專ら聯想に訴へる俳句的筆法で實に手際よく打ち出されてをります。

ベッド傳ひものをやりとりして長閑　長野療養所　大塚靜夫

病のベッドをならべながら決じてめそめそしてゐない療院生活の明るい様子が、破格變調の自由な驅使で遺憾なく出てゐます。

ものゝ芽の命しづかに雨細く　甲府陸軍病院　弦間幸夫

ぢつと「自然」に眼をとめ、所謂「自然」と一枚になつた境地に遊んでゐる濃かな感じが出てゐます。中七には少しく粉飾の感はあります。

鶯や小松の中の療養所　秋田療養所　松橋鶴次

感じはありますが、表現手法が型にはまつてしまつてゐるもの足りなさは免れません。同じやうなことを前に「春雨や松の中なる避病院」の句についても申しました。双方合せて復誦しながら、よくわたしの申す意味を會得して戴きたいと思ひます。

これをもつて選外佳作評二十五句を終りました。

# 第十章　添削實例

章を重ねて作句の作りかた味はひかたを說いて來ましたその最後として、ここに添削の實例を若干御參考に供することといたします。實物教育といふものは抽象的な講義に比して頭に入り易いものであります、秩序的に配列した個々の作品をあげて添削の實地を例示しつつ側面から作法を說くことこそ、初學者に作句の呼吸を敎へる一ばん手つとり早い方法であるのかも知れません。

材料はたまたま手許にあつた某々誌の應募句の中から採りました。そして全部戰地及び白衣勇士諸君の作を藉りることにいたしました。その添削に據つて俳句作法の要領をのみ込んで戴くに都合のよいやうな句を材料に拾つたわけであります。添削によつて原作があつぱれ名句に生れ變つてゐるといふやうなわけではなく。その添削を通して何か一つの作法上の注意をお傳へしたいといふわたしの氣持であります。

（原句）春寒し雑草持ちて引返す　　新潟療養所　野村松麿

「雑草持ちて」はいかにも拙でありますが、それよりもこの句の覘ひは「（療兵が野に出たところ）春寒の風を覺えたのでよい加減に引返した」といふことにあるので、「野道で引いた草を手にして」といふことは必しも必要ではないのだらうと思ひます。必要でないことが十七字の中に介入すると混雑して、肝心の主題の力が弱められます。結局この中七は夾雑物として除去されねばなりません。そこで

春寒き試歩の踵を返しけり

とすると、すつきりした感じが出ます。

（原句）夕月や蛙を友に夜守る　　牡丹江　涌島敬巧

この句の夕月についても前句の場合とほぼ同じやうなことがいへます。殊に「月」とあつて、更に下に「夜」が出て來るので、いよいよくどい感じがします。それから「蛙を友」

は甘たるい、どこか囚はれた表現といはねばなりません。そこで原句の意味をとつて

蛙鳴くまつくらき夜の守備につく

（原句）長閑さやまつはる蝶に立哨す　福井療養所　河島窓雲

この句には「長閑」と「蝶」と季題が二つ重なつてゐます。季の重なること必しもわるいには限りませんが、この句の「長閑」のやうに全く贅疣である場合はいけません。立哨の足許に蝶がまつはることはいかにも長閑な光景でそれが一句の主題なのですが、それを長閑といつてしまつたのは底を割ることになるので、殘つた味といふものは全くなくなり

立哨の足もとをとぶ蝶々かな

と「長閑」を割愛した方が、却つてはるかに長閑の感じが深く出るのであります。

（原句）苛烈なる戰も知らず桃咲きぬ　中支派遣　澤田高穂

底を割つてゐる點でこの「戰も知らず」も同樣であります。かう表面にいつてしまはないで、自らその氣持が滲むやうに敍しなければなりません。

桃咲いて戰機いよ〳〵熟しけり

とすると、多少原作の意を曲げたかも知れませんが、作品としては遙かに立派になつたでせう。「苛烈なる」もいひ過ぎであり、また言葉自體としても說明的で、美しさがありません。

（原句）月冴えてパゴダの映ゆる良夜かな　ビルマ派遣　伊東申次郎

良夜といふのは仲秋月光隈なき夜のことです。從つてその上に「月」といふ字が出るのはいけません。それから「月冴ゆる」といふと嚴冬の季題になります。「良夜」と「冴ゆる」とは兩立いたしません。うまく直りませんが

はつきりと良夜のパゴダ見ゆるかな

とでもしたら、右の矛盾だけは除かれるかと思ひます。

（原句）陽灼してドリアン喰ふ臭み慣る　スマトラ派遣　小潟虚無草

「日燒」といふ穩當な語があるのに、「陽灼」などといふ生硬な文字を充てるのはいけません。「臭み慣る」は片言めいてゐるし、響きもきたなくていけません。

日燒してドリアンの香もいつか慣れ

とでもすると、南方征旅の感じが少し出るかと思ひます。尤もドリアンの香ひは隨分强いものですから「香」なんて生やさしい言葉でなく、「臭」といふやうな字が使ひたくなる氣持はあるかも知れません。再考することにいたしませう。

（原句）子雀を籠にひろうて傷兵機嫌　福井療養所　河島窓雲

「傷兵」を「へい」と訓ませようとするのは少し蟲がよすぎるやうです。この句では「傷」は割愛する外ありません。「車窓」「軍艦」「學童」「亡母」などといふ類は、みな同じやうな强引で、避けねばならぬと思ひます。

（原句）春汗の顔にかゞやき兵若し　　釜山警備隊　長谷川金一

「春汗」はいかにも不熟です。尊い言葉をさう虐待してはいけません。「春の汗」でさへ無理と思ひます。「春」は必しも問題ではありますまい。

額に頬に汗かゞやきて兵若し

（原句）進發に躑躅一枝を馬の背に　　牡丹江　柳井輝男

中七以下たどたどしいと思ひますが、何よりも上五と下五の結びと、いづれも「に」であるため格調が全く亂れました。

進發や躑躅一枝を鞍壺に

たつた一字「に」を「や」に改むることだけで、調子がしやんとして來ます。

（原句）窓に干す夜具の白さや天道蟲　　京都療養所　桐山井蛙

中七字を「や」で一度切つて下五に名詞を置くのは最もありふれた型ですが、この型は多くの場合調子をたるませていけないやうです。天保月並調の好んで用ひた手法でした。

窓に干す夜具の白さに天道蟲

とすると、ぐつと引緊つて來ると思ひます。

（原句）春眠の枕ならべし傷兵ら　鶴井療養所　水上薫花子

「ならべし」では何か事柄を説明する調子に聞えます。たつた一字のことですが、これを

春眠の枕ならべて傷兵ら

とすると、光景を印象的に描寫したことになると思ひます。讀後に餘情の殘ると殘らぬとたいへんな相違がそこにあると思ひます。

（原句）山麓の家灯したる蟲しぐれ　比島派遣　山田桃生

「山麓」はどうも言葉が硬くて耳ざはりがよくありません。「……の家……虫しぐれ」とい

ふ構成も何か坐りがよくありません。言葉の選擇と一句の調べとに、今少し工夫を凝したいと思ひます。そこでたとへば

麓宿ほと灯りぬ虫しぐれ

などとしたらどんなものでせうか。

（原句）衣更捧げし腕ふりて見る　岐阜陸軍病院　高木正治

「捧げし腕」といふのは名譽の戰傷で隻手を失ひ、義手をつけてをられるのかと察せられます。その「腕をふりて見る」とかうまで露骨にいふと含みがなくなります。

捧げたる腕を通す更衣（袷かな）

といふやうに、あつさりといつてはじめて深い感じが出て、人の心を動かす力をもちます。

（原句）看護婦の講義に靜か藤の雨　愛知療養所　小林聖久

着眼は正しいと思ひます。看護婦たちのお講義の時間を捉へた眼など、なかなか敏です。ただ中七の言ひ廻しがいかにも窮屈に聞えます。「の」「に」のテニヲハの使ひかたに無理不自然があるのです。「靜か」はいはなくて判ります。

看護婦に講義の時間藤の雨

これでほぼ完璧となりました。

（原句）吾子の文やさし榾火のあか〳〵と　北支派遣　山内星水

「吾子の文やさし榾火」まではすらすらと蹤いてゆけるのに、「あか〳〵と」と來るので折角の氣持を挫かれ、鼻先を折られる感じがします。「榾火がかつかと赤い」といふ又別の一事を提示するからであります。

吾子の文やさし榾火に讀み返す

とすれば、前半の氣持が少しもそこなはれることなしに、一句を貫くことになると思ひます。

（原句）霾天のはげしき日々よ陣を守る　　中支派遣　村瀬しん一

「霾天のはげしき」とは言葉がいかにも適確を缺いてをります。言葉は一語一字といへども慎重に選擇されねばなりません。「日々よ」は窮してをります。同じ事柄を幾通りにも幾通りにもいひ直して見れば、必ずもつと妥當な、これでよかつたのだ、といふいひかたに到着するはずであります。

霾風のはげしき陣を守るなり

（原句）望鏡に明けの畑打つ親子かな　　滿洲部隊　厚美多嘉夫

「望鏡」とは軍隊用語であるなら構ひませんが、わたしの耳にはちよつと異様にひびきます。「明けの」はナマで氣憚でいけません。又この場合、朝であることも必要でないと思ひます。事實とは多少違ふかも知れませんが

銃眼に見えて畑打つ親子かな

「親子」はたしかに働いてゐると思ひます。

（原句）砲側に戎衣干す兵春めきぬ　北部〇部隊　根岸松三

この句の場合「兵」は全く無用、といふよりも邪魔ものです。

砲側に戎衣を干して春めきぬ

作者の肩書が北方守備とあるので、一句がかくべつしみじみと味はへるやうであります。

風鈴は空瓶なれど兵樂し　中支派遣　榎並良幹

「なれど」といふやうに餘りはつきりといひ盡してしまはない方がよろしいのです。讀み下して一句が何か散文的な感じがして、餘韻に乏しいのもそのためであります。

空壜の風鈴鳴つて兵樂し

といふふうに客觀的に（感じをおしつけないで）叙する方が、遙によく感じが出るのであります。

（原句）討匪行顔をそむけど霾しきり　　北支派遣　池田紫雲

「そむけど」は「そむくれど」といふ意味でせうが、これはあまりに亂暴な文法破壞です。俳句のやうな極端に短い韻文においては、普通の文法を崩す場合もないではありませんが、それも自ら限度があり、また時と場合によることです。「霾しきり」も巧みな言葉とはいへません。そこで少し内容にも觸れますが

霾（つちふる）に　顔　を　そ　む　け　ず　討　匪　行

とすると言葉の無理も救はれ、討匪行の強い感じも現れると思ひます。

# 第十一章　添削指導

これまでのお話によりまして、一と通り俳句の門に入る手引をいたしたつもりであります。そこでここにお話の最後といたしまして、すでに俳句をお始めになつてゐる方に向つて、いろいろ實作上の御參考となるべきことを、少し陳べてみたいと思ひます。お話が今までのよりはやや專門的になるわけであります。お話の仕方は、諸君のお作りになつた俳句を添削しながら、傍ら作法心得一般を說くといふ方法によつてみたいと思ひます。抽象的に講義をするよりも、一いち具體的に實例に卽く方が、聞かれる方でも興味があるのではないか、前にも申したやうに敎室內の講義よりも、野外の實物敎育の方が手つ取り早くのみこめるのと同じに――と思つたからであります。その代り秩序立つたお話といふわけにはゆきません。また添削と申しましても、必しも嚴密な意味の添削――字句の修正加筆の範圍を超えまして、一句の意味を變へてしまふやうな直し方をしてお話することもある

かも知れません。本來添削が目的ではなくて、添削をよすがとして作り方を說くのが主旨であるからであります。添削したものを、必しも名作品として推奬する考へでもありません。添削の材料は、たまたま机上にありました諸雜誌等の投句から採つたものでありまして、材料の蒐集も十分とは申せません。なほまた、そんなまづい添削を加へたものよりも、原作の方が寧ろよろしい、などといふ場合もあるかも知れません。人の添削を見てわたしがさう思ふことがありますから、人がわたしの添削を見て同樣に思ふことが、きつとあるに違ひありません。それらの點について豫めお含みを願ふとともに、原作者の御諒解をも戴いておきたいのであります。

（原句）野戰風呂我より先に月が入り

これを添削しまして

月のさしゐる甕風呂に入りけり

この例によりまして俳句の「古い、新しい」といふことを少し說いてみます。一體あらゆる文學藝術のうちで、俳句の場合ほど古い新しいといふことが、問題となるものはあり

ません。折角作つて人に見せると、これは古い、或は所謂マンネリズムだ、などとあつさり片付けられて、心中大に平らかでない——さういふことを始終皆さんも經驗してをらるることと思ひます。これは、何分にも俳句が僅か十七音に限定されるため、表現の形も變化を盡す餘地に乏しく、また內容からいつても、ただ一つの思ひ付、着眼が、そのまま作品の全部を成すといふ場合があり、そしてその着眼着想としては、誰の考へることにもさう大した違ひはないのが常でありますから、自然、かういふことは、いつか、どこかで、誰かが、もういつて終つてゐる——ばかりか、それがだんだん多くの人にいひ古された、今となつてはもう陳腐だ、といふことになりがちなのであります。ところが作者の心、詩精神が萎靡してをりまするとと、その陳腐に自ら氣が付かず、自分で作つた硬い殼にいつかとぢ籠つて、その中で小細工を競べあふだけのことに終つてしまふ、これが個人においても時代の流れにおいても、墮落した俳句のきまりなのであります。

さて原句に返りまして、陣中野天風呂に這入らうと思つたら、自分より先にまづお月さんが這入つて御座つた、といふのでありまして、野天風呂に浮んでゐた月を人に見立て

で、面白く叙して見るといふところに、この句の覘ひがあるのであります。ところがさういふ安價な、俗な、厭味つぽい擬人法は、月並俳句が好んで試みたところでありまして、頗る陳腐といはねばなりません。同じ事柄でありましても、假にこれを、「月のさしゐる甕風呂に入りけり」といふふうに、擬人法のもちかけなどなく、あつさりと、慾も得もないといつた描法を用ひまするとと、陳臭が大分とれるのであります。俳句の表現の本道であるところの、客觀的手法から來る力といふものが、やつぱりものをいふのだと思ひます。かく添削した句も、平凡は免れないかも知れません。しかし陳腐と平凡とは違ふのであります。平凡のまこと、とか、偉大なる平凡、などといふことはありますが、陳腐にはさういふよき半面が全くないのであります。

一口に古いと申しましても、何百年の黴の生えた古さもあれば、短期間にさんざんに使ひ古された結果の古さもあります。わたしなどの俳句を習ひ始めた時分に、よく「大正月並」といふことを聞かされました。當時大正はまだ數年しか經つてゐない若さだつたのであります。大正月並といふのは、見かけは大正の若い皮を被つてゐるが、中味は百何十年

昔の月並俳句だといふのであります。

蟋蟀や征旅の夢路辿りつゝ

秋風につまづき鳴きぬ法師蟬

「夢路辿りつゝ」が現代離れした、囚はれた表現だといふ感じは、すぐ誰ももつとしても、秋風の句の方は、なぜこれが陳腐なのか、陳腐どころか新しいではないかと思はれる方もあるかと思ひます。なるほどこの句は一應出來てゐる句であることはわたしも認めます。しかし風の中の法師蟬にはすでに類型化があり、殊に風が秋風であり、法師蟬が鳴きそこなふところは、働らきあるが如く見えながら、實は一種の臭味を感ぜしめるのであります。一ばん氣になることは「つまづき鳴きぬ」といふ表現であります。誰かの創作に係るこの特殊の表現は、もうさんざんに使ひ古されたといふ感があり、「又か」と鼻につくのであります。困つたことにはこの借りもの然とした古い手が、一句の肝心の覘ひであるかの如く見えます。この特殊表現はこの上もう用ふるに堪へぬと捨ててしまふわけでは決してありませんけれども、專らこの表現だけで立たうとする句は、遺憾ながらもう古いといふ

ことになるのであります。少し赤面の臺辭めいた意地惡に聞えるかも知れませんが、わたしには「つまづき鳴きぬ」が、この句の場合、若干模倣臭を帶びてゐる心地もするのであります。模倣が許されるのは、俳句のいろはを習ひはじめたほんの僅かの間だけのことです。その時期を超えてからの「模倣」は「陳腐」の温床として役立つばかりであります。

新しい古いは、作者の心の深さ淺さに因ることであつて、言葉の末節や、況んや材料の珍しさなどに拘はるものでないことは申すまでもありません。ところが實際はそれがとかく誤られ易いのであります。末梢的の言葉やいひかたの新しがりといふことについて申しまするならば、ここにかういふ句があります。

柿みのり幾枝大地を近うせり

地にふれて尙紅を吐く柿あまた

この句の着眼はわるいとは思ひませんが、表現はどうも感心出來ません。わたしはこれを添削いたしまして

柿たわわ地にもとどきて眞赤なり

などとしてみたらどうかと思ひます。或は「地にもとどきて」を「草にも觸れて」とか、「蕗にも垂れて」とか、いろいろの案もありませう。とにかく原句の「大地を近うせり」「紅を吐く」といふ表現が、作者にしてみれば大に苦心して新しい工夫を凝らされたところでありませうか、そこに強いて新しがつた痕が見えすくので、清新よりも珍奇となつてしまつた觀があります。どうも焦つて新を趁ひ過ぎてゐるふうが見えるのであります。それは決してよい結果を齎さないばかりか、却つてそのために一句が淺薄になつたり、厭味になつたりといふ悪い方へ働くのであります。添削句はそのめくを抜き、きめを細かくこなしたつもりでありました。

（原句）星生れて風の茱萸の葉銀を濃く

夕空に星が瞬きそめ、銀色の茱萸の葉が風でちらちら吹かれ光る情景を捉へたところは、感じは新しくみづみづしてゐるとはいへると思ひますが、それは「銀を濃く」といふ一見新しさうな下五の表現とは全く拘らないばかりか、このなまなましい、どぎつい下五字のために、一句はよほど損をしてゐることを知らねばなりません。どうもうまく添削が

出來ませんが、假に「銀を濃く」を「きらきらと」とか何とかするだけでもずつと好感がもてると思ひます。

材料のことを申しまするならば、たとへば飛行機雲——材料としては恐らく一ばん目新しいものでありませう。しかし飛行機雲を詠んだ句が、卽ち新しい句、といふわけには決してゆかぬのであります。むかし電話といふものが日本に始めて開かれた時分に、月並宗匠が電話のことを詠んで新しがつたとかいふ話を聞いた覺えがあります。その俳句——發句といはねばならないですか——が、どんなものであつたか知りませんが、電話を詠んだためにその宗匠の句が新鮮であり得たらうとは考へられないのであります。大戰爭の興奮ほど新鮮潑剌なものはありません しかもたくさんの「陳腐な」戰爭俳句を見せられるといふことは、まことに悲しい皮肉といはねばなりません。わたしはよく例に引くのでありますが、上が「戰へる國靜かなり……」で、下五字だけが、床の間の置物のやうに置き變へてある句を、どれほど見たことかわかりません。皆さんのお作りになつたものにしても、たとへば「看護婦の見てゐる」何かをしたとかいふ句も、何度も何度も繰返されると、だん

だん類型の弱味を見せてくるのであります。英靈を迎へる驛頭の雨だとか、幾人かの子を御國に捧げた親のどうとかいつた類の句は、作者の心持には同情を禁じ得ないので、選者の情としては實に忍びないのでありますが、千篇一律のさういふものを作品としては、どうしても頂戴することが出來ないのであります。大戰爭以來の、曆日的には若く新しい句が、作品としては氣の毒ながら陳腐の一言に盡きるのであります。

わたし自身の耻を打ちあけますが、わたしはいつかこんな句を作りました。

大日本は神國なりと讀始

ところが或る句會に出席しますと、全く同じ他人の句に逢着しました。これは全く暗合ではありますけれども、わたしはあんな句を發表しなければよかつたと、臍を嚙む思ひをいたしたことでありました。この句の場合は前にも申したやうな、一つの着想そのものが形式を伴つて、直に一句の全部を成してゐるもので、間々有り得る暗合ではありますが、作家としては名譽ではありません。考へてみると、讀始の季題で、神皇正統記の冒頭をそのままかういふ手法で一句に扱はうとしたその着想自身が、やつぱりもう古いのだつたと

思ひます。古いといふことには、かういふ古さもあるのであります。形の破格變調をもつて、心の構へかたの古さを胡麻化すことの出來ないことは申すまでもありません。

然らばどうしたら陳腐に陷らないことを得るか——難かしい理窟を抜きにして、極く卑近な教を申しまするならば、感じを述べることをしないで、具體的に物を寫生することを心懸ける、そして一方に、つとめて古今の例句に眼をさらし、先人の足痕を無意味に踏まないやうにすることであります。現にここにかういふ句が來てをります。

松の影疊にさせる月夜かな

かういふ古人の句の意味のない繰返しなどは、平素少し例句集に目を通してをられるならば、もうなさらないはずだと思ひます。

要するに本當に新しいとはどういふことか、また、古いといふことにも心が古び、黴が生える古さもあれば、表現が型に嵌つてしまつたといふ古さもある——さういふいろいろなことを、自分でとつくりと反省熟慮しなければならぬのであります。

次に多くの投句を見てゐて氣のつきますことは、表現の上で、とかく言葉が多過ぎるといふことであります。一體俳句は、考へ得らるる最短の詩形として、聯想の文學であることを特徴といたします。卽ち表に少く言つて、內に深く藏するゆきかたをしなければならぬものなのであります。そのことは俳句理論としては誰ももう十分心得てゐるはずなのでありますが、さて實作となると、つひ材料を慾ばつたり、自分の感情を知らず識らず人に押しつけたり、あくどい粉飾をして自分ひとりいい心持になつたり、といつたことになりがちなものであります。二三の例をあげてみませう。

（原句）今年又嚴寒に勝ち北守る

この場合「嚴寒に勝ち」が力み過ぎて、却つて一句の力を弱めます。これを改めまして

嚴冬のまためぐり來し北を守る

としますと、柔かみの底に凜然とした氣魄を湛へた、眞に勁い一句となると思ひます。もちろんさういふ效果は、「めぐり來し」といふ言葉の大らかな響、「北を」の「を」といふ助辭の栞などからも來るのでありますが、何といつても「勝つ」をわざと言ひ殘した效果に

由來するところが大きいのであります。

私物燒き椰子生ふ國へ征く覺悟

の「覺悟」を割愛して

私物燒き椰子生ふ國へい征くなり

とするだけでも、表現が著しく簡素になつて、一句を大分見直すと思ふのであります。ところがそれを反對に、「い征くなり」では何だかもの足りないやうな氣がして、何とかひねくつてみたくなる、餘計な粉飾を施してぶちこわして、自分ではそれがわからない、といふことが隨分多いのであります。藝といふものは素人ほど、へたほど、あくどく、高いものほど、淡々と枯れて來るものだと思ひます。俳句の場合でも少しも變りはないのであります。

要するに十分に省略法を活用して、短い言葉に含みをもたせる、といふことになるのでありますが、その省略は、一方では材料の節約といふことになり、また一方では言ひまはしの謙遜寡默といふことになるのであります。

（原句）秋草や摘みて淋しき花の數

これを假に

秋草を摘みそろへたる淋しさよ

と直して見ますと、原句の下五の「花の數」といふ夾雜物が除かれまして、すつきりした一句の姿となるとともに、作者が憩へようとしてゐる、しみじみとした、沾れひたるやうな感じは、そのため一層濃やかになつて來ると思ひます。

なほ序ながらこの句の場合には、「淋し」といふ感じを陳べた言葉がよく利いてゐますが、かういふ直接に感情を現はす言葉は、ややもすると一句を甘ちよろくして、客觀詩獨特の迫力を失ふ危險を多分にもつてゐることをも知らねばなりません。殊に初學の間は、淋しだの、悲しだの、うれしだの、樂しだのと、あらはにいはぬやうに心懸けることが賢明であると思ひます。たとへば

（原句）白萩の句を送り來し姉やさし

この場合の「姉やさし」は、お喋舌りが過ぎてゐますし、「やさし」は甘い感傷の弱さを

感ぜしめます。思ひきつて簡素に

白萩の一句を送り來せしのみ

としてみたらどうでせうか。かうしますと「やさしき姉」は姉だか、友達だか、そのへんすべて讀者の自由な想像に任されてしまつたわけでありますが、聯想の文學としての嚙みしめた味――汲むに從つてあとからあとから滾々と湧いて來るといつたふうの味――といふものは、却つて深くなるかと思ふのであります。

（原句）枯眞菰しどろに伏して寒目高

この句の場合の「枯眞菰」と「寒目高」とは、單に材料として二つも贅澤であるといふだけでなく、その各々が一つの季題でありまして、この句は所謂季重なりの問題にも觸れてゐるのであります。季重なりを絕對に排斥するわけではありませんけれども、季が一句のうちに重複するために感じが割れ、一句としての集中的な效果が損はれ、結局中途半端な力の弱いものになつて終ふ惧のあることは爭はれないのであります。枯眞菰といふだけで讀者はもう、大きく廣い聯想の世界を繰りひろげるのであります。その世界はどこまで

も枯眞菰を中心としてその周圍に擴がるのであります、ところが讀み下していつて、別に寒目高といふ季題――これは季題としては相當强引な新季題だと思ひますが、その點は姑く措きます――が堂々と登場して來たとなりますと、讀者はこれを中心に、新にまた一つの聯想の世界を展開しなければなりません。二つの季題をもつた兩頭の蛇の兩頭は、お互にお互の力を弱め合ふ結果となつてしまふのであります。所詮二つの季題のいづれか一つが割愛さるべきでありまして、古來季重なりが原則的に否定されてゐるのは決していはれないことではないのであります。この句の場合も、あまり巧みな添削とはいへないかも知れませんが

ひろびろと枯れひろがりし眞菰かな

とか

枯眞菰しどろもどろに敷き伏しぬ

などとする方が、少くも俳句的表現法として本格的であるといふことになるのであります。

（原句）颱風や厨に夜半の虫の聲

これを添削しまして

大風の夜の厨の虫の聲

この二つを比較してみますと、季題の颱風が季題でない大風に變つただけでも、一向の感じが大分一つに纏つたものになつたかと思ひます。

（原句）白雲や鰹棲む海はただ蒼し

季題は鰹で、夏の句であります。「白雲」の方は季題ではありませんけれども、やはり削除さるべき夾雜たることに變りはありません。

まんまんと湛へて蒼し鰹の海

とか、或はまた

鰹の棲むてふ海蒼く湛へたり

などとすべきであらうと思ひます。

ここで少しく季題のことを申してみたいと思ひます。俳句は一口に季題諷詠の詩ともいはれることは御承知の通りでありますが、個々の句について、季題が一句のうちに占めてゐる位置を檢討いたしますと、必しも一樣ではありません。どこまでも季題そのものを攻め、季題を焦點に十七字の世界が展けてゐるといふふうな場合もあれば、別に一句の主題となる事柄があつて、季題はその事柄に對してワキを勤めてゐるといふふうな場合もあります。この第二の場合におきましても、從たる季題のもつ感じは、主たる題材たる事柄の感じと、しつくり調和するところがなければなりません。極端の場合、たとへば山茶花といふ季題が、たまたまそこに山茶花が咲いてゐたから、「山茶花に」と冠せたといふやうな、季物が輕いワキ役に立つてゐる場合でありましても、なほ山茶花がそこに出て來ることが、不自然を感ぜしめるやうではいけないのであります。最少限度、山茶花が一句の感じの纏りを邪魔をしないことが必要なのであります。ここにかういふ句が來てをります。

トマト熟れ小さき科を許さざる

小さき科を許さないといふことは、それだけでは幾分曖昧を免れないとしても、なほこ

れに配する季題如何によりましては、一句の心として生かし得ないことはないと思ひますが、何分にも季題がトマトであつたのでは、作者の懇へようとしてゐる感じが讀者にうつらないのみか、一句の意味さへぼやけてしまつたことになると思ひます。畢竟選ばれた季題が妥當でないのであります。どういふ季題を選んで來たらいいかは作者に考へ直して貰ふ外ないので、はたからは容易にいへない場合と思ひます。それからまた

對岸に草食む山羊や秋うらゝ

といふ句が來てゐます。「秋うらゝ」は一句の懇へようとしてゐる氣持を邪魔してゐるとは思ひませんから、これでも許せないことはありません。しかし一句を讀み下してどこか慊りない感じのするのは、「秋うらゝ」でなければならぬといふ必然性が、この場合のこの季題には缺げてゐるからであります。作り方の教として昔から「動く、動かぬ」といふことがいはれてをりますが、この「秋うらゝ」は、しつかりこの句のうちに地位を得て動かぬとはいへません。それだけこの句には安定感が乏しく、一句の力も弱いのであります。

（原句）吾子征きてはやも一と月秋茄子

（添削）吾子征きてはや一と月の暮の秋

わが子が出征してから、いつかもう一と月になる、といふ感慨は、あまりにも通俗すぎてただそれだけでは人を感動させる力がありません。その下の五文字に何が來るかによつてこのありふれた感懷が生きたり生きなかつたりするのであります。添削句のやうにここに「暮の秋」と置いたところで、大したことはない、むしろ平凡かも知れませんが、しかしこの平凡は平凡なりに素直に誰の心にも受入れられます。いやなところとか、或はわからないところとかは少しもありません。ところが原句は「秋の茄子」といふので、さあわかりません。恐く作者はいま秋茄子を實際自宅の蔬菜園か何かにまの當りにし、そしてその茄子は一と月の前、わが子が手塩にかけたものであつたとかいふやうなことがあつたりして、その實感が、この句の季題に秋茄子を置かせたものであつたのでもありませうが、しかしそれはあまりに作者一人だけのものであり過ぎまして、秋茄子といふものの客觀性、普遍性に缺けてゐると思ひます。何も知らない讀者はこの句の場合秋茄子をただ突飛に感ずるだけで、作者のさういふ特殊な實感を推感することが出來ないのであります。推感せよと

いふのは、いふ方が少し蟲がよすぎるのであります。これを秋茄子といふ季題の面から見たとき、季題としての妥當性が缺けてゐるといふことになるのであります。むしろ「暮の秋」の、平凡でも妥當であるに如くはないと思ふのであります。

親舟に漕ぎ寄す舟や夜光蟲

景色はよくわかりますが、どうも夜光蟲が十分に働かぬやうな慊さを感じます。夜光蟲を從的に扱ひ、たまたま夜光蟲が光つてゐたから夜光蟲と置いた、といふ場合としては、「親舟に漕ぎ寄す舟」といふのが、ありふれ過ぎて重さが足りませんし、反對に、夜光蟲の季題を主位に置く場合としては、親舟子舟の情緒はむしろこつてりし過ぎて邪魔になるかと思ひます。結局、夜光蟲といふ季題がこの場合に妥當しないのだと思ひます。ところで、これは意味を全く變へることになるので添削とはいへませんが、これを

親舟にしたがふ子舟水の秋

といふやうに直してみますと、少くも一句の感じのよく通るといふ點において、見違へるばかりになつたかと思ひます。「水の秋」といふ季題の感じと、人間の子供が親に手を引かれ

えやうに子舟が親舟に曳かれてゆくといふ事柄の、あはれな感じとの間に、一脈相通ふものがあつて、その二つが渾然ととけあつたところから醸される情緒は、しみじみと愬へて來るものがあると思ひます。新しいとか鋭いとかいふ類のものでなくても、何かもののなつかしい、いい感じだと思ひます。

格納庫明け放ちある春野かな

よりも

格納庫明け放ちある夏野かな

の方が、感じがよく出るやうな氣が、わたしにはするのであります。この場合、春野では何か偶然的な感じがするのでありますが、夏野には必然性があるやうな心地がいたします。尤も感じのことでありますから、或はわたしだけのことかも知れません——。

（原句）待つてゐし電報來たる秋の雨

この句には「三男陸士合格」といふ前書があります。わたしはこれを添削しまして

待ち兼ねし合格通知菊の雨

としてみました。まづ第一に、この場合「秋の雨」がいかにも感じを運ばないと思ひます。なるほどその時秋の雨が蕭々と降つてゐたの事實かも知れませんが、それは自然現象としての事實でありまして、合格通知の歡喜と融け合ふ詩材として取りあげるには適當でなかつたのであります。いはば詩的眞實ではないのであります。ただしかし、その日の雨といふ事實をとり入れたい作者の氣持もわかると思ふので、そこでめでたく、明るく、ちようど季節の「菊の雨」としたらどうかと思つたのであります。結局秋の雨といふ季題の客觀的妥當性の問題に歸するのであります。季題は概念に固定せしめられては惡らぬとともに、季題の感じには、わかる人人はわかるといふ客觀性普遍性がなければならぬ、といふことを認めなければ、遂には季題を否認し、やがて俳句そのものの獨自性をも否認することとなると思ひます。

なほこの添削におきまして「待つてゐし」を「待ち兼ねし」としたのは、合格通知を受けたといふやうな場合の、氣持のありのままの流露を欲したからであります。更にまた原句とその前書との關係でありますが、前書の意味は、原句の上には全然現れてをりませ

ん。これは本當ではないと思ひます。俳句は十七字で首尾一貫した獨立性をもつてをり、前書のある場合でも、前書は一句の意味を補充する役目をもつに過ぎません。前書と前書付の句との間の、お互に響き合ふ微妙な關係をあやなすのは、極めてむつかしいものでありまして、所謂慶弔の句の類が、よほどの大家の作でない限りたいてい感心しないのもこのためであります。よく初心のかたが「途上所見」などといつた類の單なる說明をつけることがありますが、それが前書として無意味であることは申すまでもありません。

秋暑し戰帽振つて別れ征く

中七以下の叙しかたもいかにも拙でありますが、それは姑く措いて、「秋暑し」といふ季題の客觀性は、どうもこの句の主題に反撥するといふ氣がいたします。戰帽をうちふつて征途に上る別れの感じと、秋暑しといふことの感じとが、ぴつたり契合しないと思ふのであります。秋暑い日であつたといふ事實は、季題として作品の中に出るべき幕ではなかつたのであります。

秋茄子の涼しき膳に向ひけり

――とかく秋茄子の句ばかりかたきにするやうでありますが、これは全く偶然に過ぎません――この句の秋茄子など、わたしには殆んど旋毛曲りとしか思へません。素直に、胡瓜採でも、茄子漬でも何でもいいところではないでせうか。

さきに季題を概念に固定させてはならぬと申しましたが、それはどういふことか、一例を示しますと、

秋風や病室のものみな白く

これは作意もよく通り、句の姿も整つてをるのでありますが、讀んでどこか慊りないのは、主として「秋風」といふ季題が作者の頭の中でやや概念化されてゐることに因るのではないかと思ひます。「秋風」の感じを、何かうら淋しくしらじらとした感じにきめてかかつて、病室のもののみな白いことと、これを安易に結びつけた、結びつけて慥へた――さういつた感じはないでせうか。實感よりも、觀念で秋風を持つて來た、といふ臭はしないでせうか。畢竟、季題「秋風」が概念化された結果であります。秋風などを藉りて來ずに、たとへば、現にそこに見る枕頭の菊を採り

菊挿して病床のもの白し

とでもする方が、よほど實感的な力が出ると思ひます。この場合の菊には全然概念化の弊がありません。一方では季題の客觀性を說き、一方ではその概念化を戒める、そこらがむつかしいところでもあり、また季題詩の世界の面白いところでもあるのであります。

少し方面をかへまして、表現といふことについて申してみませう。藝術は表現であると申しまして、同じことでも、これをどういふ言葉を用ひ、どういふ調子に整へ、どの一隅を捉へて、どんなにいひ廻すかといふことで、立派な作品が出來上つたり出來ずに終つたりするのであります。

（原句）雜煮食ふこゝ戰塵や櫻花咲く

添削しまして

みんなみに雜煮を祝ひ櫻咲く

原句はビルマ派遣の勇士の作でありまして、正月に雜煮を祝ふ陣中に、ここ南方では櫻

が咲いてゐる、といふのであります。異國的な情調のちよつと面白い把握だと思ひます。ただ表現として、いかにもこなれてをりません。「雜煮喰ふ」とか、「ここ戰塵」とか、「櫻花」とか、上五字中七字の切りかた、下五字の据ゑかたなどすべて粗雜で、濃やかさが足りません。陣中の句として無理もないかも知れませんが、作品としてはやはり十分に磨きをかけて下さることを希望しなければなりません。

（原句）秋草に奉仕疲れの身を横に

これを添削しまして

秋草に憩ひて奉仕疲れかな

原句の下五「身を横に」はいかにも生硬不熟であります。また上五字と下五字をどちらも「に」でとめてゐる技法は、明かに調子を破ります。これは聲に出してうち誦んじてみると、耳觸りが自分でもきつと氣になるはずだと思ひます。さういふ點は何度も何度も推敲を加へて、耳に來る響が滑かに快適になるまで、練り直し鍛へ直ししなければなりません。秋草に、想ひて、奉仕疲れかな——このテニヲハの斡旋と、切字の使ひこなしによつ

て、少くも句の姿形だけはたいへん見直したかと思ひます。

五月雨や黄河を夾む陣久し

これを添削しまして

大黄河夾む滞陣五月雨るゝ

「や、かな」で二度切ることが所謂二段切として忌まるることは前にも申したかと思ひますが、この原句の「五月雨や」で上五を切り、「陣久し」と下五を終止言で結ぶのも、やはり二段切でありまして、そのため一句の骨組の脆弱を來してゐることは爭はれないのであります。添削句は大分助辭を省略してゐますが、必しもそのたあ窮屈な感じを生ぜしめてはをらず、殊に中七字の、滞陣といふ名詞の下にテニヲハも切字もなく「滞陣五月雨るゝ」と、棒に、一氣に下五に續けてゐる、この省略的算法は、これをよく生かせばいつでも一句の調子を緊密にすることに隨分役に立つと思ひます。なほ上五字が名詞でなく、たとへば「長江を」とでもよみ得る場合であつたとしたら「を」のテニヲハ一つのために一句の格調に曲折を生じ、句の姿が一段と美しくなるのでありますが、どうも黄河を揚子江に勝

手にかへるわけにはゆかぬのはやむを得ません。

（原句）かわくことなき天幕や雨期長し

これを添削しまして

天幕のかわくことなく雨期長し

一體この原句のやうに中七字を「や」で切る手法は、極くありふれた表現の型でありますが、この型は往々にして調子のたるみを齎します。「かわくことなき天幕」と叙べて來て、そこで「や」と一旦えんこすることが、よく働く場合には俳句らしい形を調へ、ゆったりとした落着を見せて、一句の感じをよく運んだりするのですが、悪くすると、それがらくな途をいい氣で歩く、苦勞をしようとしないといふことになつて、そのため一句を讀み下した感じがひどく微溫的になることがあります。その後の場合が實際は隨分多いのであります。かわくことなく雨期長し、と息をきらず眞直に叙した調子と、よく嚙み較べて戴きたいのであります。もう一つ例を擧げてみませう。

（原句）餌を拾ふ鷄の歩みや鳳仙花

前の句の下五「雨期長し」にはまだ動がありましたが、この句の下五は名詞で止まつてゐます。下五の名詞止めは、中七や切は調子を弛緩させる惧をもつ典型的の形であります。ところでこの句の「餌を拾ふ」「鶏の歩み」など藝のないひかただと思ひますが、その點は姑く措くこととします。中七を「や」で切つて下五に名詞を据ゑた形だけについていふのですが、この型は重寶な鑄型でありまして、これへ融いたメリケン粉をぢやあと垂らし込んで炙れば、造作もなくいくつでもお菓子が燒けるのであります。その代りさういふお菓子には、見た眼の美しさから味覺をそそられるといふことが全くありません。やはり念を入れて、一つ一つ慥へた餅菓子か何かの、指の痕のわかつたりするところがありがたいのだと思ひます。「鶏の歩みや」を「鶏ましろなる」とでも何とでも、この場合、とにかく「や」を避けることだけで、一句を讀んだ感じが違ふと思ひます。これはひとり中七字の「や」だけの問題ではありません。型にはよるべしよるべからず。型にはいつも生きた精神が籠つてゐなければならぬのであります。五七五を前提としてゐる俳句の表現は、性質上型式の固定を來し易いのは當然であります。中七や切を甲號型とすれば乙號型丙號型い

くらでも擧げることが出來ます。わたしはその甲號型だけを眼のかたきにするわけではありませんので、ただこの型の病弊が特に著しいものがある事實を認めて、極く卑近な實作注意として特にこれを警戒したに過ぎません。誤解のないやうに願ひます。あらゆる「型」を肯定すると同時に、どんな型にも囚はれてはならぬ、といふのがわたしの考へであります。

型のことで、これは少し形式の末節に亘るやうでありますが、よく上五字と下五字が、全然對照的に對立した組立の、煙管式の格好をした句を見ます。ここにもかういふ句が來てをります。

蟲の聲開け放ちたる坊の畫

の、上の「虫の聲」と、下の「坊の畫」——この形であります。これでは二本立のために足許がぐらつき、句の形が調はないのでありまして、何もかういふ御叮寧な相似形をとらないでも、たとへば、

蟋蟀や開け放ちたる坊の畫

でもよい場合ではなかつたでせうか。これで一句がしやんと一本の脚で立つと思ひます。

次に表現は出來るだけ、平易に、素直に、ありたいと思ひます。何よりもまづ意味が通らなくては問題になりません。それから芝居氣や當て込みを愼まねばいけません。ごてごてと粉飾することも、素直に大人しくといふことに副ひません。

三年の闘病の窓銀河澄む

「銀河澄む」と意氣張るよりも、むしろ大人しく、調子なだらかに

闘病の三年の窓の天の川

などとする方が、讀者は素直に、作者の心に同感共鳴してくれるのではないでせうか。

「銀河澄む」にはどうも匠氣が翳さしゐるやうに思へてなりません。

この「銀河澄む」などは、わからないといふことは少しもないのでありますが、これがだんだん嵩じて來ると、作者のいはうとする意味までも曖昧になつて來る惧があります。

たとへば

黄昏の試歩にただある野分かな

この「ただある」などは、作者の陳べようとしてゐるものが何であつたか、心持がはつきり傳はつて來るとはいへないやうであります。付度するに、多分

夕野分試歩の踵をかへしけり

などといふ場合であつたかと思はれますが、これで心持の含みも無理なく現はれますし、表現も平明といふことになると思ひます。作者にしてみれば、さういふ言葉やいひかたのあることを知らなかつたといふ言譯をもたれるかも知れませんが、問題は、作者の心持の根本に、出來るだけやさしく、平易に、いはうとする氣が十分であつたかどうかといふことであります。この句の場合、作者にどうもそれが足りなかつたのではないかとわたしには思へるのであります。

老いてふあたりを壓しちゝろ鳴く

これなどももつと平易に

老木の影はだかりてちゝろ鳴く

くらゐではどんなものでせうか。「あたりを壓し」は「威風堂々」と上へ冠せたいやうな漢

文口調で、俳句の中にかういふふうにもつて來ると、いかにも空虛な力みに聞えます。また強て鴨脚樹でもなければならぬ場合でもないかと思つて、口調よく右のやうに直してみたわけであります。これは少しはげしい例でありますが。

植ゑ遺る南瓜孤島の戰友に聞く

南海の孤島に南瓜作りなどもして來たといふ話を、歸還の戰友から聞いたといふのでありますが、いかにも調子がぎくしやくしてゐて、調べの美しさに缺け過ぎます。

その島に南瓜作りし話など

或は下五は「てふ話」などといふ案もあるでせう。とにかくそんなふうに簡素化して始めて作品らしくなるかと思ひます。南の孤島といふことは「その島」といふ含みのある言葉から來る想像に委せました。歸還戰友の談であることは「作りし」「話など」といふので、これもほぼ想像されるでありませうし、また想像に殘したところで始めて、漂渺とした味が出るかと思ひます。

咳りて病友に看護らる夜の秋

これを添削しまして

病友にいたはられつゝ咳いりぬ

この原句には「夜の秋」といふ季題――往々初心のかたは間違へてゐるやうですが、これは秋の季題ではなくて、夏の季題であります――の恰當性の問題とか、「看護らる夜の秋」といふ續けかたの文法上の問題とか、外にもいろいろ弱點はありますが、何よりも一句を讀み下して調子の惡いことが一番困ると思ひます。短歌の方では調べといふことが喧しくいはれるやうでありますが、俳句におきましても調べはやはり大切であります。作者の感動、美しい詩心の動き、所謂琴線が、美しい言葉、美しい言ひまはし、奏でるやうな格調のよろしさにさながらに乘つて流れ出てゐる、さういふやうでなければなりません。その點からみて「病友に看護らる」よりは「いたはられつつ」の方が、よほど立ち勝つてゐると思ひます。「いたはる」といふ言葉から受けるしほしほとした感じ――語感――だけでも、相當なものだと思ひます。

事の序に、これは前にも觸れた問題でありますが「病友」とかいてともと訓ませる、か

いふ筆法は少し蟲がよすぎるやうであります。前の句も「戰友」をともと訓ませてゐます。その外たとへば「傷兵」をへい、「軍艦」をふね、「車窓」をまど、「亡母」をはは と訓ませたり、「櫻島」にしまとルビを振つたりする、みな無理と思ひます。俳句がいかに眼で見ることを主とする文學だといつても、ここまでは許せないと思ひます。慣用の程度にもより、時と場合にもよることで、たとへば同じ「みる」といふ言葉であつても、字でかくと「診斷」といふ字が宛てられてゐる。それが前後の關係で、强引ともいへず不自然でない場合もありませう。放縱な行き過ぎが戒められねばならぬのであります。とにかく言葉は大切でありまして、文字を眼で見ればわかる——などと、決してそんなものではありません。「言靈の幸はふ國」と申しますが、言靈を尊む心がないところから、立派な詩——言葉の華——は咲きません。意味が通るはずだからといつて、なまな、不消化な、きたない、耳觸り、新熟語を勝手に創作することなども、つまりは言葉に對する敬虔な心持が缺けてゐるか、言葉に對する感覺の遲鈍のせゐだと思ひます。

「淋し」「悲し」といふ意味の下五を、「淋しけり」「悲しけり」などとしてゐるのを間々見

かけますが、こんなのは日本語の虐待を通りこして、破壞といはねばなりません。しかしまた言葉は生きものでありまして、絶えず生長し發育しつつあるものであり、一方俳句には俳句獨特の修辭法もあれば、文法もないではありません。何事においても繩墨は發達を阻害する因であります。俳句の言葉についてもそのへんの辨へがなくてはなりませんが、ただこれは勉學の第二期第三期に入つてからのことであるかも知れません。

秋泥にまみれし兵馬憩ひをり

春の泥、或は春泥は季題にまで熟した美しい言葉でありますが「秋泥」は通用いたしません。「春泥によごれし兵馬」とすれば、作品そのものとしては、一應出來上つたものになりませう

舊庵に葉月を迎へ靜こゝろ

この句は外にも數多問題を含んでゐますが、まづ何よりも、冒頭の「舊庵」といふ言葉はいかにも耳觸りであります。「舊居」とか「舊廬」とかあるべきだと思ひます。

還り來て舊廬の虫に靜こゝろ

これで一應の添削になりませう。

平易に、といふことは、散文的に説明することでないことは申すまでもないのですが、平易と平淺とはあやまられ易く、あまりに平易平易といふのに狎れて、いつの間にか詩を忘れて十七字の散文を作つてゐたりすることもありがちです。詩はやはり面白く——誤解され易いいひかたですが——いはれねばなりません。やまもあり曲折のあやもあつて、表現がはじめてあるわけであります。

いたつきの窓に俳書を曝しけり

は散文を讀む感じですが

いたつきの窓に曝してみな俳書

とすると、いひかた一つで「詩」の香氣が俄かに高くなつて來ると思ひます。

棗採りに行きて還らぬ部下のあり

よりも

棗採りに行きしままなる兵一人

の方が面白くよめるやうな氣がするのは、わたし一人の趣味でせうか。

理由を詳細に申上げる違もありませんが、手當り次第に机上の句を拾つて添削を加へて、御參考に供してみませう。

（原句）兵士等はまどろみてあり月を待つ

（添削）兵等みないねたる月を待ちにけり

原句の中七はいかにもたどたどしいといふ感じがいたしました。

（原句）草笛に明日の生命も憶ひけり

（添削）草笛を鳴らしてけふの命あり

「も」といふ助辭は實にくせものでありまして、よく働かせると實によく役に立つのでありますが、わるくすると甘えかかつた持ちかけになつて、たまらなくいやなものであります。原句の「も」も安つぽい感じであります。

（原句）蒲公英の座に沈めあり電話線

（添削）蒲公英や草に沈める電話線

長い線を一株の蒲公英に沈めるといふのは、ウソではないでせうか。まさか「蒲公英の座」に未練をもつたわけではないでせう。

（原句）誘蛾燈ともりそめたる試歩路かな

（添削）誘蛾燈ともりそめたる試歩かへす

試歩路はいかにも拙劣だと思ひます。それとも軍隊の慣用語ででもあるといふならば又おのづから別であります。

（原句）夜涼みの椅子を持ち寄る椰子大樹

（添削）夜涼みの椅子を持ち寄る椰子の下

原句では椰子の大樹が椅子を持ち寄るやうないひかたになるではありませんか。

（原句）明月や椰子の葉末を離れたり

（添削）今日の月椰子の葉末を離れたり

原句は一段切です。四字の明月を今日の月と五字でいひかへ得る、といふやうな類の智識は、普通の歳時記一冊あればすぐ得られます。歳時記だけは座右に離さず、隙さへあれ

ば見てゐるやうにしたいものです。尤も陣中には無理な註文かも知れませんが——

（原句）萩の邊に謠曲會とて莫蓙展べぬ

（添削）萩の野に謠の會の莫蓙展べぬ

謠曲會とて、は何か重苦しくはありませんか。

（原句）潮しぶきあがる徑に石蕗の花

（添削）潮しぶき徑にあがる石蕗の花

前者の散文的直叙法に比べて、ほんのちよつとしたことでも、後者の顚倒法は表現としての面白さを見せてゐるかと思ひます。

（原句）くだされし盆燈籠に灯を入るゝ

（添削）賜はりし盆燈籠に灯を入るゝ

「くだされし」「賜はりし」同じやうなことでも、言葉のこなれた具合、洗練といふ點ではり相當違ふと思ひます。

（原句）おろそかにすまじ粒々ヒマをむく

（添削）一粒をおろそかにせずヒマをむく

これでは却つて散文に近くなつたのではないかと思はれるかも知れません。散文的韻文的といふのも大綱論だと思つて戴かねばなりません。この原句の中七はいかにも窮屈であります。

（原句）間引菜のかぼそき根かも土にほふ

（添削）生ひ出でし間引菜の土匂ひけり

「かも土にほふ」は氣憚でいけません。尤も「生ひ出でし」も窮してゐることは認めます。

（原句）秋晴や供出材のこだましてゐる

（添削）供出の木を伐る谺秋晴

供出材の谺といふのは言葉として少し無理が感ぜらるるやうです。なほ序ですが、この着眼も新しさうで實はもう古い部に屬します。

（原句）氣の向いて秋蚊帳吊りて病よく

（添削）氣が向いて秋蚊帳吊りて病よく

「氣が向く」と俗語調でいつてはじめて、この言葉は生きて躍るやうな氣がします。氣の向いて、と取りすましますと、俄然生氣が失はれるやうに思ひます。

（原句）月今宵琥珀の酒を傾けぬ

（添削）月今宵琥珀の酒を傾けん

「傾けぬ」と事實に即いた叙し方になるよりも、「傾けん」と願望を含んだ將來の事として陳べられる方が、この句の場合のやうな情感は一層よく浮ぶと思ふがどうでせうか。

これらはいづれもたつた一つの助辭デニヲハの問題でありますが、その一文字をおろそかにせぬ神經の細かさを尙ばねばならぬのであります。

阿武隈の土手に南瓜の花ざかり

この場合に「土手に」がいいか「土手の」がいいか、わたしは「の」で採りたいと思ひますが、「の」とすると景色がやや變つて來ます。いづれにしてものでゆくか、にでゆくかをゆめゆめあだおろそかに考へないといふその心懸を失つてはならぬのであります。

だんだんとお話を續けてまゐりましたが、わたしは少し表現のことに力を注ぎすぎたかのやうに見えます。「句の心、句の姿」と申しますが、その姿形を整へる方に身を入れ過ぎたとお思ひになるかも知れません。しかしわたしは決して姿や言葉を特に重く見るつもりではありませんので、たまたまこの章の御話が添削をよすがとしたために、さうなつたといふだけであります。どうも一句の心の方は、添削をもつて矯めるといふことがしにくいのであります。その邊思ひ違ひなさらぬやうに願ひます。ここで少しばかり言葉や言ひ廻しを超えた直しかたを試みて御參考としませう。

（原句）上陸の夜は密林の露に伏し

これを直しまして

上陸の夜の密林の螢かな

もう一つ思ひきつて、

密林の螢上陸第一夜

などはどうでせうか。この句で考へて戴きたいことは、複雜な情景のうちで、ただ一つ

の何ものを捉へ來るべきかの問題であります。上陸の夜の密林の印象のうち、最も感銘深く、讀者をも最も動かすであらうものは何か、「露に伏し」ではどうもそこが物足りない氣がする、外に何かなかつたでせうか。密林の大きな螢のことはよく聞きますが、螢などはゐなかつたでせうか。――その螢が生憎ゐなかつたとすれば、ゐない螢を創作するわけにもゆかずそれまでです。外に何か探して戴く外ありません。それを探し出すのが、鋭く利く「俳句の眼」なのであります。

汗ふきて憩へる兵の顏黑し

一株の萩盛りなる小庭かな

霧晴れて松山の色濃くなりぬ

つんつんと彼岸花咲く谷間かな

日向水ぎらぎら光る眞晝かな

遠雷に慌てて辭する女客

これらの俳句はその內容から見て、或は詩としての匂ひ潤ひに缺けてゐたり、或はあまり

にも所謂「ただごとうた」に近かつたりして、遺憾ながら採ることが出來ません。いづれも表現技法以前の問題であります。平素から心を美しく養ひ、ぢつと物に見入つて奥深いところから、新しさと、もののまこと、とを發見して來るやうな眼を養ふことの外に途はないのであります。しかしただ擧げました句などは、さういふ眼が屆いてをらず、心が淺いとはいへ、積極的に快くない感じを人に與へるまでもないのは、まだしもであります。ところが、たとへば

短日の婢を罵りて歎く妻

といふやうな句になりますと、句の出來榮のよいわるいは別として、また作者としてはいろいろ言ひ分もありませうけれども、主婦が召使を罵り歎くといふことに、わたしはまづ好感がもてません。實感を詠むことは肝要でありますが、實感實感といひましても讀んで人の心を陰鬱不快にするやうなことは、詠まない方がいいと思ひます。今日は時勢も時勢でありますし、殊に白衣勇士諸君の作られるものなどにはさうしたものの影もささないのでありますが、以前には、現實に卽するとか、生きた社會を探求するとか、人間性に徹す

るとかいふ文學論が妙に歪曲されて俳句の世界に持ち込まれて、この美しい自然愛の文學の花園が蹂躙されかけたふうが見えたのであります。恐るべき俳句の危機だつたと思ふのであります。療養所の諸君の俳句にしても、諸君が肉體は病んでをられても精神が健全でをられるため、俳句が概ね明るく美しく健康的であることを、わたしはたいへんうれしく思ふのであります。療養所俳句ばかりなくすべての俳句がさうありたい、さうあらねばならぬと思ふのであります。

看護婦に臥し聞く虹の美しき

看護婦が窓に眺めて、とても美しい虹ですよといふその虹を、自分はベツドの上に寢ても見ることが出來ないといふのでありますが、「臥し聞く」のいひかたがこなれないのと、第一、「」句が何かそらぞらしくて實感が出てゐません。これを

看護婦の美しといふ虹見たし

とでもすると、少し氣持が率直に出るかと思ひます。「虹見たし」の素樸さが實感ありのままを、ほぼ傳へてくれるかと思ふのであります。この素樸さは俳句におきましては最も尊

重したいところであります。日常使つてゐる俗語を自由に生かして、しみじみと實感の滲み出た名作品――いかにも生活の詩たる俳句の名に背かない作品――といつたやうな例を、あまた見るのであります。

これでわたしの粗末なお話を終ります。たまたま机上にある材料を手當り次第に採りましたので、甚だとりとめないものになりました。俳句上達の途を一口に、といふことであるならば、わたしは自分の經驗からして、前にも申した三多の說――多く讀み、多く作り、多く捨てる――を以て、お答へとしたいと思ひます。

いまこの稿を補訂してゐる机上に屆きました雜誌「比枝」誌上、編輯高濱年尾氏の短章に、虛子先生の添削の一例のことが載つてゐます。添削のお手本としてここにその全文を藉りることとし、わたしの拙い添削指導の章を結びたいと思ひます。

言葉と便り　　年尾記

師の卓の大き筆硯虫涼し　　素哲

といふ句が父の選句では

## 卓上の筆硯大に虫の聲

素哲

と添削されてあつた。

「師の卓のとわざ〳〵云ふ必要はない。この句の中心は大きな筆硯が卓の上にあるといふところだから、そこをはつきりと叙べて、他は出來るだけ簡單にする方がよい。」と父は選句のあとで一言注意して呉れた。

「虫涼し、もそうなるわけですね」と訊ねると、「さうだ」と簡單に答へた。